日本醫史學雜誌

第19巻　第2号

昭和48年6月30日発行

原　著

「適々斎薬室膠柱方」について……大塚　恭男…(119)
西説内科撰要（2）……大滝　紀雄…(165)
種子島における痘瘡について……河内　和夫…(174)
華岡青洲による最初の全身麻酔の期日について…松木　明知…(193)
写経生と病気……新村　拓…(198)
Nicolaus Copernicus as Physician —on the fifth Centenary of his Birth—……Witold RUDOWSKI…(267)
General Anesthesia and Surgery by Seishu Hanaoka ……Akitomo MATSUKI…(245)

資　料

前野良沢，同良庵，高山彦九郎の書簡……(213)
虎岩　武の履歴書……土屋　重朗…(220)

例会記事……(226)

雑　報……(228)

通巻第1392号

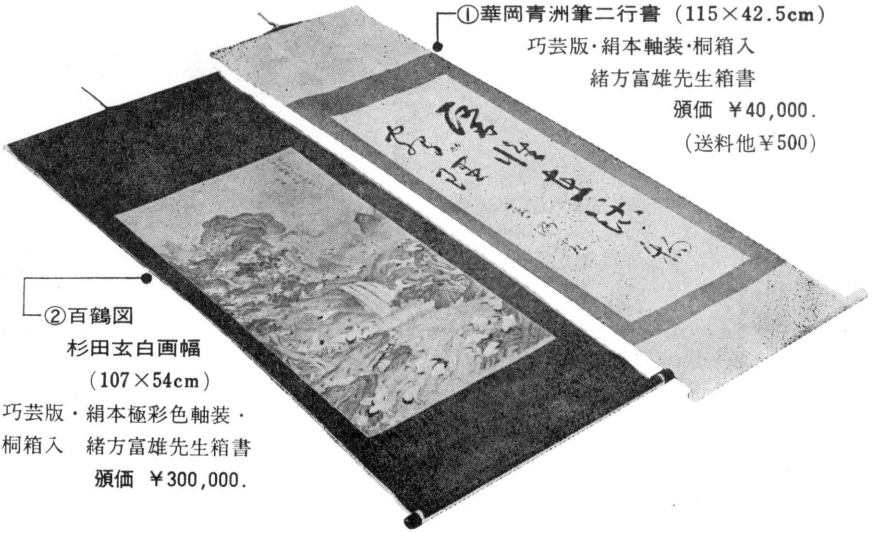
日本医史学会

東京都文京区本郷2—1—1
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替口座・東京15250番
電話（813）3111 内線 544

金原出版
創業百年記念事業

醫學の寶玉

創業100年 36000 金原出版



①華岡青洲筆二行書（115×42.5cm）
巧芸版・絹本軸装・桐箱入
緒方富雄先生箱書
頒価 ￥40,000.
（送料他￥500）

②百鶴図
杉田玄白画幅
（107×54cm）
巧芸版・絹本極彩色軸装・
桐箱入　緒方富雄先生箱書
頒価 ￥300,000.

わが国医学の宝玉を完全復元

醫聖 杉田玄白立像

好評頒布中！

日展評議員 長谷川義起 作

偉大な玄白と、似る、という二つの構成上の要素を、造形芸術として、調和の世界を彫り上げよう、昇華させようと繰返し追求して、出来上がったのがこの像である。

ブロンズ立像（高さ35cm）桐箱入・長谷川義起先生箱書
頒価三〇〇、〇〇〇円

①「活物窮理」とは生体について研究・探究することである。世界の近代外科の先駆となった華岡青洲は、「活物窮理」を外科医としての生命をかけた信条とした。

②百鶴図は、杉田玄白が六十歳の誕生日に仕上げたもので、繊細華麗に描かれている。製作は技術の粋を尽し独自の手法により復元、仕上げ部分は手描きによる。

売捌所／株式会社**金原商店**　**製作所**／財団法人**日本医学文化保存会**

『適々斎薬室膠柱方』について

大塚恭男

日本医史学雑誌・第十九巻
第二号・昭和四十八年六月
昭和四十八年二月十日受付

一、緒言

緒方洪庵に「適々斎薬室膠柱方」の作があつたことは最近まで知られていなかつた。それを緒方富雄先生がわれわれに紹介せられたのは日本医史学会の昭和四十五年九月二十六日の例会においてで、その要旨は本誌第一六巻第三号（昭和四十五年九月）に掲載されている（緒方富雄「緒方洪庵『適々斎薬室膠柱方』と『解剖略式』」）。

先生はその席でこの資料の研究を私にゆだねられた。緒方先生は、本書に洪庵が二十九才で大阪瓦町にはじめて開塾した天保九年（一八三八）の十二月の日付の自序があることに着眼し、まだ臨床経験が十分といえない時期に、どのような系統をたどってこの処方集ができたか、そのことが明らかになれば、当時の蘭学医が処方を修得する経路と経過の一端がわかるであろうという問題提示をされた。そして洪庵の場合には宇田川榛斎の『遠西医方名物考』、『和蘭局方』、『坪井信道の『製煉発蒙』、洪庵等共訳の『袖珍内外方叢』などがさしあたり問題となるのでないかと示唆された。

この報告は、それに対する私の研究成果である。

二、『膠柱方』ができるまで

『膠柱方』が草せられたのは、洪庵が医学の修業を一通り終えて、一本立ちの蘭学者として大阪に開塾した天保九年

（一八三八）のことである。それまでの洪庵の修学を辿ってみると、文政九年（一八二六）から同一三年までの間、中天游に、天保二年（一八三〇）から同六年までの間、坪井信道に師事しており、天保七・八両年は長崎に遊学し、同九年初めに長崎を発って帰国している。また坪井塾にいた間に、信道の師である宇田川榛斎（天保五年一二月四日没）の指導をも受けており、天保六年刊の『遠西医方名物考補緯』の凡例を執筆している。

従って、その学問上の系譜からみる時、宇田川榛斎著、榕庵校補にかかる『新訂増補和蘭薬鏡』、『遠西医方名物考』並びに『同補緯』坪井信道著の『製煉発蒙』らの諸知識が洪庵の学問の血肉となっていることは当然である。さらに、これに加えて長崎遊学時代の労作である『袖珍内外方叢』の訳業が、それまでに修学した知識の整理に役立ったことと考えられる。

製剤に必要な化学の基礎知識並びに実験については、宇田川塾、坪井塾で十分に研鑽を積んだことであろう。『製煉発蒙』は化学、製剤学の入門書であり、『遠西医方名物考』には随所に具体的な実験の手引きが示されている。

植物性生薬の運用にあたっての第一の緊要事は、文書で述べられている個々の西洋生薬の同定であり、海外から舶載された実際の薬物の鑑定である。もし、本邦産の植物中にそれらの類似品がみいだされた場合には、実際にそれが原薬物の代替品として利用し得るか否かを検討せねばならない。これらの作業に対しては稲生若水、松岡玄達、小野蘭山ら歴代の本草家の業績が基本となることはいうまでもないが、宇田川榛斎・溶庵らがこれを臨床の実際に徴して吟味した功績は大きい。『遠西医方名物考』、『和蘭薬鏡』の実用面での最大の功績はここにあるのではなかろうか。

一方、蘭書に眼を転ずれば、薬物治療学の領域では、まずイペイの『薬性論』をあげねばならない。イペイの『薬性論』Handboek der materies medica door Adolphus Ypey は一八一一年に初版が、一八一八年に二版がでた。本邦では藤林普山（初版本より訳出、初篇五冊のみ刊行）、青地林宗（二版本より訳出、未刊写本）による飜訳が行なわれた。

のちに林洞海の訳で広く知られたワートルの『薬性論』の序説で、著者ワートルは次のように述べている。「夫レ予ガ

志ス所ノ者ハ何ゾヤ。医ヲシテ病床ニ臨ンデ薬ヲ用フルニ便ナラシメ、初学ヲシテ学ビ得易カラシムルハ是余ガ志ノ寓スル所ナリ。故ニ薬石ノ効、歴然トシテ指画スベキ者ニ従テ之ヲ為サン。然ラバ則チ依百乙名ヲ法トスルニ如クハナシ。依百乙ハ輓近ノ碩学ナリ。嘗テ薬性論ヲ著ス。当時天下大ニ之ヲ珍トス。其書ノ分類大ニ吾志ト途ヲ一ニス。因テ今之ニ倣フト爾カ云。(林洞洞海訳による)」がそれであるが、これを以てしても、イペイの著作の声価が当時いかなるものであったかを知ることができ、ひとり我が国の蘭学者の間のみでなく、オランダの学者間でも珍重されたことを推測し得るのである。

『膠柱方』著述に先だつ二年間、天保七―八年(一八三六―七)は洪庵の長崎修学時代で、この時に『袖珍内外方叢』の訳業(青木周弼、伊東南洋と共訳)が行なわれたことは既述した通りであるが、この訳書の原テキストについて、中山沃氏はプラッへの『白耳義局方注解』De Pharmacopoea Belgica, theoretisch en praktisch verklaard, door M. W. Plagge であろうという、宮下三郎氏はこれを否定して、同著者による『白耳義局方のための処方書』Receptboek volgens de Pharm. Belgica, Rott., 1829 であろうという。

本訳書の薬品分類については別表に示した通りだが、同書巻之一括套によると「諸薬品次席従和蘭局方列之」とあり、この分類法が『和蘭局方』によったことになっている。オランダにおける国定薬局方の制定は一八五一年以降のことで、それ以前はバタビヤ、ライデン、アムステルダム、ハーグ等各地方薬局方が行なわれていたというから、この『和蘭局方』もその一つであろう。これはプラッへの撰になる『白耳義局方注解』乃至は『同局方のための処方書』が、先行する『和蘭局方』の一つを範として編まれたことを示すものであろうか。なお一八一四―五年のウィーン会議後ベルギーはオランダに併合され、漸く一八三〇年にオランダから独立をはたしたのであるから、一八二九年の時点ではベルギーとオランダは政治的には一つの王国として統合されていたのである。

この『袖珍内外方叢』は広般に処方を集めている点と、それらの製法を明示した点でまことに実用的な本であった。原

蘭文テキストに製法の示されていない薬剤については『遠西医方名物考』または『同補緯』を参照し、更にこれら両書にも記載の無い場合には『和蘭局方』に拠ってこれを明らかにした。前二者の場合は、既に版本が行なわれていることでもあるので、重復の煩を省き、単に名または補の符号を記して文献探索の便に供したが、『和蘭局方』に拠った場合は、必要部分を原テキストの訳文に増補し、増の符号をつけた。この旨は伊東南洋の記した同書凡例に見えるが、この点が記者らの最大の苦心の存したところであろう。さて、ここにいう『和蘭局方』と既述の本文巻一括套のいう『和蘭局方』とは無論別物である。ここに興味深いのは、緒方富雄氏著の『緒方洪庵伝』中に、洪庵が天保五年（一八三四）頃、『和蘭局方』の一部を記した事実が指摘されていることであって、この事実と『袖珍内外方叢』の増補作業とが一つの線でつながれることである。

三、『膠柱方』の薬物

『膠柱方』の本文は八八節からなっている。このうちの冒頭の一六節は、いわば総論とも呼ぶべきものであって、入門した塾生が最初に教えられる部分であったろうと思われる。ただし一六節中の最後の一節は、あとから付け加えられたようになっていて、形式内容ともに他の一節とは異なっている。しかし冒頭に「十六剤」と表題があるので、これをも加えた一六節をとりあえず一括して論ずることとする。「十六剤」とは、揮発剤、清涼剤、緩和剤、強壮剤、鎮痙剤、健胃剤、発汗剤、利尿剤、緩下剤、豁痰剤、解凝剤、駆虫剤、排毒剤、駆黴剤、初生下剤、発表泡剤である。そして発表泡剤を除く一五剤についてはそれぞれ四種の薬物をあげる。たとえば揮発剤としては、橙葉、加密列、纈草、白芷の名があげられている。薬物の用量や調剤法については言及されていない。また同一薬物が二剤以上に重出している例もある。例えば橙葉は揮発剤のほかに鎮痙剤の部にもあげられている。無論、いわゆる揮発剤はこれら四品だけではなく非常にたくさんあるのだが、上掲の四品はその代表的なものとして、というほどの意味で記されたものであろう。ここでいう代表的とは、

薬効が特に顕著であるというだけの意味ではない。たとえば駆黴剤の項に水銀剤が全くあげられていないのである。しかし、水銀剤は各論の方では頻回にでてくるので、洪庵が水銀剤の使用に否定的であったわけではない。周知のように、水銀剤は化学療法前の駆梅剤の花形であったが、同時に副作用のはげしいことも夙に知られていた。総論の駆黴剤中に水銀剤を敢て記さなかったところに、洪庵の塾生指導の周到さをみることができる。

また水銀剤とは違った恐らくは経済的な理由から、幾那が総論中にあげられていない。もしあげるなら強壮剤中になければならぬはずである。キナ皮と強壮剤という組み合わせは現在の常識からすると稍々見当はずれのようにみえるが、イペイはキナ皮を強壮剤（versterkende Middelen）中に入れ、ワートルはこれを強壮解熱剤（versterkende en koorts-drijvende Middelen）中に入れているのである。

要するに、総論の一五剤の代表としてあげられた薬物は、薬効の点、副作用の点、経済性などいろいろな点から考慮してまず無難とみられるものが選ばれたと考えられる。

総論部分の薬物分類法を考えるために、別表にイペイの『薬性論』（原テキストと青地林宗、藤林普山の邦訳書参照）、ワートルの『薬性論』（林洞海の邦訳版本による。蘭名は邦訳書記載のカナ文字を原語になおした）、プラッヘの『袖珍内外方叢』（邦訳名のみ、緒方洪庵、青木周弼、伊東南洋共訳書による）らにみられる薬品分類を一括して掲げておいた。

なお、当時の薬品分類法については、ワートルの『薬性論』の凡例中に要領よくまとめられている。それによると我爾徳児、業腦百洛、歩蘭徳、雑屈西、英らは「韻ニ従」って、つまりアルファベット順に薬品を配列しており、林娜私（リンネ）は「自家本草ノ学ニ由」って分類し、別而鳩斯、繆爾罹、屈墨林らもこれにならい、保鳥児箇魯は「与酸奪酸ノ二類」、つまり酸塩基によって分け、毘斯骨布もこれにならったという。また加爾侄烏設爾、机礼直多西、蒙洛、布歛幾、私仏楞業爾、協劫児、利弗的児らは「合薬家及ヒ舎密家ノ説ニ随」って、つまり薬品の化学的特性に準拠して分類し、「嘗テ余（ワートル）が著ス方ノ方書モ亦之ニ倣」ったという。更に訶爾的楞はまず「天地間ノ三属」、つまり動鉱植物の三類に大

別し、これを「薬性ノ目ニ見ルベキ者ニ従」って細別した。また依百乙（イペイ）は「薬効ノ尤モ著明ニシテ指画スベキ者ヲ取」って分類した。そしてワートルは結論として云う。「薬品ノ分類是ノ如ク各異ニシテ、其善悪モ亦各相半ハス。之ヲ以テ予ガ此挙ニ於ル。望洋トシテ従フ所ヲ知ラズ。然ト雖モ竊ニ謂ラク。此書畢竟初学ノ為ニ著ス者ナリ。故ニ古人ノ分類法中尤モ習学シ易ク尤モ治療ニ便ナル者ニ従ハン」。結果としては、すでに緒論で引いたようにワートルはイペイに範をとったのであり、別掲のように、若干の相異はあっても大綱としてはイペイの分類法、つまり薬効的分類法に従ったのであった。校訂者のプラッヘも原著の意を尊重して、「抑宸氏ガ著ス所ノ薬性論ハ世人能ク之ヲ知ル。故ニ予カ此挙只強壮解熱剤篇ニ於テ、香竄収斂薬ト苦味収斂薬トヲ分ツノ外、毫モ其体裁ヲ変ズル「ナシ」との態度をとった。そしてこのような薬効別分類法は変遷を経つつもその後の薬品分類法の主流として現在にひきつがれてきたのである。

『袖珍内外方叢』の分類法は前述中の訶爾的楞（ホホテレン）方式、つまりまず動鉱植物の三類に分けたのち、薬性の見るべきものに従って細別した形をとっている。

そして『膠柱方』の総論部分はイペイ・ワートル方式である。

『膠柱方』の十六剤の中には、字義の明白なものとあいまいなものがある。鎮痙剤、発汗剤、利尿剤、緩下剤、豁痰剤（祛痰剤）、駆虫剤、駆黴剤、初生下剤、発表泡剤（治虎狼猩病）などは明白な方の例であり、揮発剤、清涼剤、緩和剤、強壮剤、解凝剤、排毒剤などはあいまいな方の例である。今日でも強壮剤、健胃剤などの言葉は広く使われているがやはりその意義は明瞭でない。特に甚しいのは強壮剤の方で、これは『膠柱方』の頃と今日とではまったくイメージが変っている。次に意義不明確な分について順を追って検討してみる。

揮発剤として『膠柱方』は橙葉、加密列、纈草、白芷の四品をあげている。イペイには揮発剤の目はなく、ワートルは揮発衝動剤の目を立てている。その定義としてワートルは「揮発衝動剤ハ、其力速ニ全身諸器、殊ニ神経ニ弥漫シテ、揮発衝動スト雖モ久シク体中ニ保持スル「能ハズ。薬力醒メ来レバ、衰弱随テ生ズ。是レ保固強壮剤ニ異ナル所ナリ」と

述べている。これより推すと、速効性で作用持続の短い興奮剤のような感じである。『膠柱方』所載の四品中では白芷だけがワートルの揮発衝動薬中にとられている。一方、『袖珍内外方叢』は植物性薬中に揮発油性薬の目を立て、動物性薬中に揮発薬の目を立てている。揮発油性薬なら、有効成分として揮発油を含有している薬品をさすことは明白だが、この中に『膠柱方』所載の四品はすべて含まれている。この分類は薬効別というよりは化学組成によったもので、『袖珍内外方叢』はこの両様の分類法が混淆している。

清涼剤はイペイもワートルも目を立てている。『袖珍内外方叢』はこれを記していない。イペイによれば、「清涼剤ハ血液運行ノ大過已甚ナルヲ制シ身体ノ大熱スルヲ減ズル薬」であり、ワートルによれば、「人体生々ノ機殊ニ心臓脈管ノ動作抗拒等大ニ抗進スル者ヲ調達シテ、以テ非常ノ熱度ヲ抑制スル者」である。両者ともに意義の明確を欠くが、イペイは栗蹩子、枸櫞汁、仏甲草、蔬菜、テールワートル、熟果、酒石酸塩、清涼仁、酸模、硝石、硝石精（いずれも青地林宗の訳名）をあげ、ワートルは水、氷、枸櫞汁、酸模、醋、酒石酸、硼酸、硝石をあげている。これらは概して今云う清涼飲料に近いものだが、『膠柱方』は茅根、蒲公英、大麦、干姜の四品をあげて、上記二者とは全く趣きを異にしている。茅根はイペイでは融解剤（青地訳名、『膠柱方』の解凝剤にあたる）に属しているが、「此ヲ熱性ノ病ニ処スルモ害ヲナスニ至ラズ。……此ヲ煎剤トシ諸熱病ノ少シク煩衝ヲ兼ル者ニ用テ無危ノ良剤トス」とある。また蒲公英について『遠西医方名物考』（以下単に『遠西』）は、「熱病及ビ間歇熱ヲ解シ、胆液過多ノ人ニ効アリ、是レ煩衝質ノ稠厚ナル血ヲ稀釈スレバナリ」と記している。大麦については『遠西』は、「性涼、熱ヲ解シ酷厲液ヲ甘メ悪液ヲ除キ小便ヲ利シ身体ヲ栄養ス」と記している。ここに「性涼」とあるのはギリシャ以来の伝統による薬性の表現法で、薬物の基本的性質として寒(冷)、熱(温)、湿、乾を述べたものの例であり、中国にも似た概念があり、古来薬性の寒熱温涼をいう。ところが干姜は中国では代表的な熱薬の一つであり、西洋本草でも従来熱薬（例えばロニケルスの本草書では三度の熱と一度の湿としている。一度が最も程度が弱く、三度が最も強い）としている。しかし『新訂増補和蘭薬鏡』（以下単に『薬鏡』）は姜（生乾の別を記していないが、西洋

では主に乾燥品を使う）について「此薬ハ熱ヲ起サズ血液ノ運行ヲ増進セズシテ飲食ノ消化ヲ進メ殊ニ過酒ニ因ヲ発スル胃虚ノ諸症ヲ治ス。是ヲ以テ又痛風ヲ緩解シ及ビ其毒ノ潜伏内攻ヲ防護ス」と記してをり、『膠柱方』が干姜を清涼剤としたのは恐らくこんなところを根拠としたのではないかと思われる。要するに、『膠柱方』の清涼剤はイペイやワートルのそれとは違った方向をうちだしており、洪庵独自の見識にもとずくものと評価できよう。そして、それは消炎というようなものに似た概念ではなかったかと推測される。

緩和剤として『膠柱方』は芍薬、葵根、麦門（冬）、亜麻仁の四品をあげている。イペイ藤林訳は weekmakende Middelen を緩和薬とする。同じ語が青地訳では軟和剤となっている。またワートル林訳では verslappende Middelen に緩和剤の語を与えている。weekmaken は「軟くする」の意であり、verslappen は「（筋肉などの緊張を）ゆるめる」意である。weekmaken の方がより包摂的な表現であるが、両者ともまず同じ方向の薬のグループと考えてよいであろう。イペイは「軟和剤ハ粘膠油脂ノ質ニシテ此ニ由テ硬強ノ部ヲ軟和シ刺激ノ物ヲ挫鋭ス。常ニ経久セル疼痛及ビ壅塞ヲ治スルノ功アリ（青地訳）」と述べ、ワートルは「大凡人体ノ筋肉線維ヲ縦緩スルノ能力アル者、是ヲ緩和剤ト謂フ」と述べている。『膠柱方』の四品中イペイの軟和剤（緩和薬）にとられているのは亜麻仁だけで、ワートルにとられているのは葵根、亜麻仁の二品である。芍薬はイペイでは鎮痙剤中にとられており、ワートルはこれを記していない。麦門冬は純粋な漢薬で西洋で使われた例はない。芍薬と麦門冬は古来漢方で筋肉の過緊張を緩解する目的で使われてきた。洪庵のみならず、蘭方諸家は西洋生薬の代替品を和漢生薬に求めることに種々工夫をこらしており、これもその一例とみることができる。

強壮剤として『膠柱方』は鹿角、水楊梅、橙皮、木香の四品をしている。イペイ青地訳の強壮剤は versterkende Middelen の訳語で、藤林はこれを健補薬としている。ワートルには強壮解熱剤の目があり、原名は versterkende en koortsdrijvende Middelen である。イペイは「強壮剤ハ衰脱乏欠スル精力ヲ復スル功アル薬ヲ謂フ」とし、カスカリラ、

コロンボ、桂皮、水楊梅、キナ皮、サルビア、ヘラオオバコ、ブドウ酒、鉄などを記している。ワートルは強壮解熱剤の定義は記していないが、その支目の一つ、保固強壮薬（tonice versterkende Middelen）に対しては、「苦味ノ質ヲ以テ腸胃ノ運営ヲ調理シ、消食機及ビ其機ニ関係セル諸般ノ官能ヲ勧発ス。故ニ或ハ健胃薬ト曰フ」と述べている。既述の揮発剤の項で引いたワートルの揮発衝動剤と保固強壮剤との鑑別と照合して考えると前者が芳香健胃剤で後者が苦味健胃剤のようでもある。しかしあげられた薬品をみると必しもそうではない。またワートルには健胃剤の目はないが、『膠柱方』では強壮剤とは別に健胃剤の目を立てている。ともかくも現在きわめて莫然とした意味で使われている強壮剤の概念とはよほど変ったものであることはまちがない。また木香についてであるが、西洋では土木香（Inula Helenium）を使うが、蘭方諸家はこの代替品として漢方で古くより使われている木香（Saussurea lappa）をよく使った。同じキク科植物であるが属を異にしている。

健胃剤として『膠柱方』は羌活、陳皮、半夏、縮砂の四品をあげている。イペイ、ワートルともに健胃剤の名の目はない。ワートルの保固強壮薬が健胃剤に相当することはすでに述べた。健胃剤という言葉は今でもよく使われるが厳密に定義することはできない。胃に起因するさまざの症状を軽減し、食欲を増進させる薬というほどの意味であろう。羌活、陳皮、半夏、縮砂の四品はいずれも漢方で重用される薬物である。

解凝剤として『膠柱方』は蜀羊泉、蒲公英、半夏、良姜の四品をあげている。ワートル林訳は解凝剤の目をあげている。原名はoplossende Middelenである。イペイも同名の目をあげているが青地訳では融解剤、藤林訳では開壅塞となっている。イペイ青地訳では「身体彼此ノ壅塞ヲ融解シ、血液ノ凝結ヲ渙解スルノ功アル薬ヲ融解剤ト名ク」とあり、ワートルには「夫薬石ハ大抵解凝ノ効アル者多キニ居ル。故ニ画然トシテ此名称ヲ定ムル「甚タ難シト雖モ、今予姑ク其各自固有ノ衝動性ヲ以テ、喜ンデ液ヲ含ムノ地及ビ之ヲ分泌スル部ニ走リ、其部ノ機能ヲ奮発シテ蓄液ヲ誘蕩シ、能ク其レヲシテ健運融通スル「ヲ得セシメ又其漏排泄除ニ便ナル者ハ、其漏泄排除ヲ得セシムル者ヲ撰テ、以テ之ニ解凝薬ノ名ヲ命

ズ」とある。これらによると解凝剤とは非生理的な血液乃至は体液の瘀滞凝結を除くことを目的としているように思われる。このような病理説は西洋にも東洋にも伝統的にあり、中国では瘀血、痰飲、またよって生ずる凝結を積聚などとよんだ。現在でもドイツの民間薬物書に Blutreinigungsmittel というような表現をみることは稀ではない。また各種臓器の秘結（Verstopfung）を開き散ずる（eröffnen und dünn machen）というような表現もあり、このような病理観を背景にして考えねば解凝剤の意義は理解できない。

排毒剤として『膠柱方』は杜松木、蜀羊泉、杜松子、山牛房の四品をあげている。排毒剤に相当する目はイペイにもワートルにもみあたらない。現在解毒剤と莫然とよんでいるものに相当するものであろう。そしてこの種の概念は東西ともに古代から一貫して存在しているが、『膠柱方』所載の薬物からみるとこの場合は主に皮膚秘尿器科領域の疾患が主たる対象になっているようである。また、ここで注意せねばならぬのは山牛房であるが、今ヤマゴボウと云えば Phytolacca esculenta をさしている。この根は中国で商陸と呼ばれ、利尿剤として使われ、また西洋では慢性関節リウマチなどに使われた。一方ゴボウの方は Arctium lappa で西洋で古くから利尿、発汗の目的で使われ、漢方でも利尿、解毒などの効があるとされてきた。ところでややこしくなるのは藤林普山がゴボウつまり Arctium lappa に山牛蒡の名を与え、宇田川榕斎の『和蘭薬鏡』がこれを踏襲したことである。『薬鏡』巻五の山牛蒡の項に宇田川榕庵は次の如く記している。「榕按ニ山牛蒡ハ牛蒡ノ一種ニシテ花葉亦是ニ類ス。商陸ノ『ヤマゴボウ』ト異ナリ」。イペイ青地訳やワートル林訳も、Arctium lappa に山牛蒡の名をあてている。ところで『膠柱方』は排毒剤中に山牛房を記し、駆黴剤中に牛房を記している。しかし、筆者はこの両者ともにゴボウ Arctium lappa をさすと考えたい。というのは『膠柱方』の薬名記載は余り神経質でなく、あるいは縮砂と書き、また宿砂と書き、あるいは杜松子と書き、また土松子と書いているような具合だからである。げんに山牛蒡を山午房と、牛蒡を午房と記している。

冒頭の一六剤に続いては四種の泡剤、六種の熨剤が示されており、これまでの計二六剤については分量の指示はない。それ以下は完全な処方の体裁をとり分量が示され、且つ一部の例外を除きそれぞれに処方の名称が与えられている。山奈健胃丸、和胸丸の如くである。各処方の適応症の指示は与えられていないが、上述二方のように処方名から推測できるものも多い。しかし二胆丸（龍胆、牛胆各適宜）のように処方名からは適応症が類推できぬものも相当数ある。

そして本文は総計八八節からなることを既述した通りであるが、今、便宜上これらに番号を附した。1、2の如くである。

また本文とは別に欄外に記された処方が二一方あり、これには①、②の如く番号を附した。

本文中、及び欄外の方中にでてくるすべての薬物を別表にして、各品の材料、薬効、及び漢方、イペイ、ワートル、『遠西』、『薬鏡』、『内外』の各書に記載の有無を示し、更に下欄には当該薬物の記されている本文または欄外の条文の番号を列挙した。また余白に若干の備考を附記した。

これらによって本書の処方の適応症をおよそ知ることができるとともに天保九年当時の適々斎塾の治療の実態を推測し得ると思う。

四、結　語

緒方洪庵とその家塾である適々斎塾が日本の近代医学史に占める意義については贅言を要しないであろう。またそれらに関する資料、研究もすでにおびただしい数にのぼっているが、今回たまたま発見された『膠柱方』は洪庵開塾当時の塾生指針書といういわばファーストハンドの資料であり、その価値はきわめて大きい。

この仕事に費した日子の割には貧しい小著であるが、同学の諸兄姉の御叱正を切望するものである。

本書研究を私に託され、それに関するあらゆる便宜と助言をお与えくださった緒方富雄先生に衷心より謝意を表する。

適々斎薬室膠柱方

膠柱方序

疾病百端。各人各部異其性。随地随時症状相差。不臨機処変何能得治之。而預設方実属于膠柱鼓瑟也。然不預設方則未熟之徒対患者苦方之卒難処。動輙至于病与方霄壌相反矣。故今撰用之無過服之少害。味不甚悪者数方便于免其急苦。名謂之膠柱方。

天保戊戌冬十二月　　適々斎主人誌

適々斎薬室膠柱方

十六剤

1 揮発剤　橙葉　加密列　纈草　白芷
2 清涼剤　茅根　蒲公英　大麦　干姜
3 緩和剤　芍薬　葵根　麦門*　亜麻仁
4 強壮剤　鹿角　水楊梅　登皮*　木香
5 鎮瘙剤　蓋葉*　香　芍薬　縮砂
6 健胃剤　羌活　陳皮　半夏　宿砂*
7 発汗剤　茅根　葵花　接骨花　紫蘇
8 利尿剤　茅根　土松子*　接骨花　王塩**
9 緩下剤　甘草　瀉利塩*　大黄　干姜
10 豁痰剤　無花果　冬花*　杜松子　杏仁
11 解凝剤　蜀羊泉　蒲公英　半夏　良姜
12 駆虫剤　海人草　半夏　冉那*　甘草
13 排毒剤　杜松木　蜀羊泉　杜松子　山午房*
14 駆黴剤　茅根　奇良*　蜀羊泉　午房**
15 初生下剤　蒲公英　大黄　半夏　甘草
16 発表泡剤　治虎狼狸病
霍*1 二　加密*2 二　纈*3 三　丁*4 六　薄*5 三　接*6 二　茴*7 四　木香二

〔大塚注・右の漢数字は重量を示すと思われるが単位は不詳〕

*麦門冬
*橙皮
*橙葉
*縮砂
*杜松子
**覇王塩
*冬花
*柄那（センナ）
*本文参照
*山帰来
**本文参照
*1 霍香
*2 加密列
*3 纈草
*4 丁香
*5 薄荷
*6 接骨花
*7 木香

泡剤

17 健胃泡剤　橙皮　薄荷　宿砂*　木香　良姜
18 鎮痙泡剤　橙葉　薄荷　加密列　丁香　桂支*
19 発汗泡剤　紫蘇　接骨木花　加密列　甘草　桂支*
20 緩下泡剤　瀉利塩　大黄　茴香　薄荷　姜

熨剤

21 三葵蒸剤　葵根　葵花　葵葉
22 花売熨方　苦薏　罌粟殼*　接骨花
23 甲眼蒸剤　葵花　接骨木花　罌粟殼*
24 乙眼蒸剤　苦薏　水楊梅　玫瑰花
25 消炭冷熨　硇硝醋水
26 暑払　枇杷葉　宿砂*　木香　紫蘇　香附子　甘草
27 山奈健胃丸
山奈三銭　龍旦十銭　縮砂三銭　木香三銭
28 和胸丸

*縮砂
*桂枝
*桂枝
*罌粟殼
*粟罌殼
*縮砂

海葱五分　金硫黄五分　甘草膏七銭五分

29 健胃掃腸丸

大黄十銭　麻*倔十銭　龍旦七銭　姜末二銭

29′ 去将**加芦薈者加減掃腸丸

30 清血丸

甘汞六分　金硫黄六分　龍脳三分　面粉三銭

31 甘汞丸

甘汞三分　龍脳二分（二氏ノ誤リナラン乎）　面粉四銭（四分ノ誤リ乎）

32 双鸞甘汞丸

双鸞菊一銭　甘汞三分　龍脳二分　面粉四銭　朱為衣

33 覇王丸

覇王塩五銭　大黄十銭

34 鹼黄丸（主治肝鬱塞黄疸粘液瀦飲服量朝夕半銭、一匁ニテ与フ。殊ニ黄疸ニ良。或ハ随症加阿魏四銭去鹼（後記入））

大黄一銭　石鹼　牛胆各四銭

35 消黄丸

大黄十銭　消石五銭　姜一銭

36 護謨和胸丸

護謨安謨尼亜幾四銭　海葱一銭　金硫黄一銭　甘草末四匁

37 面粉丸

面粉八分　龍脳三分　朱為衣

38 香胆丸

木香　牛胆

39 未児扶斯健胃丸

健胃丸料一剤乾白撒爾末児扶斯五銭

*マグネシヤ麻倔涅失亜

**将軍、大黄の別名

40 葯汞丸

葯剌巴四銭　甘汞三銭

41 必*百尓丸

胡桃八匁　甘草　面粉各四匁

42 藤黄丸

藤黄四分　甘草二分　石鹼二銭

右為丸

43 セメンシーナ丸

セメンシーナ一銭　覇王塩一銭　大黄五分　右為丸

44 和胸丸

海葱五分　金硫黄五分　甘草末四匁　右為丸

45 健胃掃腸丸

大黄十銭　麻倔涅失亜十銭　龍胆五銭　姜一銭　右為丸

46 健胃丸（大粒　小粒）

龍胆十銭　縮砂二銭　木香末十銭

47 又方当薬十銭　縮砂三銭　木香三銭

48 鉄黄丸

鉄粉五銭　大黄十銭

49 鉄没丸

没薬五銭　鉄粉五銭　大黄一銭

50 魏黄丸

阿魏三銭　大黄十銭　鉄粉四銭　右為丸

51 汞黄丸

大黄五銭　姜二銭　甘汞一銭　右為丸

*ビベル丸、ビベルは胡椒

52 芦薈解凝丸
芦薈 鉄粉 龍胆各等分 右為丸

53 二胆丸
龍胆 牛胆各適宜

54 鉄黄龍胆丸
鉄粉二錢 龍胆二錢 大黄一錢

55 楊皮剛鉄丸
楊皮 鉄粉各等分

56 幾那剛鉄丸
幾那十二錢 鉄粉一錢 桂五分

57 龍硝丸
龍脳五錢 硝石三錢 麵粉三錢

58 莨菪丸
莨菪越幾私三分 甘汞三分 大黄末一錢五分

59 葱実利水丸
海葱一錢 チキタリス一錢 甘汞四分 面粉二匁
為中丸六十服

60 *アロイン散 主治酸敗液痛服量一日ニ大一匕余方中加耶普的酒適宜ヲ滴加シテ良効アリ(後記入)
マクネシ十五錢 枯礬十五錢 薄荷三錢

61 治痿散
鉄粉一錢 蜊蛄石四錢 糖二錢

62 制酸散
麻倔涅失亜二分 糖二分

63 赤汞硫黄散
赤汞一分 *龍四分 硫黄華八錢 糖八錢
葛粉八錢 為四十八服

64 甘汞散
甘汞一錢 糖十二錢 葛粉十二錢

65 清血散
金硫黄五分 甘汞一錢 葛糖二十四錢

66 治癬散
水銀四錢二分 安質没一錢五分 硫黄華八錢

67 龍橙散
橙葉末 葛粉各等分 龍脳

68 峻下散
甘汞一分 葯剌巴三分 糖三分

69 駆水散
海葱一分 実吉答里私五厘 酒石一錢五分

70 硫肝散
硫肝二錢 糖六錢 葛粉六錢

71 水薬健胃酒
火酒六十匁 橙皮一匁五分 龍胆五分 桂一匁五分

72 加減消疝露
焼酒百二十六匁 桂?匁 丁子二匁 肉豆蔻二匁
胡荽子四匁 茴香四匁
右蒸餾罐ニテ八十匁ヲ取ル

73 *エリキシルヒツトリヨリ
緑礬油十錢 火酒五十錢 桂末一錢五分 姜末二錢五分

*アロイン(alu-in)は明礬のこと

*竜脳

*Elixir vitrioloi Vitriolum vi-ride が緑礬

右固封スルコト八日濾過ス

74 客製海葱蜜

海葱四錢 醋四十錢 蜜五十錢

右海葱ヲ極末トシ少許ツツ醋ヲ加ヘ研和シ交大ニ煮テ三分ノ一ヲ減シ蜜ヲ加ヘ煮テ泡ヲ去リ舍利別ノ稠トス

75 利水丸

藤黄一匁 海葱一匁 剝篤亜斯三匁 姜末二匁

十六粒ニ藤黄一匁姜末二匁剝篤三匁ヲ含ム

*剝篤亜斯

76 魏黄橙葉丸

阿魏一錢 大黄一錢 橙葉三錢 右為丸

77 屠蘇方

桔梗二十匁 陳皮二十匁 山椒五匁 大茴香五匁 桂皮五匁 丁子五十個?

78 山帰来十二匁三分

水八合ヲ以テ煮テ五合ヲ取 *冉三入 甘草一匁五分 **茴一錢

二番湯服

79 山帰来六匁五分

煎法同シ

陳皮 桂 *縮各末八分 **甘一匁六分 冷服

80 礬糖十二匁 甘汞四匁 朱一匁 八包ニ分ツ

81 丸薬

ヤラッパ一錢 甘汞二分 右為丸三包ニ分ツ

*柄那 **茴香

*縮砂 **甘草

82 芫菁丁幾

火酒二十四錢 芫菁末二錢

83 セメン丸小山田

芦薈一錢 サルマルチス八分 セメンシーナ二錢 ヤラッパ一錢 為丸三十貼ニ分ツ

84 芙汞丸

甘汞三分 龍脳二分 *芙蓉一分 面粉二錢 右為丸

*阿芙蓉

85 芙鉛丸

亜鉛花五分 龍脳二分 *芙蓉一分 面粉二錢 右為丸

*阿芙蓉

86 暑気払

木香細末二錢 *宿砂一錢 乾姜三分 **圭三分 右調匀

*縮砂 **桂(皮)

87 升汞丸

升汞六厘 阿片四厘 桂皮三分 砂糖三分 面粉一錢

右為糊丸分二十貼

88 雞肝丸

*健質五錢 木香三錢 益智三錢 **繽草三錢

雞肝三錢 蝦蟇三錢 右粘丸

*ゲンチアナ 健質亜那

『膠柱方』頭註

①
*廉一　橙2　**葛斯栗刺3
***茴3　格綸僕4　****甘4
右章先生痢后
□弱下利之一患
者ニ用ユ

②
兼用
散剤　肉豆蔻
牡蠣　橙皮油
糖

③
葯王丸
*葯巴十錢　**王塩二十錢
蒲公英根末

④
苦味解凝丸
芦薈
護謨安没尼亜幾各一錢五分
蒲公英根末一錢五分
龍旦末一錢五分

*廉姜　**葛斯加栗刺（カスカリラ）
***茴香　****甘草
〔大塚注・漢数字、洋数字ともに
重量指示と思われるが単位不詳〕

*葯剌巴　**覇王塩

⑤
消黄丸
大黄十錢　消石五錢
姜末一錢

⑥
加減清血丸
甘汞一分五リ　*金硫一分五リ
龍脳一錢　大黄二錢
麻倔涅失亜二錢
覇王塩一錢
右糊丸

*金硫黄

⑦
双朴解凝丸
*朴屈末十錢
**双鸞末一錢五分　甘汞五分
金硫黄五分
龍脳二分
右糊丸朴屈脂
ナレバ五錢

*朴屈福烏篤（ポックホウト）（Pokhout）
**双鸞菊

⑧
加減鹼黄丸
大黄二錢　石鹼二錢
芦薈一錢　甘汞五分
右糊丸分為五十貼

⑨加減双朴解毒
*朴ハルス 錢三　失鳩答 分五
**双エキス 三分 二リ　金硫黄 一分 六リ
甘汞 一分 六リ　龍脳 一分 六リ
大黄末 錢一
右蜀羊泉エキスヲ以テ
丸トシ分三十貼十
□ニ服ス

*⑦注参照
**⑦注参照

⑩鳩汞丸
甘汞 錢一　失鳩答 錢二
大黄 錢□
右糊丸

⑪伸気丸
亜鉛華 錢一
橙葉末 錢四
繖草末 錢二
桂末 錢一
右糊丸

⑫駆蟲丸
*摂緜 錢一　甘汞 分一
芦薈 分二　繖草 錢一

*摂綿支那（セメンシナ）
**大黄の別名

**将軍 分三
右両日之量

⑬通経丸
護謨安没尼亜幾 錢二
没薬 錢二　芦薈 錢一
薩昆那越幾私 分二
右糊丸分為三十貼

⑭□尊地丸
升汞　*芙蓉
姜末　砂糖 各二分
右合匀為二百四十丸
用法初日午後服四丸
夜(?)毎間一日増二丸遂
□加至三十丸
主治頑固黴毒

*阿芙蓉

⑮吐酒石丸
吐酒石 分二　蒲公英 錢一
右二味 二十六粒三氏ヲ含 六粒三□氏ノ一ヲ含

⑯芫菁丸
芫菁 分五　龍脳 錢一
面粉 錢二　甘草 錢二

右為丸分百二十貼
芫菁四分瓦ヲ含

⑰ *又方
実葱丸
方中圭支末一銭**
乾姜一銭ヲ加ヘ(?)
又甘汞 四分ヲ減ス

⑱ 実汞丸
実菱答利斯 四銭
甘汞 二銭
面粉 一銭

⑲ 挖遏尓斯発汗散
吐根末 芙蓉 各一 *瓦
霸王□ 氏 **霸王塩

⑳ 治傳麻質㷔□(?)*(?)散
莨菪越幾斯
金硫黄 各一リ 龍脳 三リ五リ迄ヨリ
双鸞越幾斯 三リ ***朴屈ハルス 五リ
茴香末 一分五リ 蜀羊泉エキス 二分五リ
右一日三度ニ服シ尽ス

* 本文59 葱実利水丸の又方
** 桂枝

㷔衝ノ候アル者消石
五厘ヲ加フ或ハ半身
不遂麻痺痿弱
或ハ搐搦或ハ卒厥
□□□身不遂病
傳麻質ニ因スル者
アルニカ一□□□□ト為シ
服ス又ホミカエキス或ハ末一厘為一丸
兼用ス右方中少々宛莨菪ノ量ヲ増加ス必ス一頓ニ
多量与フ可ラス

㉑ 方
□沃顕須 ヨウジム
清浄阿片 六氏
大黄末 一弓
甘草末 適宜
右研和六十丸
ヲ作リ朝夕一
丸ヲ服シ各日ニ
一丸ヲ加エ便
祕スル者ハ下
剤ヲ与ヘ灌
腸法ヲ行フ
尋常ノ梅毒
右ノ丸剤

百二十丸ヲ
尽シテ大抵
全治スベシ

主治新旧二
性ノ梅毒加ニ
其ノ経久ニシテ瘰
癧ヲ兼ヌルモノ
慢性腺腫肝
臓閉塞瘰
癧性白腫
□□□腫
慢性結節
皮病癬癩

癌毒様腫
疣贅顔
面痛□□
□□癤
漿液腫瘰
癧腫用テ殊ニ
軟煮トシテ□ク小
児ノ従前諸
病ヲ患フルモノニ
外用シテ妙功アリ
百二十丸ハ
十五日ニ服シ
尽ス可シ

§ 次に『適々斎薬室膠柱方』、『イペイ薬性論』、『ワートル薬性論』、『袖珍内外方叢』にみられる薬品分類を示す。

緒方洪庵著『適々斎薬室膠柱方』		
揮発剤	発汗剤	排毒剤
清涼剤	利尿剤	駆黴剤
緩和剤	緩下剤	初生下剤
強壮剤	豁痰剤	発表泡剤
鎮痙剤	解凝剤	
健胃剤	駆虫剤	

青地林宗訳『依百乙薬論』（一八二三）	藤林普山訳『和蘭薬性弁』（一八一八—二二）	Adolphus Ypey: "Handboek d. Materies Medica"（一八一一）	林洞海訳『窓篤児薬性論』（一八四〇）	Wijl en J.A. van de Water: "Handboek Voor De Leer Der Geneesmiddelen"（一八三四）
緩下剤	緩下薬	Zacht werkende Purgeermiddelen	緩和剤	Verslappende Middelen
勁下剤	中下薬	Sterker werkende Purgeermiddelen	収斂酸性止血防腐剤	Zamentrekkende en zuure bloedstelpende en bederfwerende Middelen
峻下剤	峻下薬	Zeer sterk werkende Purgeermiddelen	強壮解熱剤	Versterkende en koortsdrijvende Middelen
吐剤	吐薬	Braakmiddelen	揮発衝動剤	Vluchtig prikkelende Middelen
利尿剤	利尿薬	Pisdrijvende Middelen	鎮痙剤	Krampstillende Middelen
砕石剤	砕石薬	Steenbrekende Middelen	麻酔剤	Verdovende Middelen
発汗剤	発汗薬	Zweetdrijvende Middelen	解凝剤	Oplossende Middelen
通経剤	通経薬	Maandstonden afdrijvende Middelen	吐剤	Braakmiddelen
殺虫剤	殺虫薬	Wormafdrijvende Middelen	下剤	Stoelgang bevorderende of purgeermiddelen
駆風剤	駆風薬	Windbrekende Middelen	発汗剤	Zweetdrijvende Middelen
泄粘剤	漉水薬	Slijmen ontlastende Middelen	利尿剤	Pisdrijvende Middelen

祛痰剤	導痰薬	Fluimenlozing bevordernde Middelen	通経剤	Stondendrijvende Middelen
清涼剤	清涼薬	Verkoelende Middelen	祛痰剤	Fluimenlozende Middelen
融解剤	開壅薬	Oplossende Middelen	殺虫剤	Wormdodende Middelen
軟和(化)剤	緩和薬	Weekmakende Middelen	制酸剤	Zuurtemperende Middelen
強壮剤	健補薬	Versterkende Middelen	清涼剤	Verkoelende Middelen
収斂剤	収斂薬	Zamentrekkende Middelen	引赤発疱腐蝕剤	Roodmakende blaardrijvende en Bijtmiddelen
調酸剤	制酸薬	Zuurtemperende Middelen		
神経剤	壮神薬	Hoofd- en Zenuwmiddelen		
鎮痙剤	鎮痙薬	Krampstillende Middelen		
麻酔剤	麻薬	Verdovende Middelen		
腐蝕剤	腐薬	Bijtmiddelen		

M. W. Plagge 著　緒方洪庵、青木周弼、伊東南洋訳『袖珍内外方叢』（原一八二九、訳一八三六―七）

（Ⅰ）山物	(4) 下薬		(15) 油性薬
(1) 可燃体	(5) 華爾斯性薬		(16) 石鹼性薬
(2) 酸類	(6) 抜爾撒謨性薬		（Ⅲ）動物
(3) 羅倔塩	(7) 欠		(1) 発疱薬
(4) 塩類	(3) 揮発性油薬		(2) 揮発薬
(5) 硫羅倔類	(9) 苦味薬		(3) 苦味薬
(6) 金属及其製	(10) 収澹薬		(4) 糖性薬
（Ⅱ）植物	(11) 植酸		(5) 膠性薬
(1) 麻酔薬	(12) 亜的児性薬		(6) 蛋性薬
(2) 酸属薬	(13) 糖性薬		(7) 脂性薬
(3) 吐薬	(14) 穀粉性薬		

	薬名	材料	薬効	漢方	イペイ	ワートル	遠西	薬鏡	内外	処方及び備考
1	亜鉛華（花）	Zinci oxydum 酸化亜鉛 ZnO.	防腐、収斂、皮膚病	−	+	+	−	−	+	85.
2	阿魏	Asa foetida（セリ科植物）のゴム樹脂	解凝、瀉下、疝痛、乾咳、駆虫	+	+	+	+	−	+	34.（あとから書入）、50. 76.
3	阿片	Papaver somniferum（ケシ科ケシ）の未熟果液汁	鎮痛、止瀉、鎮咳	+	+	+	+	−	+	87. 芙蓉をもみよ。
4	阿麻仁	Linum ustatissimum（アマ科アマ）の成熟種子	咳嗽、腫瘍、瀉下	+	+	+	−	+	+	3.
5	安質没	アンチモン Sb.	催吐、祛痰	−	+	+	+	−	+	66.
6	茴香	Foeniculum vulgare（セリ科ウイキョウ）の成熟果実	駆風、健胃、解凝	+	+	+	+	+	+	16. 20. 72. 78.
7	罌粟殼（オウゾクカク）	Papaver somniferum（ケシ科ケン）の果殼	止瀉、鎮痛、鎮咳	+	+	+	+	−	−	22. 23.
8	海人草	Digenea simplex（フジマツモ科マクリ）の全藻	回虫駆除	+	−	+	−	−	−	12.
9	海葱	Scilla maritima（ユリ科カイソウ）の鱗茎	利尿、瀉下	−	+	+	+	−	−	28. 36. 44. 59. 69. 74. 75. 76.
10	霍（香）	Stachys betonica（シソ科カッコウ）の草本	胃痛、吐逆、霍乱、傷食	+	−	−	−	−	−	16.
11	葛糖	Pueraria Thunbergiana（マメ科クズ）の根	発汗、解熱、緩解	+	−	−	−	−	−	63. 64. 67. 70.

	薬名	材料	薬効	漢方	イベイル	ワート	遠西	薬鏡	内外	処方及び備考
12	葛粉	葛糖(11)を見よ		+	−	−	−	−	−	65.
13	火酒	ブドウ、穀類などの蒸溜酒	冷積寒気、瘧疾、嗽嗽、霍乱、嘔逆	+	+	−	+	−	−	71. 73. 82.
14	蝦蟇	Bugs sp.（ヒキガエル属）の肉その他	熱病、邪気、悪瘡陰瘡	+	−	−	−	−	−	88.
15	加密列	Matricaris chamomilla（キク科カミツレ）の花	駆風、発汗、消炎鎮痙	−	+	+	+	−	+	1. 16. 18. 19.
16	加耶普的酒（酒は油の誤か）	Melaleuca leucodendron（フトモモ科植物）の葉の精油、カヤナテ油	鎮痙、利尿、発汗消毒、駆虫、コレラ	−	+	+	+	−	+	60.（書入）
17	干姜	Zingiber officinale（ショウガ科ショウガ）の根（蒸乾）	健胃、鎮嘔	+	+	+	+	−	+	2. 9. 86. 姜をもみよ
18	甘汞	Hydrargyri sub-chloridum 塩化第一水銀、Hg_2Cl_2	利尿、瀉下、鎮嘔皮膚病（内用）（外用）	+	+	+	+	−	+	84. 31. 32. 40. 42. 51. 58. 59. 64. 65. 68. 80. 81.
19	甘草	Glycyrrhiza glabra（マメ科カンゾウ）の根	鎮痛、解毒、緩和、鎮咳	+	+	+	−	+	+	9. 12. 15. 19. 26. 36. 41. 44. 78. 79.
20	甘草膏	同右	同右	−	+	+	+	−	−	28.
21	蕻冬花	Tussilago farfare（キク科フキタンポポ）の葉、花。	鎮咳	+	+	+	+	−	−	10.
22	乾白撒爾（カンバクサルマルチス）末児扶斯	Sal Martis サルマルチスを乾燥させたもの。硫酸第一鉄 $FeSO_4$	補血、収斂	−	−	−	+	−	−	39.

23	葵花	Malva verticillata（アオイ科アオイ（の花	緩解、咳嗽、淋疾、消渇、嗄声、	+	+	+	アルタア +	+	+	7. 21. 23. アルタア（Althaea offic.）の代用。イペイ、ホウテ云葵ノ性功アルタアト同ジ。然レバアルタアア欠ルニアハバ葵ヲ代用スベシ（薬鏡）
24	桔梗	Platycodon grandiflorus（キキョ科キキョウ）の根	祛痰、排膿、咽喉痛	+	−	−	−	−	−	77.
25	葵根	Malva verticillata（アオイ科アオイ）の根	緩解、咳嗽、嗄声、淋疾、消渇	+	+	+	アルタア +	+	−	3. 21. 葵花の項参照
26	幾那	Cinchona sp.（アカネ科キナノキ属）の樹皮	解熱、苦味、健胃抗マラリヤ	−	+	+	+	+	+	56.
27	牛胆	Bos taurus（ウン）の胆嚢	心腹熱煩、下痢、消渇、癰腫、大便閉	+	+	+	−	−	+	34. 38. 53.
28	姜	Zingiber officinale（ショウガ科ショウガ）の根	健胃、鎮嘔、吃逆、咳嗽、冷剤、心下急痛	+	+	+	=	+	+	20. 29. 35. 51. 72. 75. 干姜をもみよ
29	葵葉	Malva uerticillata（アオイ科アオイ）の葉	時汗黄病、金瘡、諸症淋疾、消渇、緩和	+	+	+	+ アルタア	+	+	21. 葵花の項参照
30	羌活	Angelica sylvestris（セリ科植物）の根	発汗、鎮痛、通経	+	+	−	−	+	+	6 イペイ Peucedanum Ostruthium (Imperatoria) をのせ、青地林宗、官園羌活をあてる。『薬鏡』も同じ
31	杏仁	Prunus ansu（バラ科アンズ）の核仁	鎮痛、利尿、喘欬	+	−	−	−	−	−	10.
32	奇良	山帰来をみよ	駆梅、骨節、皮膚、痺痛悪瘡	+	+	+	−	+	−	14.
33	金硫黄	五硫化アンチモン	発汗、祛痰、解凝	−	+	+	+	−	+	28. 36. 41. 65.

	薬名	材料	薬効	漢方	イペイ	ワールト	遠西	薬鏡	内外	処方及び備考
34	苦薏	Chrysanthemum indicum（キク科アブラギリ）の草本	婦人腹内宿血癰腫、瘰癧、疔毒、利尿	＋	－	－	－	＋	－	22. 24.
35	雞肝	Gallus domesticus（ニワトリ）の肝	心腹痛、下血、陰痿、雀目、疳疾	＋	－	－	－	－	88.	
36	桂枝	Cinnamomum cassia（クスノキ科ケイ）の樹皮	強壮、興奮、鎮痛、健胃、整腸	＋	＋	＋	＋	＋	－	18. 19. 56. 71. 72. 73. 77. 79. 86. 87.
37	纈草	Valeriana officinale（オミナヘシ科カノコソウ）の根	胃膨満、肝疾、膀胱病、不安、不眠、頭痛、発熱	－	＋	＋	－	－	＋	1. 16. 88. 蚘虫ニ効アリ、虫ヨリ発スル痛ニ用フ（薬鏡）
88	健質（亜那）（ガンチ アナ）	龍胆をみよ	消炎、健胃	＋	＋	＋	＋	＋	＋	88.
39	礪硝醋水	不詳		－	－	－	－	－	－	25.
40	芫菁	Cantharis vesicatoria（カンタリス）の乾燥死体	水腫、尿閉、癇、咬傷、催淫、堕胎、発泡膏	＋	＋	＋	＋	－	＋	82.
41	香									5.
42	香附子	Cyperus rotundus（カヤツリグサ科ハマスゲ）の根	健胃、駆風、調経、止血、解鬱	＋	－	－	－	＋	－	26.
43	胡枅	Piper nigrum（コショウ科コショウ）の果実	宿食不消、霍乱、反胃、赤白下痢、心腹冷痛、大小便閉	＋	＋	＋	－	－	＋	41.
44	胡荽子（コスイシ）	Coriandrum sativum（セリ科コエンドロ）の子実	胃痛、痞気、疝痛、脱肛、下血、間欠熱、痘疹	＋	＋	－	－	＋	－	72.

45	枯礬	$AlK(SO_4)_2$ 焼き明礬	収斂、止血、咽喉痛 皮膚病（外用）	+	+	+	+	+	+	+	+	60.
46	護謨安謨尼亜幾（ゴム アンモニア キ）	Dorena ammoniacum（セリ科植物）のゴム樹脂	子宮衝逆、経閉、ヒボコンデリー 黄疸、喘息	−	+	+	+	−	+	+	+	36.
47	醋	Acidum aceticum 酢酸	清涼、発汗、鎮痙、防腐 丹毒、頭痛	+	+	+	−	+	−	−	−	74.
48	砂糖	Saccharum officinarum 又は Beta vulgaris（サトウキビ又はサトウダイコン）より得た糖	心腹熱脹、口乾、酒毒、下痢	+	+	+	−	−	+	−	−	87.
49	サルマルチス	Sal Martis (Vitriolum, Martis) $FeSO_4 \cdot 7H_2O$, Ferrosi sulfas 硫酸第一鉄	補血、収斂	−	+	+	+	−	+	−	+	83.
50	山帰来	Smilax glabra（サルトリイバラ科サンキライ）の根	駆梅、骨節皮膚疼痛、悪瘡	+	+	+	−	+	−	+	−	78. 79. 奇良をもみよ。
51	山椒	Zanthoxylum piperitum（ハアン科サンショウ）の実	邪気、痃逆、留飲、下痢 黄疸、腹内冷痛、脚気	+	−	−	−	−	−	−	−	77.
52	山奈	Hedychium spica（ショウガ科サンナ）の根茎	瘴癘、心腹痛、霍乱 悪心、下剤、疝痛	+	+	−	−	+	−	−	−	27.
53	紫蘇	Perilla frutescens（シソ科シソ）の葉、粒子	冷気、霍乱、感冒 虚労、失精、喘息	+	−	−	−	−	−	−	−	7. 17. 26.
54	芍薬	Paeonia albiflora（キンポウゲ科シャクヤク）の根	筋緊張調整、腹痛、下痢	+	+	−	−	+	−	+	−	3. 5.
55	瀉利塩	Purgeerzout の訳 $MgSO_4 \cdot 7H_2O$ の意、別名 Epsom salt.	少量で解凝、利尿、大量で瀉下。	+	+	+	+	−	+	−	+	9. 20.

	薬名	材料	薬効	漢方	イペイ	ルワート	遠西	薬鏡	内外	処方及び備考
56	朱	Cinnabaris 硫化水銀鉱、MgS Hydrargyri Sulfidum rubrum	癇、痙攣、搐搦、攣急、眩冒、疥癬、梅毒	+	−	−	+	−	−	32. 37. 79.
57	縮砂	Hedychium Coronarium（ショウガ科シュクシャ）の子実	宿食不消、霍乱、転筋、腹痛、嘔吐	+	−	−	−	−	−	5. 6. 17. 26. 27. 46. 47. 79. 86.
58	酒石	Kalii bitartaras $C_4H_5O_6K$（重酒石酸カリ）別名・ケレモル（Cremor tartari）	瀉下、利尿	−	+	+	+	−	+	69.
59	升汞	Hydralgyri bichloridum（sublimat）$HgCl_2$ 塩化第二水銀	駆梅、骨節痛 皮膚病	+	+	+	+	−	+	87.
60	蜀羊泉	Solanum lyratum（ナス科ヒヨドリジョウゴ）の草本	悪瘡、女子陰中内傷、梅毒、淋疾、骨節痛、水腫	+	+	+	+	+	+	11. 13. 14.
61	焼酒	火酒を見よ	冷積寒気、瘧疾 咳嗽、霍乱、嘔逆	+	+	−	+	−	−	72.
62	消石	Nitrum ; Salpeter ; Kalii nitras ; KNO_3 硝酸カリウム	五蔵積熱、瘰癧、淋疾 黄疸、関節痛、利尿	+	+	+	+	−	+	35. 57.
63	水銀	Hydrargyrum ; Hg	梅毒、悪瘡、消渴	+	+	+	+	−	+	66.
64	水楊梅	Geum japonicum（バラ科ダイコンソウ）の根	強壮、疔腫、疝痛、間歇熱、下痢、赤痢、失血、膿瘍	+	+	+	−	+	+	4. 24.
65	石鹼	脂肪酸のアルカリ塩	腹痛、便秘、痞脹 解凝	−	+	+	+	−	+	34. 42.

66	赤汞	Hydrargyrum oxydatum rubrum; HgO 赤色硫酸化汞（赤降汞）	梅毒性皮膚疾患、咽喉腐爛	−	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	63.
67	接骨花	Sambucus Sieboldiana（スイカズラ科ニワトコ）の花	痙攣、拘急、痰欬、関節痛、咽喉痛、痘瘡、発汗利尿	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	7. 8. 16. 19. 22. 23.
68	セメンシーナ	Artemisia cina（キク科シナ A. maritma ″ブヨモギ）の花蕾	蛔虫駆除	−	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	43. 83.
69	冉（センナ）（栴那（センナ））	Cassia augustifolia（マメ科インドセンナ）の小葉	緩下	−	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	12. 79.
70	双鸞菊	Aconitum sp.（キンポウゲ科トリカブト）の塊根	興奮、鎮痛、新陳代謝を高める。麻痺を治す。	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	32.
71	大茴香	Illicium verum（モクレン科ダイウイキョウ）の成熟果	興奮、健胃、駆風	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	77.
72	大黄	Rheum palmatum（タデ科ダイオウ）の根茎	消炎、瀉下	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	51. 9. 54. 15. 58. 20. 24. 33. 34. 36. 43. 45. 48. 49. 50.
73	大麦	Hordeum sativum（イネ科オオムギ）の子実	消渇、脹満、淋痛腫毒、湯火傷、醸膿	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	2.
74	チキタリス	Digitalis purpurca（ゴマノハグサ科ジギタリス）の葉	強心、利尿	−	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	59. 69.
75	丁（香）	Eugenia caryophyllata（フトモモ科チョウジ）の花蕾	風毒水腫、陰痛、酒毒霍乱、嘔逆	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	16. 18. 72. 77.
76	陳皮	Citrus unshiu（ミカン科ウンシュウミカン）の果実	積疾、上気煩満酒毒、咽喉痛	+	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	6. 77. 79.

	薬名	材料	薬効	漢方	イペイルワート	遠西薬鏡	内外	処方及び備考
77	鉄粉	Ferrum 鋼鉄の粉末	積聚、驚癇、頭痛疔、黄疸、水腫、下利	+	+	+	+	48. 49. 50. 52. 54. 55. 56. 61.
78	土(杜)松子	Juniperus sp.(ヒノキ科ネズ属)の子実	痰飲、関節痛疝痛、水腫、利尿	+	+	+	+	8. 10. 13.
79	土(杜)松木	Juniperus sp.(ヒノキ科ネズ属)の樹皮、樹脂、葉	同右	+	+	+	+	13.
80	糖	砂糖(47)を見よ	心腹熱脹、口乾酒毒、下痢	+	+	+	+	61. 63. 64. 68. 70.
81	藤黄	Garcinia morella(テリハボク科シオウ)のゴム樹脂	眼疾、腫痛湯火傷疔、頑癬、金創、水腫	+	+	+	+	42. 75.
82	橙皮(登皮)	Citrus aurantium(ミカン科ダイダイ)の果皮	腸胃悪気、悪心、疝気熱病、芳香性健胃	+	+	+	+	4. 17. 71.
83	当薬	Svertia Japonica(リンドウ科センブリ)の全草	苦味健胃	+(和)	(青池)センタウリウムを当薬とする	−	−	47.
84	橙葉	Citrus aurantium(ミカン科ダイダイ)の葉	神経病、癇、搐掣	+	+	−	+	1. 18. 66. 76.
85	蓋葉(橙葉)	橙葉を見よ	同右	+	+	−	+	5.
86	肉豆蔻	Myristica fragrans(ニクズク科ニクズク)の子核	心腹痛、霍乱、下利宿食、脾胃虚冷、痰飲	+	+	+	+	72.
87	(覇)王塩	Kalii sulfas; K_2SO_4 硫酸カリウム(Heel vermogende zout)の訳	利尿、解凝、煩渇諸臓の壅塞を治す	−	−	+	−	8. 33. 43.

88	麦門(冬)	Ophiopogon japonicus (ユリ科ジャノヒゲ)の根の膨大部	虚労、短気、嘔吐、肺痿消渇、煩熱、湿痺	+	−	−	−	−	−	3.	
89	薄荷	Menths arvensia (シソ科ハッカ)の葉	宿食不消、霍乱悪心、胃痛、駆風、鎮痙	+	+	+	+	+	−	16. 17. 18. 20. 60.	
90	半夏	Pinellia ternata (サトイモ科カラスビシャク)の根茎	鎮嘔、祛痰、利尿頭眩	+	+	−	−	+	−	6. 11. 12. 15. イペイ Arum maculatum を記し、青地林宗、大半夏と訳す。Arum trifolium を半夏にあてる(薬鏡)	
91	呑糖(礬)	不詳、①晧礬・乳糖(丹礬も可)稍②枯礬・乳糖	唆吐剤治眼中潰瘍	−	+	+	+	+	+	80.	
92	白芷	Angelica dahurica (セリ科カラビャクシ)の根	排膿、鎮痛、経閉金瘡、頭痛、疥癬	+	+	+	−	+	+	1.	
93	枇杷葉	Eryobotrya japonica (ナシ科ビワ)の葉	鎮咳、鎮嘔、下熱止渇	+	−	−	−	−	−	26.	
94	芙蓉(阿芙蓉)	阿片(3)を見よ	鎮痛、止瀉、鎮咳	+	+	+	+	−	+	84. 85.	
95	茅根	Jmperata oylindrica (イネ科チガヤ)の根茎	瘀血、消渇、崩中、衄血、水腫、黄疸、月経不順	+	+	−	−	−	−	2. 7. 8.	
96	蒲公英	Taraxacum sp. (キク科タンポポ属)の全草	乳癰、悪瘡、結核、黄疸腹水、尿閉、硬腫	+	+	+	+	+	−	2. 11.	
77	剝篤亜斯	Kalii carbonas (Potassium carbonate) $K_2CO_3 \cdot 1/2\ H_2O$ 炭酸カリウム	利尿	−	+	+	+	−	+	75.	
98	玫瑰花	Rosa rugosa (バラ科ハマナス)の花	吐血、腫毒、膿瘍下利、衄血、労咳、帯下	+	+	+	+	+	+	24.	玫瑰水眼の洗薬とす。(薬鏡)

	薬名	材料	薬効	漢方	イペイル	ワート	遠西	薬鏡	内外	処方及び備考
99	麻倔（マグネシア）（涅失亜）	Magnesii oxydum ; MgO 酸化マグネシウム、煆性マグネシア	制酸、瀉下、痛風潰瘍（外用）	−	+	−	+	−	+	29. 45. 62. マグネシ（ア）をもみよ。
100	マグネシ（ア）	麻倔をみよ	同右	−	+	−	+	−	+	60.
101	蜜	Mel 蜂蜜	心腹邪気、口瘡、利尿止瀉、丹毒	+	+	+	+	−	+	74.
102	無花果	Ficus carica（クワ科イチヂク）の果実	咳嗽、嗄声、肺炎衝咽喉痛	+	+	−	−	+	−	10.
103	面粉	Triticum sativum（イネ科コムギ）の澱粉	下痢、傷瘡、癰腫湯火傷	+	−	−	−	−	−	31. 32. 37. 41. 57. 59. 84. 85. 87.
104	木香	Saussurea Lappa（キク科モクコウ）の根	健胃、整腸	+	(+) 土木香	(+) 土木香	−	(+) 木香土	(+) 土木香	4. 16. 17. 26. 27. 38. 46. 47. 86. 88. 但し、土木香はキク科オオグルマ（Inula Helenium）の根。
105	没薬	Cammiphora Myrrha（カンラン科モツヤク）のゴム樹脂	瘀血、全瘡、咳嗽、下痢駆虫、月経催進	+	+	+	+	−	+	49.
106	益智（ヤクチ）	Amomum asarum（ショウガ科ヤクチ）の子実	遺精、気不足、吐血腹痛、驚悸、失精	+	+	−	−	+	+	88.
107	山牛房（ヤマゴボウ）	Arctium lappa（キク科ゴボウ）の根	水腫、疝瘕、癰、腹満悪瘡、梅毒	+	+	+	−	+	+	13. 14. ヤマゴボウとゴボウの関係は本文中に詳説
108	葯剌巴（ヤラッパ）	Ipomoea purga（ヒルガオ科ヤラッパ）の根	峻下	−	+	+	+	−	+	40. 68. 81. 83.

118	莨菪越幾私(ロウトエキス)	Hyoscyamus niger（ナス科ロウトウ）の根のエキス	解凝、緩和、鎮痙、水腫	莨菪(+)	+	−	+	−	+	58.
117	緑礬油	緑礬は硫酸鉄鉱の一、Melanterite ; Green Vitriol : Ferrosi sulfas, $FeSO_4 \cdot 7H_2O$	補血、収斂	緑礬(+)	+	−	+	−	−	73.
116	良姜	Alpina officinarum（ショウガ科リョウキョウ）の根	健胃、胃中冷逆宿食、反胃、霍乱	+	+	+	−	+	+	11. 17.
115	龍旦	Gentiana sp.（リンドウ科リンドウ属）の根	苦味健胃、口瘡、黄疸下痢、関節痛	+	+	+	−	+	+	27. 29. 45. 46. 52. 53. 54. 71.
114	龍脳	Dryobalanops aromatica (D. camphora)（リュウノウコウ科リュウノウコウ）の樹脂種子	同右	+	+	+	+	−	+	32. 37. 57. 64. 67. 84. 85.
113	龍	龍脳を見よ	興奮（内用）、神経痛筋痛、挫傷、じんま疹（外用）潰瘍、火傷、凍瘡	+	+	+	+	−	+	63.
112	硫肝	三硫化カリウムと硫酸カリウムと次亜硫酸カリウム等の混合物	皮膚病、水銀中毒、食中毒（浴湯用）疥癬（軟膏）	−	−	+	−	−	−	70.
111	硫黄華	Sulphur 硫黄の同薬集中最安定な斜方晶形	瀉下（内用）抗カビ、皮膚病、角皮溶解（外用）	+	+	+	+	−	+	63. 66.
110	蝋蛤石	Camberoides sp.（十脚類ザリガニ）の胃中石灰質物、オクリカンキリ	利尿、発汗、解凝佝僂病、胃痛、下利	−	+	+	+	−	−	61.
109	楊皮	Salix sp.（ヤナギ科ヤナギ属）の樹皮	淋疾、歯痛、耳痛痔瘻、悪瘡、解熱	+	+	+	−	+	+	55.

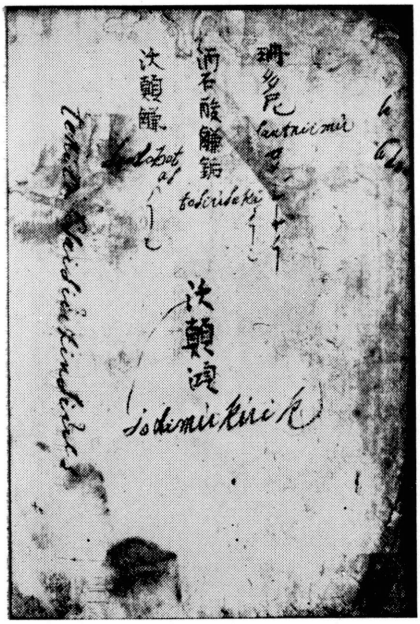
	薬名	材料	薬効	漢方	イペイル	ワート	遠西	薬鏡	内外	処方及び備考
119	芦薈（ロカイ）	Aloe sp.（ユリ科ロカイ属）の葉の液汁の乾燥エキス	瀉下、黄疸、痔、瘡瘻、湿疹、経閉	＋	＋	＋	＋	－	＋	29′52.83.
120	鹿角	Cervus sp.（偶蹄類シカ属）の角	悪瘡、癰、腹痛、血尿、下血、帯下、尿、鎮痙	＋	㊥鹿角精	＋	＋	－	＋	4.
補1	亜鉛華	亜鉛華（本1）をみよ								⑪
〃2	阿片	阿片（本3）をみよ								㉑
〃3	アルニカ	Arnica montana（キク科アルニカ）の根、花	〃	－	＋	＋	＋	－	＋	⑳
〃4	茴（香）	茴香（本6）をみよ								①、⑳
〃5	海葱	海葱（本8）をみよ								⑰
〃6	葛私（カノ）（加（カ））栗刺（リラ）	Croton eluteria（トウダイグサ科植物）の樹皮 Cascarilla ＜cascara＝bark	健胃、補血、止瀉	－	＋	＋	＋	－	＋	①
〃7	乾姜	干姜（本16）をみよ								⑰

補8	甘汞	甘汞(本17)をみよ											⑥、⑧、⑨、⑩、⑫、⑱
〃9	甘(草)	甘草(本18)をみよ											①、⑯、㉑
〃10	姜末	姜(本27)をみよ											⑤、⑭
〃11	全硫(黄)	金硫黄(本32)をみよ											⑥、⑨、⑳
〃12	桂末	桂支(本35)をみよ											⑪、⑰
〃13	綱草末	綱草(本36)をみよ											⑪、⑫
〃14	芫菁	芫菁(本39)をみよ											⑯
〃15	澒	汞＝水銀(本62)をみよ											㉑
〃16	□汞	昇汞か?(昇汞なら本58、甘汞なら本17をみよ)											⑭
〃17	護誤安没尼亜幾	護誤安誤尼亜幾(本45)をみよ											④、⑬
〃18	格綸僕(コロンボ)	Jateorhiza columba(ツヅラフジ科植物)の根	苦味健胃、収斂	−	+	+	+	−	+				①
〃19	薩毘那(サビナ)越幾私(エキナ)	Juniperus sabina(ヒノキ科サビナ)の若い枝先	通経、堕胎、駆虫	−	+	+	+	−	+				⑭

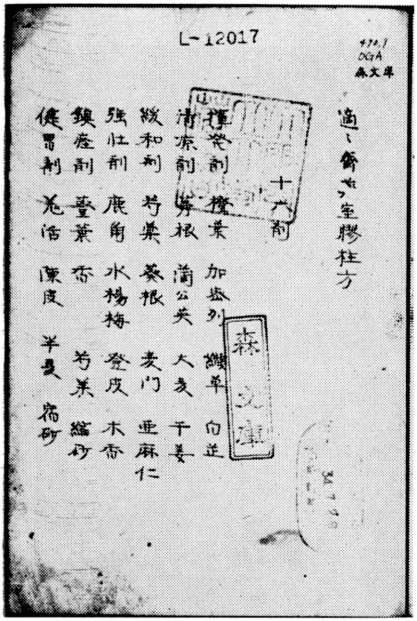
	薬名	材料	薬効	漢方	イペイル	ワート	遠西	薬鏡	内外	処方及び備考
補20	失鳩答（シギユウタ）	Conium maculatum; Cicuta officinalis（セリ科ドクニンジン）の草本	鎮静、鎮痙、腺腫瘰癧	−	＋	＋	＋	−	＋	⑨、⑩
〃21	将軍	大黄（本71）をみよ								⑫
〃22	消石	消石（本61）をみよ								⑤、⑳
〃23	蜀羊泉エキス	蜀羊泉（本59）をみよ								⑨、⑳
〃24	石鹼	石鹼（本64）をみよ								⑧
〃25	摂緜	セメンシーナ（本67）をみよ								⑫
〃26	双鸞菊	双鸞菊（本69）をみよ								⑦、⑨、⑳
〃27	大黄	大黄（本71）をみよ								⑤、⑥、⑧、⑨、⑩、㉑
〃28	チキタリス	チキタリス（本73）をみよ								⑰、⑱
〃29	糖	砂糖（本47）をみよ								②、⑭
〃30	橙	橙皮（本81）、橙葉（本88）をみよ								①、②、⑪

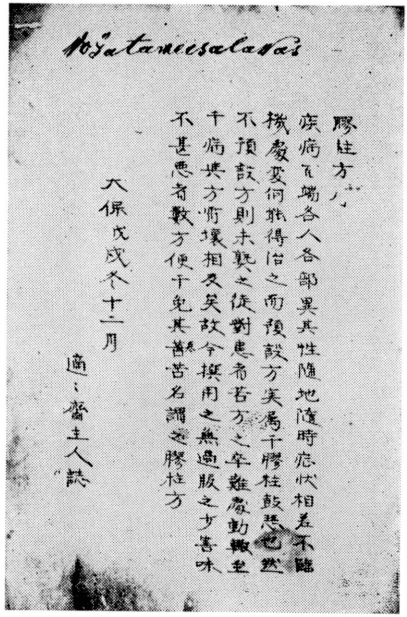
〃31	吐酒石	Stibio-kalium tartaricum ; Antimonii potassii tartaras 酒石酸アンチモニルカリウム	祛痰	−	+	+	+	−	+	⑮			
〃23	吐根末	Cephaelis Ipecacuana（アカネ科トコン）の根	催吐	−	+	+	+	−	+	⑲			
〃33	肉豆蔻	肉豆蔻（本85）をみよ								②			
〃34	（覇）王塩	（覇）王塩（本86）をみよ								③、⑥、⑲			
〃35	芙蓉	阿片（本3）をみよ								⑭、⑲			
〃36	朴屈末（朴窟福烏算）	Guajacum officinale（ハマビシ科）グァヤック、癒瘡木と同じ。Pokhout の訳	駆梅	−	+	+	+	−	+	⑦、⑨、⑳			
〃37	蒲公英根来	蒲公英（本95）をみよ								③、④、⑮			
〃38	ホミカエキス（番木鼈）	Strychnos nux vomica（フジウツギ科マチン）の種子のエタノールエキス		+	+	+	−	+	+	⑳			
〃39	厲（牡蠣？）	Astrea sp.（カキ属の殻）	虚損、煩熱、口渇盗汗、泄精	+	−	−	−	−	−	②			
〃40	麻倔涅失亜	麻倔（本98）をみよ								⑥			
〃41	面粉	面粉（本102）をみよ								⑯、⑰、⑱			

	薬名	材料	薬効	漢方	イペイル	ワート	遠西	薬鏡	内外	処方及び備考
補42	没薬	没薬(本104)をみよ								⑬
〃43	葯巴	刺葯巴(本107)をみよ								③
〃44	沃顛	Iodum ヨウ素	殺菌、消毒、皮膚病	−	+	+	−	−		㉑
〃45	龍胆末	龍旦(本114)をみよ								④
〃46	龍脳	龍脳(本113)をみよ								⑥、⑨、⑯、⑳
〃47	廉(姜)	Zingiber sp.(ショウガ科)の一種ナンバンハジカミの根	胃中冷、吐水、食不下	+	−	−	−	−		①
〃48	莨菪越幾斯	莨菪越幾私(本117)をみよ								⑳
〃49	芦薈	芦薈(本118)をみよ								④、⑧、⑫、⑬


決鬱湯
Ketsuiki tō

490
OGA


L-12017
OGA
森文庫
適々齋主人生膠柱方
十六剤
清涼剤 芎藭 当帰 加味四物湯 羚羊角 白芷
緩和剤 芍薬 甘草 桂枝 麻黄 大麦 干姜
強壮剤 鹿角 水楊梅 麦門冬 亜麻仁
鎮痙剤 蓋薬 香 芍薬 縮砂
健胃剤 苑活 陳皮 半夏 宿砂

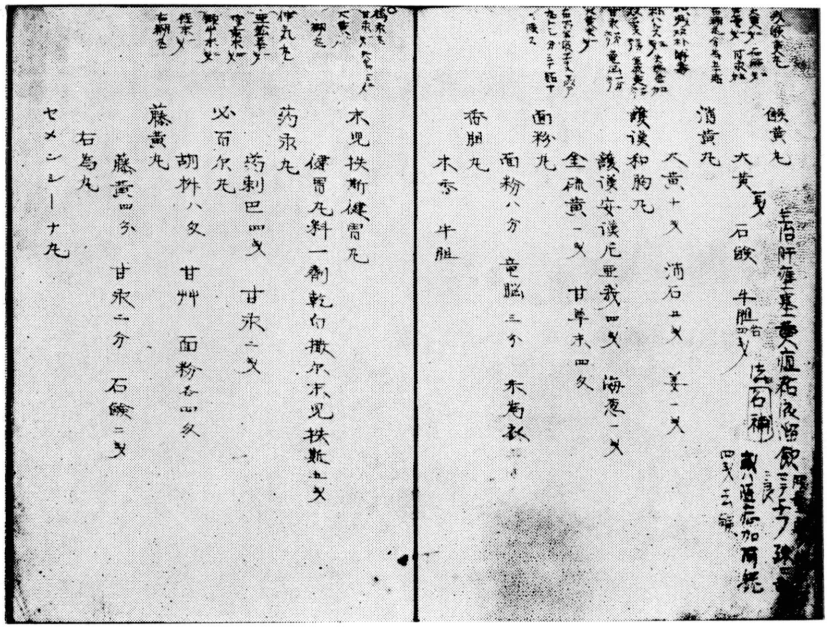

Mojatanisalatas
膠柱方
疾病百端各人各部異其性隨地隨時症状相差不鑑
機変何能得治之而預設方実為千膠柱鼓瑟也然
不預設方則未熟之徒對患者若方之卒難為動轍至
千病共方術壞相反矣故今撰用之無過服之少害味
不甚悪者數方便于免其苦名謂之膠柱方
天保戊戌十一月
適々齋主人誌

發汗剤　芎藭　葵花　梅肩花　紫穢
利尿剤　芎藭　土松子　梅肩花　玉塩
緩下剤　甘草　厚利塩　大黄　干姜
鎮痙剤　無花果　款冬花　杜松子　茴仁
解凝剤　罌粟殼　蒲公英　甘草　良姜
駆虫剤　海人草　半夏　冉那　甘草
排毒剤　杜松子　罌粟殼　杜松子　山午房
駆黴剤　芎藭　奇良　罌粟殼　午房
制吐剤　蒲公英　大黄　半夏　甘草
[illegible]　治[illegible]病
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

健胃剤　橙皮　薄荷　猫砂　木香　良姜
鎮痙剤　橙葉　薄荷　加密列　丁香
[illegible]　柱支
発汗剤　紫穢　梅肩花　加密列　甘草
柱支
緩下剤　厚利塩　大黄　面香　薄荷　姜
[illegible]剤
三癖丸剤　蓼根　葵花　癸葉
花虫製方　苦意　黒柴虎　梅肩花

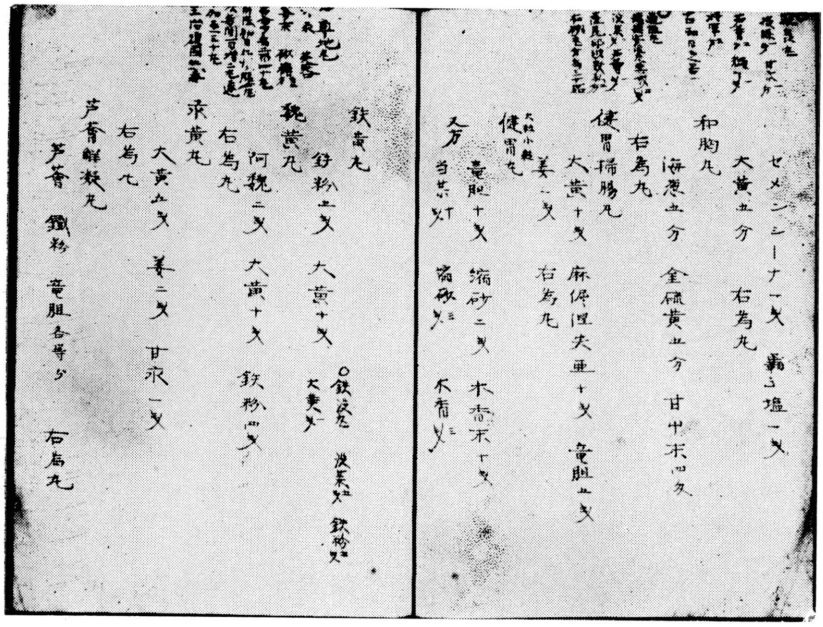
甲眼丸剤　葵花　梅肩花　黒柴虎
[illegible]　苦蓼　水揚梅・玫瑰花
消炎冷敷　硼硝酸水
暑佛　枇杷葉　猫砂　木香　紫穢　帝附子
甘草
山奈健胃丸
山奈三文（竜且十文）猫砂三文　木香三文
和胸丸
海意五分　全硫黄五分　甘草膏七文五分
健胃佛明丸
大黄八十文　麻仮竹　竜且七文　（甘草二文）

主治加味胃有加減佛明丸
清血丸
甘草六分　全硫黄六分　竜且五分
面粉五文
甘草丸
甘草五分　竜脳二方　面粉四文
双鶴甘草丸
双鶴甘草一文　甘草三分　竜脳二分
面粉四文　朱為衣
霜玉丸
霜玉塩五文　大黄十文



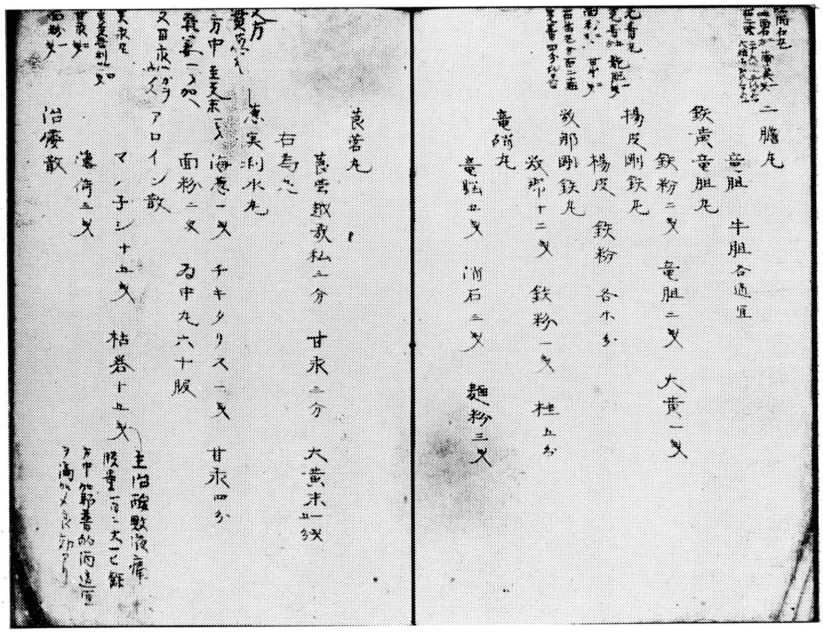
飯黄丸
大黄 石膏 牛胆
消黄丸
大黄十文 消石五文 姜一文
護謨和胸丸
護謨安謨尼亜 我四文 海恵一文
金硫黄一文 甘草末四匁
面粉丸
面粉八分 竜脳三分 木香末
香胆丸
木香 牛胆

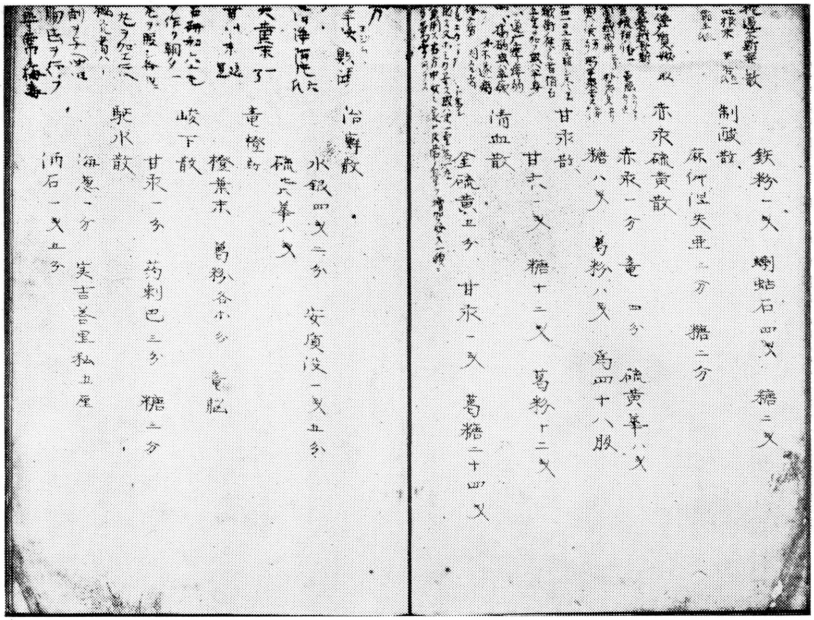
木児扶斯健胃丸
健胃丸料一剤乾白撒尔末児扶斯五文
丸
薬丸
薬剤巴四文 甘草二文
必百尔丸
胡椒八匁 甘草 面粉各四匁
藤黄丸
藤黄四分 甘草二分 石膏二文
右為丸
セメンシレーナ丸



セメンシーナ一文 霸弓塩一文
大黄五分 右為丸
和胸丸
海恵五分 金硫黄五分 甘草末四匁
右為丸
健胃揚腸丸
大黄十文 麻保涅失亜十文 竜胆五文
右為丸
健胃丸
姜一文
竜胆十文 縮砂二文 木香末十文
方
当茶灯 宿砂文 木香末文

鉄黄丸
鉄粉五文 大黄十文
魏黄丸
阿魏二文 大黄十文 鉄粉四文
右為丸
丸
大黄五文 姜二文 甘草一文
右為丸
芦薈鮮散丸
芦薈 鐵粉 竜胆各等分 右為丸





破肝散

破肝二文　糖六文　葛粉六文

水兼健胃酒

火酒六十文　橙皮一文五分　竜胆五文

桂一文五分

加減消痰露

焙酒百二十六文

桂　丁子五文　肉豆蔻二文

胡荽子四文　茴香四文

右蟲餌藥ニノハ十文ノ取ル

エリキシヒヲトリヲリ

緑茶四十文　火酒五十文　桂末一文五分

姜ハ二文五分

右図封スルヿハ日波過ス

客製海麦蜜

海麦四文　醋四十文　蜜五十文

右海麦ヲ極ホトミ女汗ッヽ醋ヲ加ヘ研和シ交

大ニ過テニ分ノ一ヲ減レ蜜ヲ加ヘ煮テ色ヲ公

リ全利別ノ調トス

利水丸

藤黄一文　海恵一文　馬亜斯二文

姜末五文　十六粒ニ藤黄一ヒ海恵一ヒ姜末

ニヒ利馬ニヒヲ含ム

魏黄檀葉丸

阿魏一文　大黄一文　檀葉三文

右為丸

屠蘇方

桔梗五十文　陳皮二十文　八角五文

大茴香五文　桂皮五文　丁子五個

山帰来十五文三分

水八合ヲ

水八合ヲ以テ煮テ五合ヲ取

冉ニ入　甘草一文五分　曲一文

二番服

山帰来六文五ト

黄芩湯

陳皮、桂　熱ナホハ分甘一文二分　冷服

呑糖十二文　甘衣四文　朱一文　八包ニ分ツ

丸茶

ヤラリバ一文　甘衣二分

右為丸三包ニ分ツ

芙蓉丁香

山柄二十四文　芙蓉木二文

セメン丸　山田

芙蓉一文　サルマルチス八分

セメンレーナ二文　ヤラツバ一文

右丸三十貼ニ分ツ

芙求丸

甘草三分　竜脳二分　芙蓉一分

面粉二文　右為丸

芙鉛丸

亜鉛丸五分　竜脳二分　芙蓉一分

面粉二文　右為丸

暑気挿

大黄細末一文　桂皮一文　乾姜二分

車三分　白調匂

外求丸

外求六種　阿片四種　桂末三分

砂糖三分　面粉一文　右為糊丸分二十粒

雞肝丸　使復　代赭　蓮翹　備年

雞肝　蝦蟇

右為丸

A Book of standard formulas "Tekitekisai-yakushitsu-kochuho" written by Koan Ogata

Yasuo Otsuka

Koan Ogata (1810-1863), a well-known physician of the school of Dutch learning, opened his private school named Tekitekisai-juku in Osaka in 1838. It was recently found that shortly after the opening of this school he wrote a book of standard formulas "Tekitekisai-yakushitsu-kochuho" to show essentials of daily practice to his pupils. This was prepared not for publication but exclusively for instruction of his pupils with emphasis on practice. This is the reason why even scientifically important drugs like cinchona are insufficiently mentioned. Cinchona was undoubtedly one of the most important drugs at that time, but it was too expensive for daily practise. We can learn in this book the real features of medical practice in Japan in the first half of the 19 th century.

The present author examines the background of the medical knowledge displayed in this book and explains each of the drugs given in this text with a photocopy of the original text.

後記

緒方富雄

大塚恭男博士の報告にあるように、緒方洪庵が「適々斎薬室膠柱方」を書いていたことを知ったのは、昭和四十五年（一九七〇）のことである。大塚博士は、わたくしの希望をいれて、徹底的に研究し、この大作を完成された。これによって、洪庵がこの処方集を書いたところ、その知識をどのような経路と経過で得たのかをよく知ることができたばかりでなく、ひろく当時の蘭学医がどのようにして処方の勉強をしたかの一端がわかったといえよう。

わたくしははじめ大塚博士との共著ででも発表しようなどと考えて、「くわしくは後日の報告にゆずる」と書いたが（緒方富雄「緒方洪庵の『適々斉薬室膠柱方』と『解剖略式』」日本医史学雑誌第一六巻第三号二一五—二二六、昭和四五年九月）、大塚博士の研究はまことに徹底的で、わたくしが分担して書く必要など全くない。ただこの場所に、さきに例会で報告したなかから、もう一度この資料の由来のところをしるして責をふさぎたい。

これは大阪市立図書館の「森文庫」（森繁夫氏旧蔵本）のなかに「適々斉薬室膠柱方」と題した手書本に、「解剖略式」とともに合綴されているものである。同僚の古西義麿氏がわざわざわたくしに知らせてくださったので、実物を見ることができた。

これはわたくしがこれまでに見たことがなく、世にも知られていなかった資料である。

表紙に題箋がなく、その位置に毛筆で直接に

適々斉薬室膠柱方

と書いてある。膠柱方が十一丁、解剖略式に六丁で、前者の冒頭につぎの序がある。

膠柱方序

疾病百端、各人各部異其性、随地随時症状相差、不臨機処変、能得治何之。而預設方、実属于膠柱鼓瑟也。然不預設方、則未熟之徒対患者、苦方之卒難処、動輙至于病与方齟齬相反矣、故今撰用之無過。服之少害、味不甚悪者数方、便于免其急苦。名謂之膠柱方

天保戊戌冬十二月　　適々斉主人誌

「適々斉主人」は洪庵であり、「戊戌」は天保九年（一八三八）で、洪庵が大阪瓦町に塾をひらいた年の十二月にあたる。

この手写本は大塚博士の論文中に掲載されている。

なおこの手書本には「樋口蔵書」とある。研究者の参考のためとしるしておく。

この資料を見る便宜をあたえられた古西義麿氏にあらためお礼を申しあげる。

原著

西説内科撰要について（二）

大滝紀雄

日本医史学雑誌・第十九巻
第二号・昭和四十八年六月
昭和四十八年三月二十六日受付

三、細字の注釈と引用書

本書の翻訳に約十年の歳月を費したといわれるのは、蘭文の翻訳が困難であったというだけの理由ではなかろう。訳者玄随が原著を十分理解しようとすると同時に、読者に納得のいく説明を与えようと努力したあとが歴然と読みとれる。数多い細字の注釈がこれを物語っている。じじつ、玄随が翻訳に精根を傾けた一七九〇年頃までは、わが国ではヨーロッパの原書は手にはいりにくく、医学に関する翻訳書の数もきわめて限定され、たとえ翻訳されたとしても、印刷され刊本になることはきわめて稀であった。そうした時代にゴルテルの原著には見られないが、翻訳の「西説内科撰要」で玄随が字句の説明を行ったり、多数の文献を引用して解説しているのは注目に価する。

これをみただけでも、「西説」が読者に対してきわめて懇切ていねいな本であることが分る。社会通念的な批判となっている「西説」は難解かつ簡単すぎるが、わが国最初の内科翻訳書としてのみ価値がある、という表現は妥当ではない。

細字の説明を大きく分類すると次の四種類になる。

一　本書何頁何章参照式のもの

二　脚注、補注式の説明

三　漢医または洋医のいわゆる式のもの

四　文献引用による説明

第一の種類は「スデニ第〇〇章ニアリ」「第〇〇章ニ曰ク」「ソノ製法ハ第〇〇章ニ詳ニス」のように記されている。

第二の種類は「原名〇〇〇」「ネエデルランドハ亦和蘭ヲ謂フ」式の簡単なものもあれば、たとえば測胞子の説明のようにやや詳しいものもある。尿崩篇第四十九の二八九章に測胞子の解説があるので記そう。

器ノ名ナリ、羅甸之ヲ葛帝的児(カティテル)ト云、和蘭ニ之ヲ測胞子ト謂フ、銀ヲ用テ之ヲ造ル、細長空管ナリ、柔軟ニシテ橈屈スヘシ、其首鈍円ニシテ小孔ヲ穿チ、後ヨリ弁茎ヲ入ル、把有テ以テ抽引スベカラシム、用テ以テ尿閉ノ患者ニ向テ尿道ニ穿納レ、或ハ胞中ニ達ス、宜ニ随テ其弁茎ヲ抽キ去レハ、小水従テ通ス、名クルニ測胞子ヲ以テスル者ハ、言ハ胞胱中ヲ深測スルノ器ナリ、此器月池公舶来ノ者ヲ得テ以テ式トシテ、工人某ニ命シテ之ヲ製造セシム、殆ト蘭工手ニ成ル者ト弁スルコトナシ、吾輩居然トシテ此奇器ヲ操シテ、其術ヲ施スコトヲ得ルハ、全タ是レ公ノ之ヲ斯土ニ創スルノ余沢ナリト謂フベシ

これによるとカテーテルは銀製で内茎があり、桂川甫周の着眼によって玄随が用いることができ、成果をおさめたことが得意然と記されている。カテーテルの使用については、これ以前すでに吉雄耕牛も用いているので、これがわが国最初とは思われないが、かなり早い時期の尿閉に対する応用であったことが知れる。

ちなみに「増訂内科撰要」尿閉篇第五十四の第三二四章には次のように記されている。

測胞子羅甸名「カテーテル」和蘭名「ブラスペイルデル」即チ測胞子ノ義ナリ。銀ヲ用テ造ル所ノ細長ノ管ナリ。柔軟ニシテ撓屈スベシ。其首鈍円ニシテ小孔ヲ穿チ後ヨリ長茎ヲ入ル。把有テ抽引スヘシ。其茎ヲ抽去テ管ヲ患者ノ尿道ニ穿チ納レ膀胱中ニ達ス。故ニ小水膀胱内ニ緊満スル症或ハ尿道中閉塞アル症ハ其管ヲ納レテ膀胱ニ達シ又其茎ヲ刺シ、マタ其茎ヲ抽キ去レハ小水随テ通ス。但シ婦人ニ施ス者ハ其管短シ、其尿道短キカ故ナリ、往年月池公舶来ノ者ヲ得テ式トシ、工人ニ命ジテ是ヲ製造セシム。是ヨリ世ニ多ク弘マリテ尿閉ニ奇験ヲ奏スルコト勝テ算ヘ難シ

尿崩は尿閉となり、胞胱は膀胱となり（もっとも「西説」でもすでに膀胱の字は用いられている）この時代になるとカテーテルはもはや日常茶飯的に使用されてきたことが分かる。

第三の種類は「洋医ノイハユル種痘」とか、「漢医ノ所謂痛風ニ似タリ」といったたぐいの説明である。洋医の方は引用例が少ないが、「漢医ノ所謂」、「漢医ノイフ所ノ」、「漢医ノ呼ブトコロノ」という表現は二十カ所ほどみられる。これは当時の医家に対する理解を便利にするための表現と考えられるが、中には西洋医学を高く評価し、漢医をするどく批判した注もみられる。

重墜努責篇第四十四の二五八章には、「然レドモ男子ニナキ子宮ノ患、竝ニ陰莢ニ災アルトキ・・・・」の本文に付随して陰莢の説明が次のようにされている。

「陰門脣ヨリ子宮ニ至ルマデノ周囲ヲ云。若シ漢人ヨシテ記セシメハ、徒ニ陰門トノミ云ヘシ。泰西ノ言質実ニシテ密、是故ニ毎ニ視聴ニ習ハサルノ名称多キノミ、虚文濫名ノ類ニ非ルナリ」

陰莢はいうまでもなく膣のことであり、すでに「解体新書」陰具篇第二十六に「其莢。鰍管而連子宮」と記されている。漢医はこれを区別せず、女子外陰部を漠然と陰門というのを非難したのであろう。

第四の種類は文献の引用で「蒲剛（ブカン）ノ著ス所ノ内科書ニ詳ナリ」のように書名を記したものもあるが、その内容を具体的に説明したものや、数書を引用し、玄随自身の意見をのべたものもある。引用図書と引用回数は表に示したとおりだが、引用例として最も多いのは「医学宝函」で、「解体新書」がこれにつぎ、玄随の著わした「東西病考」「遠西名物考」「西洋医言」がこれにつぐ。蒲剛（ブカン）、蒲郎加爾都（ブラチカールッ）、歇伊私的児（ヘイステル）、叔弥児（ショメール）も随所に引用されている。

繁用された「医学宝函」は単に「医学宝函」と書かれている場合が多いが、「西洋の医学宝函」、「ウオイツの医学宝函」と記されている個所もみられる。敗血漿、利尿剤、内熱、熱尿、神経、舞踏病、薬剤の説明、製造法、貼り薬、発泡剤、丸剤など「医学宝函」による説明が多い。本書は玄随の死後二十余年経った文政二年橋本宗吉によって「西洋医事集成宝

西説内科撰要に引用された図書

引用図書	引用回数	引用図書	引用回数
医学宝函	34	ブカン内科書	12
解体新書	25(9)	〃 薬秤譜	2
東西病考（玄随）	20	ブランカールツ医術新論	8
遠西名物考（〃）	19	〃 解剖書	3
西洋医言（〃）	3	スウイーテンの軍中備要方	1
和蘭薬選（甫周）	5	ドドネウス本草	1
医宗金鑑	1	ネイランド草木略	1
病因考	1	西洋諸本草	3
諸術祕蔵	1	ボイス	1
誣熱病論	1	ビフネル百工家言	1
千金方	1	ラウレンス・ヘイステル	2
病原考論	1	瘍医新書（玄白）	1
古今医録	1	八刺精要（玄沢）	1
和蘭局方	5	シヨメル居家纂要	4

函」として著わされた。また小森桃塢の「泰西方鑑」には伍乙（ウオイ）都（ツ）の「医事纂要書」と書かれている。玄随が読んだのは次の書であったろうか。

J. J. Woyt: Gazophylacium medico-physicum, of schatkamer der genees- en natuurkundige zaaken. Amsterdam 1741

（藤井尚久　明治前日本医学史　三巻　一四四頁）

「医学宝函」についで引用例が多いのは「解体新書」である。表に記された「解体新書」欄のカッコ内の数は、「解体新書」とは明記されていないが、あきらかに同書と推定されるものの数で、これを加えれば「医学宝函」の数と同数になる。推定される理由は、「与般亜単屈児武思（ヨハンダンキュルムス）ノ説」「屈児武思（キュルムス）曰ク」「西洋解体書ニヨレバ」「内景詳説」などと記されているからである。

原文に現われた字句の説明にとどまらず、これと関連のある項目の説明を積極的にしている部分もけっして少なくない。したがって細字で八行、十行、二十二行にわたる詳しい説明もみられる。汐乙（ウエイ）（小水、汗）蒲尓度（ブルウト）（血）私物越篤（スウエエト）（汗）毘私（ビス）（尿）奇縷（ゲール）（乳糜）ゲール科臼（乳糜槽）黙尓結（メルケ）（乳汁）

設乙奴忽窟篤（神経汁）太羅念（涙）机里尓（腺）蘇百越吉設尓（唾液）大キリール液（膵液）以上は二十章、二十一章の体内諸液の説明。十二指腸、和腸、回腸（これらを総称して薄腸という）盲腸、虫腸、縮腸、直腸（これらを総称して厚腸という）以上は二十二章諸腸についての説明。二十五章には門脈の説明。一六五章には解体術に必要な十三器具の説明。二八一、二八二章には尿の生成の説明等がある。

「東西病考」「遠西名物考」「西洋医言」はいずれも玄随自身が書き著わしたものだが、これらも数多く引用されている。「東西病考」には病気の症状の説明が多い。「西洋医言」には脳の説明などがあるが、これは項を改めて述べることにする。

「遠西名物考」は薬のことも書いてあるが、酒、皮尓、赤酒、甘葡萄酒、密水、可喜、コーヒー盃、ルーメルチ（小飲器）などの説明がみられる。一八二二年文政五年以降に発刊された宇田川榛斎訳述、同榕菴校補の「遠西医方名物考」「同補遺」をみると蘭方薬物百科辞典のようなもので、イロハ順に薬物の説明が詳しいが、酒やティーカップの説明は見当らない。「西説内科撰要」の細字部分を読むと、玄随の「遠西名物考」の大部分は「医学宝函」がもとで、一部ブランカールツの「医術新論」を原本として訳述したものであることが知れる。「医学宝函ニ詳カナリ、遠西名物考ニ具論ス、……略引ス……訳載ス」などと名記してある。

「和蘭薬選」は桂川甫周（月池公）の著述で A. Munting の本草書が原著と思われるが、ついに刊行されずに終わっている。

「八刺精要」も桂川甫周の著述で刺絡法を書いたものである。原著は Lorenz Heister (Laurens Heister) (1683-1758) の外科書 Chirurgie の刺絡篇にもとずく。玄随死後の一八二二年に大槻玄沢訳、佐々木仲沢増訳の「八刺精要」三巻が刊行された。

『瘍医新書』は前掲 Heister の外科書

Heelkundige Onderwyzingijn 1755（Heinrich Ulhoorn によりドイツ語からオランダ語に翻訳された）でシュルゼイン Chirurgijn と愛称されたものである。上下二巻で一一七〇ページもある大作であり、杉田玄白が吉雄耕牛のところで始めて見て、一七七〇年ごろから翻訳を始めた。玄随の読んだのは玄白の「瘍医新書」だが、玄沢が翻訳をひきつぎ、一八二五年その一部、誘導編四巻を出版している。

内山孝一氏蔵、玄沢の訳本「瘍医新書」の巻首には次のように記されている。（フリガナは筆者）

遠西　老楞佐（ロウレンス）　協乙速的虚（ハイステル）　著撰

若狭　杉田　翼　玄白　起業

東奥　大槻　茂質　玄沢　翻訳

江都医官　桂川　国寧　清遠　参閲

そのほかにも「西説」には辣烏冷私（ラウレンス）　歇伊私的児（ヘイステル）の名は数回でてくる。

蒲剛（カン）内科書、「薬秤譜」は William Buchan（1729–1805）の著書である。ブカンの Huislijke Geneeskunde は一八一七年発行の小森桃塢の「蘭方枢機」と関係が深い。

蒲郎加尓都（ブランカールツ）Steven Blankaart(1650–1702) の「医術新論」は Nieuw lichtende medicynen, 1707 Amsterdam 解剖書は De nieuw hervormde anatomie, 1687 であろうか。

蘇微登（スウイテン）の「軍中備要方」は

Gerard L. B. van Swieten(1700–1772): Kurze Beschreibung und Heilungsart der Krankheiten, welche am öffesten in dem Feldlager beobachtet werden. Wien, Prag, Triest 1758

（労研蔵書　三木栄　体系世界医学史Ⅳ62）の蘭語本（一七八〇）であろうか。

鐸度涅烏斯の本草は Rembertus Dodonaeus(1517-1585) : Cruydtboeck であろう。叔弥児は「厚生新編」Huishoudelijk Woordenboek の著者 Chomel Noel で「居家纂要」は右の Woordenboek の一部と思われる。

「和蘭局方」Nederlandsche Apotheek は西洋薬物公定書でオランダのライデン版、ハーグ版などがある。江戸時代西洋薬物の基準を記した重要な文献で、のちに玄真の翻訳した末刊写本六巻が京大図書館に蔵されている。

「医宗金鑑」九〇巻は一七五二年わが国に輸入された清の書籍である。

「千金方」は正しくは「備急千金方」唐の孫思邈の著、三十巻

以上で文献による説明の項を終るが、彼が引用した書物の名をみると、当時はまだ翻訳されておらず、のちになって種々の人々によって翻訳された書物が大部分であったのに気づく。この点からも玄随の努力が並々ならなかったことがはっきり感じとれる。

そのほか、細字でどんなことが説明されているだろうか。

一三一章では「咽喉ノ諸部ニ属スルノ裏面ハ其膜甚タ鬆脆嫩輭ニシテ其質尽ク私琫斯ノ似ク（原文 sponsachtig）一般ナリ」という本文に対して「私琫斯ハ海産、此ニ海綿ト云。形故絮敗線ノ如ク針眼気孔アリ。潮ニ随テ海磯ニ漂栖ス」と細字で注釈が加えられている。これは「解体新書」巻之一　解体大意篇第一欲審其解体之法者。其要有三矣。に私奔牛私の説明として、「形如線絮。有針眼。其色黄。吾邦呼云海綿或水吸」とあるが、これを参照したものであろう。

一四八章肋膜（原文 Ribbe-vlies）細字説明は次の通りである。

「肋膜ハ二襲ノ膜ナリ胸中ニ周回シテ外ハ胸膜ニ固着蒙被シ内ハ縦膜ト相接シ以テ心肺ヲ周衛擁護ス」となっている。「解体新書」巻之三胸并隔膜篇第十三では「胸膜二襲也　固著胸之裏面。」また「縦隔膜。二襲而共循胸骨之裡。一者囲心向椎骨而著。一者従肋膜骨膜。分為二嚢囲両肺」となっており「内科撰要」の説明の方が分りやすい。

二八一章では「水液ヲ飲ムコト過多ニシテ、且ツ蒸発気ヲ妨ゲ減スルコトアレバ（原文 Het gebruiken van veel Water, en de verminderde uit wasseming maken）血中ニ稀淡ナルノ水液増多スルコト必定ノ道理ナリ」という本文に対し「蒸発気」の説明がある。「平人居常身体ヨリ蒸々トシ発シ出ルノ気アリ、眼目モ見ルコト能ハス、之ニ触ルレトモ覚ルコト能ハス、即チ温々ノ気ニシテ中ニ水気ヲ含有ス……是ヲ蒸発気ト名ク」また、「身体中ノ水液、既ニ功用ヲ成テ老謝セル者、コレヲ老廃ト云、一方ハ小便ヨリ出去リ一方ハ皮膚ヨリ平常蒸出シテ去ナリ、其形ヲ成テ見ルヘキハ是汗ナリ、此物微ナル中ハ居常発出スレドモ、目モ視ルコト能ハサルナリ……病考ニ詳ニス」これは現在われわれのいう「不感蒸散」insensible water loss のことで、すでにこの時代に、玄随がこうした生理現象を知っていたのは、例のサントリオの実験にもとずくものである。サントリオ Santorio Santorio(1561-1636) は三十年間天秤の上で生活し、摂取した食物と排泄した物の量の差よりも体重が軽くなることを実証し、皮膚から水分が蒸発し去ることを発見した。一六一四年これに関する研究論文を発表している。

そのほか碌建（腸間膜）、ココラード（チョコレート）の説明や、乳糜利に関する意見などがある。

一方、神経に対する誤った考え方や、胆汁敗黒症、羅斯（ロウス）など現代医学と相容れないものも多数あり、細字の説明を読めば読むほど分らなくなるものもあるが、これらは本文と直接関係が深いので別項で触れることにする。

以上を要するに、玄随の「西説内科撰要」は、たんに GORTER の GEZUIVERDE GENEESKOSNT の翻訳にとどまらず、細字の注釈をみても、訳者自身の解説づきの書物であり、この翻訳に長年月を要したのは、彼がライフウァークとして心魂を打ちこんでいた気がまえが感じとれるのである。

Seisetsu Naika Senyo (2)

Toshio Otaki

We can find many comments in the "Seisetus Naika Senyo". These comments are written in small characters, and strictly distinguished from the translation of the original textbook. These comments are sometimes only a few notes, and sometimes long explanatory notes. Many books and authors are quoted: Heister, W. Kulmus, J. J. Woyt, A. Munting, Laurens Heister, W. Buchan, S. Blankaart, G. L. B. van Swieten, R. Dodoneus and Chomel Noel.

I think Udagawa Genzui, the translater of this book, not only translated it, but also made great efforts to explain this book by reading many other medical books of the time.

原著

種子島における痘瘡について

河内和夫

日本医史学雑誌・第十九巻第二号・昭和四十八年六月
昭和四十八年二月二十八日受付

(一) はしがき

鹿児島の南端佐多岬より海上数十粁の孤島種子島は孤島とは言え、既に室町時代には京都・堺或は琉球へとその航路はひらかれていた。すなわち種子島より大隅の志布志・日向の鵜戸・細島等九州東岸を北上、瀬戸内を通り大阪・堺への航路。或は南海は大島・徳之島・沖之永良部島を経て琉球に至る航路と、かなり盛んであったと考えられる。人々の往来は痘瘡の流行にも影響があったであろう。

遠海上の種子島においても痘瘡は猛威を振った。僅か一万数千人の島民に対し記録は時に千人の病死を伝えている。資料は種子島家譜（種子島家の正史八十九巻）道潔一代記録（羽生六郎左衛門著三巻）痘局便覧（柳田秋水著一巻）を主として、流行の年次をひろい、或は天保七年冬より翌八年春に至る流行を例として症状および治療法等の概説を試みた。

安政三年（一八五六）はじめて種子島において種痘が行なわれ、文久元年（一八六一）には「島中に施さしむ」とあることは全国的にもかなり早いものであったと思われる。

（二）種子島における痘瘡の流行

種子島における痘瘡の流行を「種子島家譜」を資料として列挙してみるとつぎのようである。

天和二年（一六八二）
　春より夏に至るまで島中疫癘疱瘡　老若死する者多し

元文二年五月（一七三七）
　今年疱瘡流行　死者千人に及ぶ

寛延三年二月（一七五〇）
　この歳疱瘡流行

宝暦十二年二月（一七六二）
　疱瘡流行

寛政三年正月（一七九一）
　一島疱瘡流行す

享和元年正月十二日（一八〇一）
　疱瘡流行するを以て　三ケ寺の僧をして本源寺に於て平安を祈らしむ

文化十四年九月九日（一八一七）
　西街の市人嘉助の二男痘を患ふ　医の請を以て飛船を促して薬種を麑府に買はしむ

天保五年十一月十三日（一八三四）
　西之村の村吏　立石塩戸の長太郎が男子　瘡を患ひて痘に似たりと告ぐ　医中田円泰・柳田喜碩をして之を察視せし

む　報じて曰く　痘なりと　時に村吏請ひて曰く、今年凶歳なれば痘を患ふ者を養ふの米なし　願はくは　官の力を以て流行を止めよと　令して曰く「何ぞ能く之を止むることを為さん　只未だ痘を患はざる者をして　其の家に出入せしむること勿れ　且つ痘を患ふ者は　則ち善く保護して必ず之を忽かにすること勿れ」と

天保七年十月二十六日（一八三六）

医師柳田泰庵　東市街の榎本新四郎の二男　痘瘡を患ふことを告ぐ（痘瘡流行の初め之に染まる者あれば　医之を告ぐるが例なり）

天保八年正月二十一日（一八三七）

即今　痘瘡流行し　悪痘衆（おほ）くして夭亡する者甚だ多し　故に三ケ寺の僧徒をして　本源寺に会堂して軽安を祈らしむ

天保十四年五月（一八四三）

西町桑原六次郎の養子　痘を患ふ

弘化四年六月十日（一八四七）

宮原の里民善吉が児　痘を患ふ　医柳田喜碩　之を政府に告ぐ　即ち僧徒（三ケ寺）をして本源寺に祷せしむ　蓋し旧例に因るなり

弘化四年八月二十八日（一八四七）

野間村に痘を患ふ者あり　其の治療の周密ならざらんことを慮り　用人西村田代時和を遣して臨監せしむ

右の如く種子島家譜による痘瘡流行の記録は天和二年（一六八二）を最初として元文二年（一七三七）の流行まで五十数年、それ以後は二十年、十年或は数年の間隔を置いて弘化年間に及ぶのである。

しかし家譜の記録は江戸時代中期以前は、かなり簡略なものであるため記載されなかったものもあったかも知れぬ。

ところで以上のうち「天保七年丙甲十一月より翌八年丁酉四月」に至る前代未聞の難疱瘡については別の記録（道潔一

代記録）が現存しその実態を知ることができる。

（三）天保七年十一月より同八年四月に至る疱瘡について――道潔一代記録による――

発生

天保七年十一月十九日　東町榎本新四郎次男熱気これあり　疱瘡と相きまり　十九ケ年来の疱瘡　追々町下麓に相かけ流行いたし候処　前代未聞の難疱瘡　過分の仕損じこれあり　毎度御物よりも御祈祷仰せ渡され候てもその詮これなく漸々の難痘　右につき　痘瘡除け方として　子供引きつれ田舎へ逃ぐる趣の人もこれあり　又は山野へ木屋がけ　以来数家の子供召つれ　相隠れ候人もこれあり　又は難痘退治として矢数興行　又は鉄砲を打ち　追い払いの手段おびただしく　誠に以て開闢以来の大騒動……

というように発生・流行なかなかの勢いであったことが知られる。十九ケ年来の疱瘡とは文化十四年（一八一七）流行以来ということであり、種子島家譜の記録とも一致する。同じく「道潔一代記録」を通して軽痘の例・難痘の例を見てみよう。

軽痘の例

天保八年丁酉正月十五日より嫡孫当十二歳菅矢（すがや）こと熱気これあり……（中略）……用意の人参そのほか疱瘡方手当の品々持越し　療医は柳田喜碩殿に前広め頼み入れ置き　用薬看病手を尽し候処　幸ひなるかな　麓中にて二・三番位の軽痘瘡　七日めの夜より八日に相掛け　灌膿相済み　定法の十二日め迄には全快これあり　湯掛り　注連をも取上げ候得共……

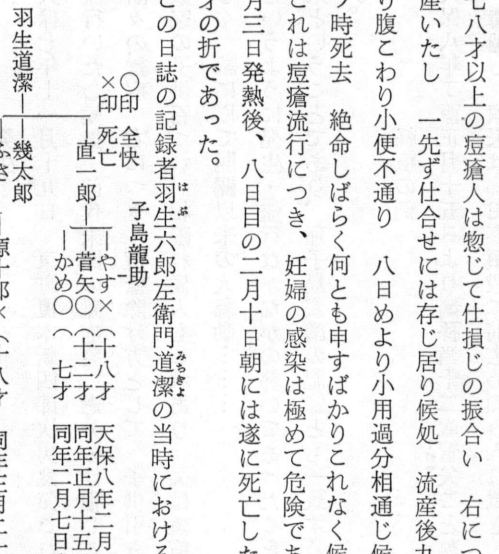
とあるように、これは十二才の男子の極めて順調な軽い痘瘡である。

難痘の例

同二月三日より嫡孫女やすこと　子島氏方熱気相催し　仍て同五日　此方より駕篭用意にて迎えに差越し候　此方江引き取り　種種仕付なり　右につきては彼の方よりも竜助殿は勿論　龍蔵殿御夫婦一同　やす江御附添にて此方江御滞在療医は彼の方にて発熱ぎわより　柳田喜碩殿江頼み入れこれあり　用薬多人数の看病人頼み入れ　養生念を入れ候　初発より六日め迄は　別しての軽痘　惣じての容躰も宜しく　悦び入り　罷居り候処　旧冬十一月頃より懐妊にて罷居り痘瘡流行ニついては　妊婦は一大事のものと古来より申し伝え候訳もこれあり　其の上此の節の痘瘡は　なかんずく十七八才以上の痘瘡人は惣じて仕損じの振合い　右につき　子島氏方働きにて此間より流産の働きこれあり　都合よく流産いたし　一先ず仕合せには存じ居り候処　流産後九日めより痘瘡仕付候得ば　右穢血等の後にても候や　七日め頃より腹こわり小便不通り　八日めより小用過分相通じ候処　漸々難渋に成り立ち……中略……養生叶い無く　同十日朝四ツ時死去　絶命しばらく何とも申すばかりこれなく候

これは痘瘡流行につき、妊婦の感染は極めて危険であるため人工流産をさせたところ、流産後九日目に感染、天保八年二月三日発熱後、八日目の二月十日朝には遂に死亡した例である。十八才の既婚の女子であるが、結婚は天保六年八月十六才の折であった。

この日誌の記録者羽生六郎左衛門道潔の当時における近親者罹病の状況はつぎの通りである。



このようにして天保七年十一月十九日に始まったこの痘瘡は翌天保八年四月中旬まで流行し、西之表村（上西之表・中

西之表・下西之表）およびその周辺の在郷にまで、その流行範囲は及んだ模様であり、死者は二百人余をかぞえたという。西之表中における難痘の者は三百人或は四百人と記録されているが感染罹病者の数は判明しない。

その頃種子島の人口は文化十三年（一八一六）の宗門改めによれば総数一万四千四〇九人と記録されている。

（四）症状および治療法

ところで、この天保七年より八年に至るものか或は弘化四年の痘瘡であるか不明であるが、兎も角、恐らくはこの時期流行の痘瘡についての記述と思われるものが、種子島家の医官柳田秋水（喜碩）著の「痘局便観」の中に見られるのでつぎに記してみよう。

愚亦天行痘ヲ歴ル　再度ニ及ベリ　数百人ヲ治ス　其痘再度共ニ甚重シ　陥痘稠密　鮹（タコ）ノイボノ如ク　其皮堅実膿漿破レ難キモノ十ヶ七　尖円分珠又粟米粒ノ如キモノ僅ニ再三ノミ　又肉脹一片堆起シ　窠粒ヲナサズ　其色熟シタル橘皮色ノ如ク　橙（ダイダイ）色ニ似タリ　膿漿ヲナサズ　毒内攻煩躁シテ死スルモノ多シ……

と述べ、このような難痘治療につき、用薬については

初発三日用方（十四種）　見点三日虚痘用方（六種）　見点三日清火用方（十種）　清補用方（二種）　起脹三日虚痘用法（十三種）　起脹三日清火用方（六種）　起脹三日清補用方（二種）　灌漿三日補益用方（八種）　収靨結痂用法（二十六種）　痘家雑方（二十四種）　女子痘中用方（九種）が述べられ、調剤の方をみるに升麻　葛根　芍薬　甘草　人参　防風　羌活　川芎　連蕎　牛旁　前胡　荆芥　蝉退　木通　黄芪　桔梗　白木　丹皮　当帰　茯苓等その種類は極めて多く恐らくは百種類をこえるのではないかと思われる。

しかし特に痘中の食事には気をつかい

先大人制スル所ノ食量ノ法ヲ家君ニ伝フ　家君モ亦愚ニ伝フ　愚因レ之此レヲ験（コヽロミ）ルニ逆症ト云ヒドモ愈ルモノ多シ

と述べ、昏悶煩躁して人事を覚えず、食味を知らざる者には俗に「煮抜キ」と称するものを製し、竹管を以て鼻中より吹き下し、又昏睡して醒めざる者には「煮抜キ並ニ薬汁」を交代に匙にて昼夜間断なくすすめ、何回かに分けて、その量は平日の量より軽い程度にすすめるようである。食を与えれば煩悶して眠らかった者も暫くは安静にしてよく睡眠をとるものであるという。

また灌膿の時分に与えるものとしては

椎ノ実味甘ク性温　能ク瘡瘍ヲ発表シ能ク膿汁ヲ成ス　功糯米ニ勝レリ……中略……其製　龜皮ヲ去リ　少ク炒リ細末ト成シ　水糖ハ白糖ニ和シ　清酒一・二・三盃ニ混合シ用ヒテヨシ　大人小児分限ヲ量テ与フベシ

とあり食餌療法には、それぞれに工夫し、家伝の法があったようである。

また別に、痘より毒を吸い取る方法として

黒痘痘疔共ニ六七日行漿ノ時分　針ニテ刺シ　傍人ヲシテ焼酎ヲ含ミ　其毒ヲスヒ取ラシム　痘疔ハ其根深シ　破志利膏ヲ敷ク　ヨシ　黒痘其根浅シ　天花粉点ズル　ヨシ　雄黄雑ル　尚ヨロシ

とあり、六日以後には「坤土」を説明して

丹渓先生曰ク　牛ノ性坤土ナリ　能ク胃ク胃気ヲ養フト　吾ガ先大人　斯ニ見ル所有テ　行痘毎ニ虚痘且ツ虫症六日以後コレヲ用ユ　又托裏排膿ノ利有テ　妙験アリ……我土ノ牛肉羶シ　用ヒ難シ　薬舗ニ琉牛肉ト称スルモノヲ取リ　初発清水ニ浸シ毎度水ヲカエ　湿濡ナルヲ待ツテ清水ニテ能々臭ヲ洗ヒ除キ　絞ツテ好酒ニ漬シ　酒気透徹シテヨリ　其レヲ擘キ瀑シ　乾シテ刻ミ用ユ　炒ルベカラズ　炒レバ臭気甚シク服用シガタシ　毎用好酒一盞ヲ加服シテ佳ナリ　薬名ヲ称シテ坤土トイフ

また、聶氏諸薬を製するに皆好酒を用ゆとして

酒ノ性ハ熱能ク気血ヲ通暢シ薬気ヲ奔走シテ痘家ノ聖薬ナリ

と種々家伝の方法を記しているが、無事痘業成就するに及んでは「道潔一代記録」はつぎのように述べている。

灌膿相済み　定法之十二日め迄には全快　ささ湯掛り　注連をも取上げ候得共……痘瘡は成就にて　目出度く本家ニ而祝儀之盃共取はやし　誠ニ以て大慶斜ならず

快気祝いには親類をあげての喜びの様子がうかがわれる。

（五）対策

施薬

種子島家譜に

天保八年二月（一八三七）

松寿院殿　鶴膏を痘を患ふ者に賜ひて　難痘を治せしむ　諸人恩恵の辱きを拝す

天保八年四月（一八三七）

痘瘡流行するを以て　馬毛島に狩して鹿茸を取る

というように施薬にも心を配った様子である。

種痘

やや時代を下り　弘化年間の流行には同家譜に

弘化四年九月二十二日（一八四七）

用人西村直之進時義　西村十左衛門時弘　河内六郎時然　種子島友之助政教を遣して　村邑を巡視せしむ　男二十才以下女十五才以下未だ痘を患はざる者をして方に痘を患ふ者に親炙してこれに染ましむ

弘化四年十月十八日（一八四七）

府下　痘を患ふ者漸くにして痊ゆ　将に近村の児輩をして　病気に染ましめんとす　乃ち冥護を本源寺に祈る　用人・内横目侍席す　近村の児ある者をして詣でしめ　与ふるに神仏の符を以てす　而して医をして児輩を拉し　痘を患ふ者の家に至りて之に染ましむ

嘉永三年正月十一日（一八五〇）

吉良元民をして種痘の術を前田杏斎に学ばしむ

嘉永三年三月十五日（一八五〇）

前田杏斎をして二女（波津・多慶）に種痘せしむ

安政三年二月十日（一八五六）

牛痘の種を輸入し　島に於てはじめて種痘を行なう

文久元年四月十八日（一八六一）

医師河東三折をして牛痘を麑邸に在る者に種ゑしめ而して帰って之を島中に施さしむ

右に見られるように、人痘種法に続き、牛痘苗接種へと予防法がとられるのであるが、種子島における牛痘苗接種のはじまりである安政三年（一八五六）、ついで文久三年（一八六一）の島中への接種は、鍋島藩の嘉永二年（一八四九）、或は種痘所設立の安政五年（一八五八）と比較してみるならば僻遠の離島としてはかなり早い時機であったといえよう。

また種子島家譜に

天保七年十二月十一日（一八三六）

痘疹を患ふ者寖く多きを以て　十二時の鐘を撞かしむ（事旧による）

とあるのは看病人が時間を知ることにより交代して看病し休息に便ならしめようとしたものであったという。

（六）神仏への祈願

無病息災延命の祈願は常々行なわれるものであるが、痘瘡および悪疫流行或は旱魃蝗害その他あらゆる災難到来の際には当然、種子島家菩提寺である本源寺（法華宗寺領百五十石 草創文明元年）或いは三ケ寺（慈遠寺本源寺大会寺）の僧徒会同し祈祷が行なわれるとともに願文が献ぜられるのが例となっていたようである。

また本源寺においては護符を与え、神仏の加護を祈ったのである。

善応院日皓（法華宗の僧侶）の署名ある「御符書」、これは恐らくは江戸時代末期の書写ではあるまいかと考えるが、つぎの事柄が心得肝要として強調されている。

専ニ慈悲一身心清浄ニシテ常ニ仏神照覧不レ可レ忘事

信心堅固ニシテ離ニ貪欲一離ニ色欲一無念無想ニシテ非道念不可叶也

一不レ可レ喰ニ五辛一事　一諸勝負之事

一不レ可レ呑レ酒事　一不レ可レ見ニ不浄一事　一不レ可レ笑事

一睡眠之事　一臥事ナカレ

右之条相守ルベシ

不相守而イカニ読経イタシ候而モ不相叶事心得肝要

とあり、真剣に仏の加護を祈るものであったことがわかるのである。

この御符書に「モカサの符」二種、「イモハシカの符」一種が記載さているが、それぞれ一つずつをつぎに示してみよう。

モカサノ符

一　子妙法蓮華經鬼神母

口伝云鏡鉢ノソコニフシカネヲ硯ニシテ子供ノ年数ヲ書テ子ノ頭ヘニカフセテ普賢呪十二返　題目年数可唱

イモハシカノ符

一

此符書クル時直ニ可呑
祈念自我偈三十返
普賢呪十返

（七）痘局便覧

つぎに痘局便覧につきその所説を掲げ、幕末における種子島漢方医の痘瘡に関する知識をいささか述べてみたい。

幕末種子島家の医官の一人柳田秋水著すところの「痘局便覧」は何洛英　張路玉　銭仲陽　朱嘘萬　陳文仲　郭子章程少岐　李東白　久吾聶　戴曼公或は東都の痘疹医池田先生の所説を参考として、痘瘡の歴史、名称につき略述し、四節及び八症の分辨を、それに加えるに順痘の治例を、又熱毒壅遏肌肉痘不二発透一。表虚気虚血虚内虚。血熱血実血毒。火極。雖レ利而可レ下。熱毒已解（ソ）（グニ）紐用二温補一。の治例を辨じ、附するに虚実不レ切レ脉。審二内外之症一。用二毒薬一攻レ毒。の辨を述べて参考としている。

明治六年の著であり、時に秋水七十六才である老齢からしても幕末漢方医の痘疹についての一般的知識を記したものと考えてよいと思う。

証候および原因

天地ハ十二月ヲ以テ生長収蔵ヲナシ　痘瘡ハ十二日ヲ以テス　三日ニシテ一転シ　三四十二日ニシテ生長収蔵ノ令行ハル

として

一二三日　見苗三日　春ノ令

四五六日　起脹三日　夏ノ令

七八九日　灌漿三日　秋ノ令

十十一十二日収靨三日　冬ノ令

右のように四節に分け　各節を三日としている。

大抵六日以前ハ熱ニ属シ　実ニ属シ　六日以後ハ寒ニ属シ　虚ニ属ス　然レドモ間々此レニ反スルモノアリ　知ルベシ

痘ハ天瘡ナリ　聖瘡ナリ　虚霊変化測リ難ク　其勢ヒ眉ヲ燃クガ如ク　其変　掌ヲ反スガ若シ　故ニ痘ノ形色ト唇舌トヲ能々験ミ認メテ内外ノ虚実寒熱トヲ辨ジ　四節ノ期日　八症ノ妙境ヲ探リ　寒熱虚実ノ玄機ヲ究ム　是痘瘡ヲ治スルノ軌轍ナリ

と述べ　八症四節の期に応じて治療するならば治癒せぬものはないといい、薬の四法を説き、平順の常法を述べ、変ずるに及んでは危症百出多端であるが故に、その変症順逆に随って治すのであるが、そのためには先ず痘の形と色とを察して外を候い、唇と舌とを察して内を候い又痘神形神気神の三神備わると備わざるとを見て候いとするのであるという。

また気血調和して痘症も亦自然に順美となるのであるが故に胃気の栄養を得しめることを以って肝要としている。

なお痘瘡の原因については

家君嘗テ愚ニ語ゲテ曰　痘ノ流行スル一タビハ軽ク一タビハ重ク　此レヲ以テ観レバ古人所レ謂歳運ノ気令レ然カ　将タ一種痘疫ノ異気有テ所レ為カ　朱嘘萬曰　吉年ノ痘ハ凶ト雖モ必吉　凶年ノ痘ハ吉ト雖モ必凶ト

また

昨日出生ノ児　今日痘瘡ヲ患ヱザルニ非ズ　然レバ胎毒タルハ明白ナリ

と述べて、歳運の気か或はまた一種痘疫の異気の為す所であり、それが禀受胎毒の気と相触れるとき熱となり、現われて痘をなすというのである。当時の漢方医の一般的所説であろう。

（八）その他種子島家譜記載の痘瘡の記録

寛永十二年正月（一六三五）

光久公旧臘江府に於て疱瘡を憂ふ　忠時　遠藤権之助家儀を以て願書を献ず

寛永十二年二月二十二日（一六三五）

光久公書を賜ひ　先に忠時が願文を献じて公の疱瘡を候ふを謝す

正保元年四月十三日（一六四四）

忠時の孺人（年三十）鹿児島に卒す　疱瘡を患ふなり　光久公忠時の邸に臨んで之を哭す

鶴袈裟及び女子鹿児島に於て疱瘡

元禄四年十二月朔日（一六九一）

千代亀疱瘡を病みて夭す　法号妙香（年五ツ）正建寺に葬る

元禄四年十二月十日（一六九一）

萬袈裟疱瘡を病みて夭す　正建寺に葬る法号妙相（年七ツ）
享保十一年二月二十三日（一七二六）
熊次郎疱瘡を病んで死す（年五ツ）法号春生示空童子　正建寺に葬る
享保十一年三月十二日（一七二六）
六次郎疱瘡を病んで死す（年四ツ）法号元貞真浄童子　正建寺に葬る
安永七年正月十三日（一七七八）
要次郎疱瘡を病んで夭亡す（年四ツ）法号春月幼孝
享和三年正月三日（一八〇三）
飛船麗府より到りて鶴袈裟疱瘡を病むと告ぐ
享和三年正月四日（一八〇三）
用人種子島大九郎　医吉良見龍をして鶴袈裟の病を問はしむ　久柄夫婦　鶴袈裟　右門　左八郎及び家老物奉行用人
側用人　願文を本源寺に捧げて疱疹の平快を祈る　差あり
文化十二年正月七日（一八一五）
痘を患ひて卒す　法諱春醒院殿妙悦大童女
天保五年七月十二日（一八三四）
第二女子（字は文）痘を患ふ
天保五年七月十三日（一八三四）
三ケ寺の僧徒をして本源寺に会し　女子疱瘡の軽安を祈らしむ・
天保五年七月十七日（一八三四）

飛船を促し　医師柳田喜碩　山下要輔をして本府邸に赴かしむ　女子疱瘡を以てなり

天保五年八月四日（一八三四）

第一女子（字は与）痘を患ふ

天保五年八月八日（一八三四）

柳田喜碩を褒詞す　祖父より三世　医を業とし諸人の病苦を救ふ　今歳三女子痘を患ふを以て　本府邸に役して保護怠らず　三女子をして快く平癒せしむ　故に之を賞するなり

天保五年十月（一八三四）

祈念僧宜承院を褒詞す　祖先を奉じ　日夜勤行して怠らず　且つ誦経千部　女子疱瘡の軽安を祈る　故に玆に及ぶ

弘化三年三月十五日（一八四六）

井元弘恵満徳寺に寺入七日　頃日疱瘡　大泊に流行するを以て未だ疱を患はざる者を遣はして　之に染ましめんと欲す　弘恵が子恕仙　初め快として之を肯ひ　後之を辞す　其言朔乱なり　故に玆に及ぶ

（九）むすび

以上種子島における痘瘡につき資料の紹介を中心としながら、その大体を述べたのであるが、江戸時代にあっては、医療は医療としてそれに並行しつつ常に行なわれたのは神仏への祈願およびそれに伴なう呪（まじない）であった。がしかし、これは単なる無知蒙昧というものではなくして、いわゆる科学的知識の欠如はあったとしても、それは当時の人々の生活態度そのものであったことと考えたい。

種子島の疾病史は或は痘瘡史といっても過言ではあるまい。その発生に至っては時に軽痘あり時に難痘あり、難痘の場合には人事を尽してただ「天運遁れ難く」と死を嘆かざるを得ない。

ところで牛痘苗接種についての柳田秋水の見解につきいささか述べてみよう。

その著「痘局便覧」に

頃者世ニ牛痘ト称スル者アリ　其原異邦ノ人為ヨリ出ヅ　素ヨリ天行ノ痘疫険逆ノ症アッテ百薬千慮スレドモ治方及バズ　死スル者多キヲ以テ　天行ノ痘ヲ牛ニ種シ試ルニ　百牛皆順痘ニシテ恙ナシ　因テ其痘ヲ人身ニ験ルニ都テ順痘ニシテ皆安全ナリ　未ダ天行痘ニ係ラザルモノ再度種スレバ仮令ヒ天行ノ痘ヲ患フト雖モ皆軽痘ニシテ無難ナリト　誠ニ天下人民ノ至宝此レニ尚フベケンヤ

と種痘の効を力説しながら

今世ニ行ハルル牛痘ハ人為ニ出テ其種スルヤ肌肉ニ求テ皮膚ニ発達ス　内胎毒ニ求メズ　故ニ再三患ルニ似タリ

とあり、また平山武粛の「痘局便覧序」にも

近時所謂牛痘者大行二于世一。主張其法一者曰。一施二之於人一則生涯免二於痘患一。試見之一或然。或不レ然。竟似レ無二確拠一。

とあって、牛痘苗接種の効果をいささか疑っているように思われる。

これらの記述より考えるに、柳田秋水の牛痘苗接種に対する考え方は、種痘は決して痘瘡予防の決定的な手段ではないとし「其種スルヤ肌肉ニ求テ皮膚ニ発達ス　内胎毒ニ求メズ　故ニ再三患ルニ似タリ」というように牛痘苗接種は内的な原因にまで迫らないが故に根本的な予防への方策とはなり得ないと考えているのである。

種痘をしたのにも拘らず「再患」した事例を見聞したのでもあろう。がしかし、そうでなかったにしても秋水は種痘の予防性をそうたやすくは容認しなかったであろう。秋水の漢方医家としての宋儒的自然観と蘭方医家の実証性と論理性を重視する即ち科学的思考方法による自然観とは互に相容れ得ないあるものを持っていると思われるのである。このような考え方も当時の漢方医家の考え方としては揆を一にするものであろう。

その痘瘡も種痘の普及とともに、弘化年間の痘瘡流行を最後として明治に至るのである。

文　献

一、種子島家譜（八十九巻）
一、道潔一代記録
一、痘局便覧（柳田秋水著）
一、日本疾病史（富士川　游著）
一、鹿児島県史（第二巻）

On the Ehidemics of Smallpox in Tanegashima

Kazuo Kawachi

I have examined the epidemical years of smallpox in Tanegashima based of the Tanegashima-kahu (86 vols). We can find that there were 11 or 12 times of epidemics of smallpox from 1682 to 1847 in this book, but also there are more than 40 records of cases of smallpox. This indicates that there was much more interest shown in smallpox in other diseases.

Then in that time, how did the epidemics spread out? Fortunately, there is "Michikiyo Ichidai Kiroku" (the Diary of Rokurozaemon Michikiyo) which answers this question. In this diary, a few of the cases of smallpox were described in detail. Particularly, he described the cases of his own grand-children suffered from the disease but who recovered. After complete recovery, a ceremony took place, in which the Shimenawa adorned the room and all the family drank to their health. He also wrote of the case of his grand-daughter, 18 years old, who was suffering from severe smallpox. In this case we can know how dreadful the disease. This epidemic lasted from the winter of 1836 to the spring of the next year. And it was so violent that of six children, from 7 to 18 years old, that had smallpox only two survived.

On the other hand there is the Tokyoku-binran (a book of treatment of smallpox) which was written

in 1873 by Yanagida Shusui, an old physician of Chinese medicne. According to this book the process of it was divided into 4 grades and 8 symptoms appeared, and he described how to recognize these differential symptoms and the methods of treatment which included the traditional medicines and dietary cure.

In 1853, vaccination was first introduced in Tanegashima, but there is the record in the Tanegashima-kahu that Kira Genmin, an official physician in Tanegashima, had learned the method of vaccination and Maeda Kyosai, a physician of Satsuma clan, had vaccinated the princesses of the Lord of Tanegashima in 1850. According to the Tokyoku-binran, the author recognized the effect of the vaccination in a sense, but he did not always think it perfect for the prevention of smallpox. This is perhaps the normal reaction of physician of Chinese medicine.

Even today, we sometimes see a person, suffering from severe illness, whose only method of treatment is to pray to the Buddha and Gods. In the Edo era there was much more common. Particularly when the epidemics of smallpox occured, the prayer was taken at the Hongenji, the family temple of Lord of Tanegashima, and the children not suffering from the disease were given the holy cards.

日本医史学雑誌・第十九巻
第二号・昭和四十八年六月
昭和四十八年四月十日受付

原著

華岡青洲による最初の全身麻酔の期日について

弘前大学医学部麻酔科　松木明知

一

華岡青洲の業蹟の中で特筆すべきものは何といっても通仙散の服用による全身麻酔とその影響下における種々の外科手術であろう。

多くの医学史関係の文献[1]~[7]によれば、青洲が最初に全身麻酔下乳癌の手術を行なったのは文化二年十月十三日であるとされていた。しかし筆者が日本麻酔学史執筆のため調査して見ると従来の説が誤りであることが判明したのでここに報告する。

二

「乳巌姓名録」[8]には青洲が治療した一五六名の所謂乳癌患者の性名、住所、年令、年月日などが記されている。もちろん全例が外科手術的療法を受けたか否かは明らかでないが、少なくとも最初の三例は内科的治療を受けたものと推察される。第四例が問題の症例で「文化元年十月既望　和州五条訳　藍屋利兵衛母」とある。

天理図書館に所蔵されている青洲自筆の「乳巌治験録」は右の症例報告であるが、これには手術の期日を単に「十月十三日」と記載している。

森慶三は右に示した二つの文献に見られる手術期日の差違について「恐らく藍屋勘が初めて青洲を訪れたのは文化元年十月のことであったが、その時には青洲もまた患者自身もともに不安を感じて大手術を実行するに至らず、それから一年後の文化二年十月、患者の腫瘤の腫大と全身状態の悪化を来たすに至り、患者の強い願いがあったので、青洲も遂に意を決し、大手術に踏み切ったものと考えられる」と説明している。[8]

しかし「乳巌姓名録」において少数例ではあるが、摘出した乳癌の重量が記載されていることから、筆者はこの中に示された年月日は手術を受けた症例については初診日というよりもむしろ手術日を指していたのではないかと考えた。しかしこれを証左する史料もなかった。

三

右の問題の解決には藍屋勘がいつ死亡したかが判明すれば何か新しい知見が得られるのではないかと考え、奈良県五条市教育委員会の桜井安雄氏に探索方を依頼したところ、偶然にも五条市講御堂寺（森本順考師）の過去帳にその名が発見され、次のように記されているとの御返事を戴いた。

五条村北之町

藍屋利兵衛の母おかん

法名　春月智了信女

文化二年丑二月二十六日

過去帳の記載はまず誤りのないものと見て差し支えないであろう。つまり藍屋利兵衛の母かんは実は手術を受けたとさ

れた文化二年十月よりも八ケ月も以前に死亡していたのであり、文化二年二月二十六日以前に手術を受けたことが判明した。

このことから「乳巌姓名録」の「文化元年」は初診日というよりもむしろ手術の年を示すものであり、「乳巌治験録」の「十月」も文化元年を示すことが明かになった。

しかし「日付」についてはなお若干の差が見られる。「乳巌姓名録」には「十月既望」つまり十月十六日とあり、「乳巌治験録」には「十月十三日」とある。三日の相違は現在のところ次の様に考えるのが最も妥当と思われる。

青洲が全身麻酔科下に手術を決行したのは十月十三日であった。最初の全身麻酔下の手術であるため、術後の患者管理に不眠不休の看護をして、十六日つまり「既望」に至って漸く状態も落ちついたので手術台帳とも言うべき「乳巌治験録」に「文化元年十月既望」と記入し、後に改めて乳癌に対する諸家の見解と共に利兵衛の母勘の術前状態、麻酔術式を回想して述べた「乳巌治験録」には手術期日を十月十三日と記載した。

右の推察についても全く疑義がないわけでなく、さらに新しい史料、例えば藍屋家側の日記などの探索が期待される。

四

奈良県五条市講御堂寺の過去帳の調査によって、華岡青洲が初めて全身麻酔下に乳癌手術を施行したのは従来の説よりも一年以前の文化元年十月であることが判明した。患者の藍屋利兵衛の母勘は翌文化二年二月二十六日、術後四ケ月半で死亡した。「春月智了信女」がその法名である。

なお本稿の主旨は日本麻酔学会の機関誌「麻酔」昭和四七年三月号に発表したが、読者が極めて限られているため改めて本誌に発表するものである。

文献

(1) 藤井尚久、本邦医事文化年表。明治前日本医学史　第五巻。日本学士院編所収。日本学術振興会。昭和三二年。
(2) 大槻如電原著、佐藤栄七増補。日本洋学編年史。錦正社、昭和四〇年。
(3) 太田正雄編。日本の医学。民風社。昭和二一年。
(4) 山村秀夫。痛みの征服。日経新書　日本経済新聞社。昭和四一年。
(5) 小川鼎三、医学の歴史　中公新書　中央公論社、昭和三九年。
(6) 竹林　弘、華岡青洲　麻酔　二一巻四四頁、昭和三八年。
(7) 呉　秀三、華岡青洲先生及其外科　思文閣、昭和四六年　複刻版。
(5) 森　慶三、医聖華岡青洲　医聖華岡青洲顕彰会。昭和三九年。

The Correct Date of the First General Anesthesia by S. Hanaoka

Akitomo Matsuki

Seishu Hanaoka performed many surgical operations under general anesthesia with "Tsu-sen-san" as early as the beginning of the nineteenth century.

It had been long believed that he performed an excision of the breast cancer on a woman named Kan Aiya under general anesthesia on October 13, 1805. However, the author recently found the date of her death, February 26, 1805, in a necrology of Kohmido-ji Temple located near her hometown. The fact that she died on February 26, 1805 means she must have undergone the operation previous to this date. In his manuscript describing the case under consideration, Hanaoka stated that he undertook the operation on October 13, without giving the year, however, he also wrote that he consulted her on October 16, 1804 in "a Name List of Breast Cancer". This discrepancy resulted in an incorrect conclusion that Hanalka examined her on October 16, 1804 and a year later, October 13, 1805 he performed the operation.

The author's investigation of the necrology of Kohmido-ji Temple brought out that Seishu Hanaoka administered the first general anestesia for the excision of the breast cancer on October 13, 1804.

(Department of Anesthesiology, University of Hirosaki, School of Medicine, Aomori-ken, Japan)

日本医史学雑誌・第十九巻
第二号・昭和四十八年六月

昭和四十八年五月二日受付

原著

写経生と病気

新村拓

本論は正倉院文書によって知られる奈良朝の写経所における写経生の病気という現象を通して、律令制下級官人の生活をながめたものである。特殊勤務からくる疾病が、令外の官である写経所においていかに処置され、病人はいかなる生活を過さねばならなかったか、下級官人としての写経生の生活の一面を考えてみた。

第一章　写経生の疫病

表Ⅰは写経生の疾病についてみたものである。なお[1]、身内の者の疾病―例えば胸病（四430）瘡病（六113）、足悪瘡（十六323）、腫瘡（十七603）等については省略してある。この表をみてわかるように足病（21）、赤痢（14）、腹病（9）、下痢（7）、瘡病（7）、胸病（6）、といったところが多く、特に足病が病名の知れるもの（86）のうちで$\frac{1}{4}$を占め、群を抜いているのが目立つ。

忽足病発、不安立居、加以稍毎経日痺痛弥増、望請仮日、欲将療治

とは長江田越麻呂の解にみるところであるが、歩行困難を訴えて暇日を請う者が多い。また「痢病身弱力損」（大宅立足）、「眼精迷矇、不堪取筆」（辛由首）、「依咳咽之病并胸痛、欲服薬」（桑内真公）と解にみえるものであるが、この種の疾病

表Ⅰ. 写経生の疾病

氏名	年月日	病名	治療	請暇日数	出典
島浄浜	天平宝字 2.10. 1	病		3+5	四 338
山乙麻呂	〃 2.10. 5	〃		(9.24)	〃 339-340
氏名欠	〃 2.10.10	〃			〃 345
道守徳太理	〃 4. 3.21	脚病・足瘡		(去年11月)	〃 415-416
広田清足	〃 4.10.24	足瘡		10+?	〃 446-447
十市倭麻呂	〃 5. 1.15	腰病		4	〃 486
中臣諸立	〃 5. 1.19	脣悪瘡		4	〃 487-488
鼻乙麻呂	〃 6. 8.11	足瘡			五 270
万昆太智	〃 7. 4.15	下痢	服薬		〃 435-436
坂合部浜足	宝亀 1.10.10	冷病(腫疼)		5	六 108
秦広人	〃 1.12. 3	痛		2	〃 110
坂本東人	〃 2. 2.20	足病		10	〃 118
秦広人	〃 2. 3.20	〃	服薬	5	〃 130
秦忍立	〃 2.閏3.13	胸病		3	〃 163-164
大友路万呂	〃 2.閏3.22	股瘡	蛭食治	5	〃 166-167
僧衛光	天平宝字 2. 4.20	足病		治療請暇日数はなし	〃 172
氏部小勝	宝亀 2. 5.27	赤痢		7	〃 173
敢臣男足	〃 3. 3.21	病		2	〃 288-289
桑内真公	〃 3. 3.23	頭瘡(虫瘡)	薬師治療		〃 289
壬生広主	〃 3. 4. 1	足病・腰病	治焼	5	〃 312
桑内真公	〃 3. 6. 8	足病		4	〃 330-331
久米熊鷹	天平 20.11.20	腹病		(10.25)	十 441-442
秦姓弟兄	天平感宝 1. 6.27	足病			〃 664
小治田人君	天平宝字 2. 7.14	痢病		(7.11)	十三 462
大宅立足	〃 2. 7.19	〃・衰弱			〃 475

常世馬人	天平宝字 2. 9.20	瘡病(出膿)		3カ	十四	175-176
辛広浜	〃 2. 9.10	下痢		(9. 7)	〃	376
山乙麻呂	〃 2.10. 5	病		(9.24)	〃	401-402
紀主人	〃 4. 9.18	頭病		1+5	〃	443
高市老人	〃 4. 9.27	病			〃	445
広田連清足	〃 4.10.24	足瘡		10+?	〃	447-448
氏名欠	〃 4.10.25	病		3	〃	448
陽胡田次	〃 5. 1.14	〃		(1.1)	十五	88
角恵麻呂	〃 5. 1.?	赤痢			〃	88-89
能登忍人	〃 5. 1.16	病			〃	89
春日伯	〃 5. 2.22	腹病		3	〃	101
猪名部枚虫	宝亀 ?. 2.28	病			〃	355
氏名欠	〃 1.10. 7	〃		3	十七	561
念林宅成	神護景雲 4. 8.11	衰弱		5	〃	562
刑部広浜	〃 4. 8.11	目病		10	〃	563
坂合部浜足	〃 4. 8. 8	赤痢		3	〃	563
赤染広庭	〃 4. 8. 6	病		2	〃	564
坂合部浜足	〃 4. 8. 5	赤痢		3	〃	565
椋椅部赤人	〃 4. 8. 5	〃		2	〃	565
長江田 越麻呂	〃 4. 8. 2	足病(痺痛)		10	〃	566
紀山守	〃 4. 7.12	病		4	〃	570
中臣丸公成	宝亀 2. 4.14	嗽病		5	〃	572
漢部沙弥麻呂	〃 2. 4. 5	病		5	〃	575
大友路万呂	〃 2.壬3.23	内股瘡	蛭食治	5	〃	577-578
氏名欠	〃 2.壬3.21	胸病		3	〃	578
氏部小勝	〃 2. 5.27	赤痢		7	〃	581
坂上浄道	〃 2. 6. 6	〃		4	〃	581-582
馬子真浄	〃 2. 6.27	下痢			〃	583

氏名欠	宝亀	2. 6.26	赤痢			十七 583
三嶋子公	〃	2. 6.22	下痢		3	〃 585
秦忍立	〃	2. 3.13	胸病		3	〃 585-586
占部忍男	〃	2カ	頭悪瘡		3	〃 587
氏名欠	〃	2.壬3.10	頭病			〃 587
〃	〃	2.壬3. 8	腹病	服薬		〃 587
桑内真公	〃	2.壬3. 7	頭腹痛		3	〃 588
中臣丸公成	〃	2.壬3. 5	頭痛		3	〃 589-590
氏名欠	〃	2.壬3. 3	瘡病	洗治		〃 590-591
岡大津	〃	2.壬3. 1	衰弱		5	〃 591-592
秦広人	〃	2. 3.20	足病	服薬	5	〃 594
坂本東人	〃	2. 2.20	〃		5	〃 602
秦広人	〃	1.12. 3	痛		2	〃 605
岡大津	〃	1.11.25	赤痢		3	〃 606-607
不破真助	〃	2. 8. 7	〃		2	十八 464
丸公成	〃	2. 8. 5	〃		4	〃 465
安宿広成	〃	2. 4.25	病		5	〃 467
沙弥慈緒	〃	2. 4.20	胸病		3	〃 467-468
石川宮衣	〃	2. 4.21	腹病	服薬	(4.17)	〃 468
中室首浄人	〃	2. 4.14	〃		5	〃 470
桑内真公	〃	2. 4.16	咳咽病・胸病	服薬	3	〃 470
安宿広成	〃	2. 5.28	赤痢			〃 547-548
大宅童子	〃	2. 8. 2	衰弱		3	十九 37-38
音太部野上	〃	3.11.14	足病		5	廿 51
楊侯穂足	〃	3.10.21	〃		4	〃 51
中室浄人	〃	3. 9. 5	〃		5	〃 52
三嶋子公	〃	3. 9. 3	〃		3	〃 52
秦正月麻呂	〃	3. 9. 4	赤痢		3	〃 53

池田建足	宝亀	3. 8.27	足病		3	廿 53-54
大坂広川	〃	3. 8.23	〃		4	〃 54
敢男足	〃	3. 8.22	赤痢		3	〃 55
田部国守	〃	3. 8.20	足病	服薬	5	〃 55-56
美努石成	〃	3. 8.13	腹病		(8.8)	〃 57
〃	〃	3. 8. 8	〃		4	〃 58
三嶋子公	〃	3. 8. 6	足病・気上		3	〃 59
氏名欠	〃	3. 5. 3	腹病		5	〃 60-61
秦麻呂	〃	3. 5.12	病			〃 61
田部国守	〃	3カ	霍乱		1〜2	〃 61
陽侯穂足	〃	3カ	衰弱		60	〃 61-62
後家川麻呂	〃	2カ・9.18	下痢			〃 62
淡海金弓	〃	?	病			〃 63
念林宅成	〃	3. 6.10	疫痢		2	〃 75
韓国形見	〃	4カ	胸心病	服薬		廿二 191-192
秦小公	〃	5. 8.15	病		(7.26)	〃 589-590
辛由首	天平	3. 9.25	眼精迷蒙			廿四 13
道守広万呂	天平勝宝	7. 4.21	瘡病		5	廿五 160

の多発は彼らの仕事と無関係ではないようである。写経生らの言うところによれば（写経司解案、廿四117〜118）

一、請経師等薬分酒事

右、案机常居、胸痛脚痺、請以三箇日一度給度酒者、

一、経師等毎日麦給事

右、承前毎日麦給、就中断之、請依前毎日給之、

と、仕事からくる胸痛脚痺を訴え、三日に一度の薬分酒支給を求めているのであるが、麦支給も同じ理由からと思われる。足病を理由に「薬分之大豆」を請うもの（僧衛光）もいたが、足病に麦・大豆が効くことを経験的に知っていたのであろう。それはともかく、長期間の坐業は諸々の疾病を生んだが、特に足病、胸病

（気分不快。結核性疾患も考えられる）を、また運動不足といったところから痢病、過度の仕事と栄養不良からくる衰弱など、これらは写経生のいわば「職業病」といってよいものである。

彼らの生活は一般の官人であれば午前中の勤務のみであったのに対し、午前と午後にわたる場合が多く、多忙のときは夜間も勤務を強いられたのである。通常においては昼間は経堂で勤務し、夜間は息所に宿泊し、用事又は仕事が一段落ついたときには請暇解を出して私宅に帰ることもあった。書写の際は畳と蓆を敷いて行なっていたらしく（十一463）、宿所は板敷で、湯屋もあった（十四412）。しかし、食事内容は満足できるものではなかったようで、先の天平十一ヵ年の写経司解案には

一、装潢并校生食麁悪事

右、此者以黒飯給、請改給中品精食、

と、黒米に代えて精米（白米）を求めている。天平宝字六年の「造石山寺所食物用帳」（五9～18）にて問題の白米と黒米の割合を二月分についてのみ統計をとってみると、白米対黒米は1：12となる。しかし天平宝字五年の「奉写一切経所解牒案等帳」（十五15）の二月分についてみると、その比は8：1で白米の支給率の方が多くなっている。時所により黒白米支給割合は異なるが、副食等含めて全般的な食事内容は、疾病発生率等の事情から考えてあまり良くはなかったとみてよい。

その疾病発生率であるが、勿論正確なものを知ることはできないが、試算してみると次のような結果となった。

① 0.6％「奉写一切経所解牒案等帳」天平宝字五年（十五4）

② 2％「奉写一切経所食口帳」神護景雲四年（十七329～486）

前章にて写経生の疾病はいわば「職業病」であると述べた。更に、その性格を付言すれば病名に具体性があることだ。物語文学や説話集をみるならば、物気、邪気（魑魅罔両）と呼ばれた、いわば「霊的」病が主流を占めているのと対照的である。現実生活への密着度の相異がその一因をなしているものと考えられる。

表Ⅰにて治療法が示されているのはわずか（13）であるが、その特徴は瘡病を除くほとんどの場合服薬としていることである。官史においては僧による仏咒をもって治療にあたる例が多く見られるのに、経堂に居住する写経生においてそれがみられないことは皮肉なこととといえよう。股瘡治療の「蛭食治」（大友路万呂）は『医心方』の治癰疽未膿方第二に「今案経心方云以水蛭食去悪血」とみえる療法[2]である。足腰病の「治焼」（壬生広主）は灸治ことであろう。医師による診療はわずかに一例（桑内真公）しかみられないが、多くの治療の背後に医師がいることは充分うかがえる。請薬例も多く、

謹啓　黄良高必欲得、七気丸、干薑丸、

右薬、今可用、仍注状（十八208）

謹啓　申薬事

右件万病膏心仲膏（廿五268）

などの方剤を求める場合もあるが、多くは薬酒である。

表Ⅱは写経所の薬作料を示したもので、下充された米や銭で薬酒等を購ったのである。薬酒は粉酒が多く、単価（升）は5文（四450）から14文（五365）と変動はあるが、大体10文が相場である。ちなみに古酒は6文（五65）、浄酒は17文（十六20）である。しかし薬酒の充足度については疑問が残る。宝亀四年のものと思われる「校生韓国形見啓案」（廿二191～192）によると、

自常別校生等人々胸心病疲未除、然此専別当尊宣云、薬分毎二箇日間充、吐已訖、然猶未見実領者之、雨待事豈薬分不異（下略）

表Ⅱ. 薬作料

年月日	表題	給付月日	薬作料	薬分量	出典
天平宝字 6. 1.14	造石山寺所食物用帳	?.19	白米 8升		五 5～23
		?.22	〃 2斗		〃
〃 2. 6.21	写千巻経所銭并衣紙等下充帳	8. 1	銭 400文	4斗	十三 268～283
		. 6	〃 400文	4斗	〃
		. 8	〃 400文	4斗	〃
		. 9	〃 310文	3斗1升	〃
		.10	〃 400文	4斗	〃
		.15	〃 400文	4斗	〃
		.18	〃 400文	4斗	〃
		.20	〃 400文	4斗	〃
		.25	〃 500文	5斗8升	〃
		.27	〃 550文	5斗55升	〃
		.30	〃 400文	4斗	〃
〃 2. 6.30	東大寺写経所食口帳	7月分	〃 400文	4斗7升	十三 344～348
		8月分	〃 4960文	5石 4升	〃
〃 2. 7. 5	千手千眼并新羅索薬師経料銭衣紙等下充帳	7.14	〃 400文	4斗7升	十三 370
〃 2. 9. 1	請後金剛般若経料用度帳		米2石		十四 17
〃 2. 9.18	後金剛般若経経師等食料下充帳		米 9斗5升		十四 99
〃 2.10.15	経所雑物見注文		銭 122文		十四 198
〃 4. 4.26	奉作阿弥陀仏像并写経用度文案		〃 830文	8斗9升	十四 339
〃 6. 8.12	経所食物下帳	10.25	白米1石		十五 489～494
		11.14	米 1石5升		〃

とみえ、校生等人々が胸心病のために薬分を要求し、支給の確約をもらったのに一向にその実現をみていないと訴えており、また前の「写経司解案」にみえた胸足病のため三日に一度の薬酒支給を請求した経師等の訴えに耳を傾けるとき、充分ではなかったと思わざるを得ない。

さて、本章の終りに写経生の医学知識といった面について少しふれてみたい。治療に医師が関与していたことは前にふれたが、写経書目録をみる限り相当の知識を少なくとも一部の者はもっていたと思われる。写経所では経典以外に外典の写書も行なわれており、その中には『新修本草』『薬方』『治癰疽方』『黄帝針経』（三89～90）『本草』（廿四378）『医方』（廿五25）と医書がみえ、仏典中にも『治禅病秘要経』、『仏治身軽』、『比丘疾病経』、『療痔病経』、『救護身命済人疾病苦厄経』、『仏医経』等の仏医関係経の写経がみえるからである。いずれも小乗経典であるが、『仏医経』によってその説くところをみると、人身中には本来四病（地水火風）があり、これから四百四病が生ずるとし、その病を得るのは久坐不飯・憂愁、忍大便等の十因縁によるもので、長寿を得るためには貪食せず、利を得ても喜ばず、利を得ずしても憂えず、自用に供することなく、布施を行なうことであるという。[3] 一般に精神衛生的な面が強いが、偽経の場合、中国古代医学の影響を受けたものもあり、写経を繰り返すうちに自づと医学知識をもつようになっても不思議はない。

第三章　写経生の生活

写経所は初期には写経所専任の職員を設置することなく、専ら他の官司の下級官人、遊休官人を動員させ、のち写経事業が繁忙になると民間から写経所勤務を希望する者（白丁・里人）を貢進させて運営したのである。この写経所は令外の官であるが、他の官司から出向勤務しても兼官とはならず特殊な官司なのであった。[4] 井上氏によれば、写経所に勤務することによって得る特典は、第一に布施を与えられること、第二に慶事に際して位階が昇進すること、第三に写経を監督した者の場合は監督したことが官人としての考中行事にかぞえられることであり、里人の場合は、第一に布施をうけ生活の

便をうること、第二に位階を与えられ律令制官人機構に加わること、第三に特権階級の一部をなす僧侶となることであった。[5] 里人の貢進採用を願う者の中には、写経所での精進生活をおくりたいという信仰面から望むもの（五332）もいたことを付け加えておく。

経師らの報酬は布施と呼ばれているが、支給基準は仕事量にあり、経師は麁経論で40張布一端、注経で30張布一端、校生は二校紙で500張布一端、装潢は400張布一端、題師は100巻布一端の割合となっており、これらは下級官人の収入にかなりの増加をもたらしたものであろうという。[6] 経師らの多くは先に述べたように、多くは他の官司の史生・舎人として官人組織に属しているから、出向先の写経所での出勤日数（上日数）が半年で120日以上（内長上官の場合）であれば、季禄（年二回、二月と八月）を受けることができ、更に年間240日以上の上日を四年続け、勤務態度がよければ位階昇進の道が開けていたのである。勤務評価（考）を受けるには2/3以上の上日数が必要とされたが、休暇の規定についてはどのようになっていたのであろうか。仮寧令によれば

在京諸司、毎六日並給休暇一日

とあり、[7] 月五日の休暇が認められていたことになり、年間60日に達する。従って大雑把にみて残りの60日がいわば有給休暇となる。請暇にあたっては、同令に

五衛府五位以上給三日、京官三位以上給五日、五位以上給十日、以外及欲出畿外奏聞、其非応奏、及六位以下、皆本司判給、応須奏者、並官申聞

とあって、文武官の五位以上の場合は規定日以上の請暇及び畿外へ出る場合には奏聞しなければならず、六位以下の場合は本司（文官は式部省武官は兵部省）にて処理することになっていた。そこで経師ら六位以下の下級官人の場合、三・五・十日間といった日限を考慮する必要は全くなかったと考えられそうだが、しかし実際はそうではなかったようである。表Ⅲは表Ⅰの請暇日数を基に作成したものであるが、表をみてわかるように、三・五・十日に請暇日数が集中しており、更

に表Ⅰを個別にながめてみると、請暇日数以上に実際においては休んでいる者がおり、追加請暇をする場合でも五日間としている。このことは六位以下の下級官人においても、三・五・十日が休暇を申請する際の目安となっており、何らかの制限が請暇段階毎に加えられていたのではなかったかと思われるのである。また、自已の疾病による請暇においては別に規定があり、選叙令によると

職事官、患経百廿日（中略）解官。（中略）其以才伎長上諸司者（中略）患損之日、還令上本司、

疾病のため120日欠勤した場合、解官させられるが、有能な技術官や人物の場合は全快後の復職が可能であった。(8) また、『集解』（巻十七）によれば

若其所患既在残疾以上、不可更出仕、量状解官、不待百廿日也

とあって、疾病が残疾（一目盲、両耳聾、手足指欠、久漏等）以上であり、更に出仕不可能な場合は120日を待たずして解官させるとあり、また、

古記云、患経百廿日、謂毎月仮日併計満数也

と、その120日の中には定休である六仮の日数も含めるとしている。

写経所に勤める者が罹病した場合、多くは宿所にて療養していたようである。その際、給食が減らされていたことが「奉写一切経所食口帳」（十七329～486）にみえる。それによると、平常時には平均ではあるが、僧が米二升四合、経師、

表Ⅲ．請暇日数

講暇日数	件数	割合(%)
1 2 3	1 7 23 } 31	45.6
4 5	9 20 } 29	42.6
6 7 8 9 10	0 2 0 0 5 } 7	10.3
60	1	1.5
計	68	100

表Ⅳ. 賑給料

年月日	表題	受給人	給付名目	数量	出典	備考
天平宝字 6. 7.27	造石山院所銭用帳	他田 小豊	(病臥) 頓給料	銭 40文	五355-374	木工
宝亀 3. 2.27	奉写一切経所賑給帳	氏部 小勝	賑給料	白米 2石	六278-281	装潢
2.30		長谷部寛万呂	〃	米 1斗	〃	
3.19		水取家万呂	(病者)粥料	白米 2升	〃	
3.23		〃	〃	〃 2升	〃	
4. 5		赤染玉宮女	賑給料	〃 2斗	〃	優婆夷
7. 7		大伴 真公	〃	〃 2斗	〃	装潢
7.20		占部 忍男	〃	米 2斗	〃	経師
〃 3. 9.8	経師賑給注文	若倭部益国	(病)賑給料	銭 100文	六396-397	〃
		秦 度守	〃	〃 100文	〃	〃
神護景雲 4. 9.29	奉写一切経所告朔解	氏名欠(1人分)	賑給料	米 3斗	六 90-91	優婆夷
宝亀2. 5.29	〃	〃 (〃)	〃	〃 5斗	六180	〃
		〃 (〃)	〃	〃 1斗	〃	廝女
〃 3.12.30	〃	〃 (多数)	〃	〃 2石2斗	六455	経師他
天平宝字 6. 4. 9	造石山寺所下銭帳	〃 (4人分)		銭 10文	十五458	仕丁(病)
〃 6. 6.16	造石山寺所食物用帳	津守田主女	賑給料	玄米 5升	十五416	優婆夷
神護景雲 4. 9.29	奉写一切経用度文案	氏名欠	〃	米 3斗	十八 6	〃
宝亀3. 7.9	奉写一切経所賑給帳	辛国形見	〃	白米 2斗	廿 75-77	校生
3カ 9.13		大友路万呂	薬料	小豆 2升	〃	経師
3カ 9.19		〃	賑給料	白米 1斗	〃	〃
〃3カ	(賑給帳断簡)	氏名欠	〃	米 1斗	廿 77	優婆夷
〃 3. 8.11	奉写一切経所解案	〃 (多数)	〃	米1石3斗4升	廿224	経師他

装潢が各二升、自進、仕丁が一升二合支給されていたのであるが、罹病中は、僧が四合、[9] その他の者は八合である。平常時と罹病時の支給割合は、僧が1/6、経師・装潢が2/5、自進・仕丁が2/3となる。賦役令によれば、丁匠が罹病した場合半食を減じ、一日分の役料を支給することになっていた。[10] 支給率は1/2である。要するに、罹病時における給食は累進的減食というべき形であり、平常時の身分差による支給とは異なって、ほとんど一律八合支給という身分的相違がみられない状態である。この八合という量は写経所雑使の平常時支給量と同量であり、生活のための最低保障量というべきものであろう。

病者、困窮度の著しい者に対して、時には官司による賑給がなされた。（表Ⅳ参照）写経生の生活を年次的に追ってゆくとき、宝亀年以降において月借銭の増加がみられる。長期の疾病は収入を止絶えさせるばかりでなく、薬科の支出はますます生活を苦しいものにさせる。賑給量は余りにも微少、その場的なものであった。

おわりに

写経生の疾病は、その勤務生活を詳細にながめてゆくとき、それはいわば職業病であった。多くは生活の便を得るため、また官僚としての昇進をのぞむために、長期にわたって特殊勤務に従事したのである。罹患したとき、不充分ながらも医薬の給付、医師による治療をうけることができた。そこには古代一般の医療にみられる呪的な医療の姿は全く見出すことはできなかった。

なお、本論は紙数の制限から説明を簡略にし、意を充分に尽くすことができなかった。後日、機会があれば別の主題の下にて補足したいと思っている。

注

（1）請暇日数の項で、3＋5とあるのは、3日間の請暇の後、5日間の追加請暇をしたことを、また10＋?とあるのは、追加請

暇日数が不明であることを、また（9・24）とあるのは、請暇日数は不明だが9月24日以来病気であったことを文中より知れることを、それぞれ意味する。なお、出典の四338は大日本古文書巻四頁338を示す。

（2）「医心方」巻第十五、日本古典全集四、

（3）大正新修大蔵経、第十七巻、No. 七九三

（4）井上薫「奈良朝仏教史の研究」頁三八八―三九〇

（5）右同　頁三九三―四、頁四〇九

（6）右同　頁四六一

（7）「令義解」巻九

（8）右同　巻四

（9）「病」の記載はないが、他例からして病時と判断した。

（10）「令義解」巻三

Shakyosei and their Diseases

Taku Shinmura

In this paper I have traced the lives and medical histories of lower ranked officers during the Nara period, examining the notices of absence from the Shakyosei ···the officers reproducing the Buddhist scriptures···, which have been kept in the Shosoin. According to them they mostly suffered from lumbago which was caused by sitting for a long periods of time, the so-called, occupational diseases. That is, they had to work long hours in order to receive promotions, otherwise they were unable to make an adequate living. When they fell ill, they could ask for medicines and could call on doctors in the office. But the medical treatment and medication were usually insufficient.

The medical histories indicate further that these officers did not receive any supernatural treatments, which have been thought to be prevalent at the time.

資料一

前野良沢・同　良庵・高山彦九郎書簡

千々和　実校注

一　前野良庵宛高山彦九郎書簡

一筆致啓上候、先以御両親様方御始御揃、御安泰に可被成御座と奉祝候。下拙義も道中快く巡覧仕候。乍憚貴意安ク思召可被下候。先月奥州福島ゟ差上候書相達候哉、其後は可然便も無之一書も不差上罷過候。福島ゟ羽の米沢へ罷越候得ば、興譲学館書生饗応毎日の珍味、彼ノ烝物に時日を移し、湯殿山、月山、鳥海山等へ登り、象潟の景を打望み、秋田ゟ津軽弘前城下へ罷出、今日青森と申所に止宿仕候。只今善知鳥宗像大明神へ参詣仕り、安方町徘徊仕、海上ヲ望候得ば、兎角北方ノ志不相止候。若し渡海仕候ハハ来年迄は滞留と可被思召候。渡海難儀ニも見え申候得者、三馬屋ゟ重而ヲ約シ帰府可仕候。必ス危キ事は不仕候。拙者こ（と脱か？）御両親様御安意の様被仰上可被下候。烝中の事も毎度御教示存シ出候。是亦尊大人様へ克ゝ被仰（カ？）通可下候。昼の旅行中は酒も用イ申候得共、夜中は酔候程は用イ不申候。御禁戒と相守申候。御出会之節は諸友へ可然様奉希候。猶重便緩々可申上候。　以上

（寛政二年）
八月廿八日

高山彦九郎正之（花印）

前野良庵様

尚ゝ寒冷相募候得者、御自愛御安健ニ可被成御座候。御両親様方御安意被下候様、宜ク被仰上可被下候。長蔵始族類等へも同事ニ御座候。　以上

（付）蝦夷風土考

十里（タビ中ノ潮シラカミ）東風ヲ順風トス、鯡、春分ヨリ十日程過テ二十日斗リ□□□四月下旬迄ニ払フ、昆布、箱館ノ外海蝦夷地迄四五十里ノ間、庭訓ニ宇賀昆布是也。五月ノ業也。六月下旬迄ニ多ク、七月休、八九月迄ニ来湯ノ営ヲス、八月冷気甚ク、九月ニ飛雪粉ゝ、余月ノ寒中ノ如トシ、四月中旬ヨリ梅桜ホコロビ、五月ニ及ンデ諸花開ク、土用中ニモ他国ノ者ニハ袷単物ニテ相応也。七月下旬ニ及ビ一際暑気ヲ覚ル事有ト云ヘドモ、終日ノ暑気□アラス、丁午ヨリ暑気夕陽ノ頃ハ冷気来テ綿入ヲモ着ル、江戸ニ比スル（ニ脱カ？）春秋冬三季ノ国ト云フベシ。

○蝦夷地西ノ方ソウママテ松前ヨリ三百六里、東ハキイタツフマテ四百里、船人共云ニソウマ、二百七八十里、キイタツフマ（テ脱カ？）三百里斗。

（付）

一欧邏巴ノ地方ニ魯斉亜と申所在之候。此方ノ室町ノ末ニあたり、右之地ニ英主出来。此方ノ永正十年に帝位ニつき、次第ニ諸大国ヲ征伐服従いたし、万里地方を蚕食し、宝永、元禄ノ頃までに三四主を歴候て、当時ニいたり、中国之西北方塞外ノ地悉く其有になり、清朝北京とも使幣を通し候事の由、中国の書ニハ曽而ミえ不申候へ共、成程大清会典ノ図ニて見候へハ、塞外の西北方悉ク蛮名ノ地名ニなり申候ハ此故と被存申候。彼ノ白石ノ被申候（魯斉亜ハ）西鞭靼ニて夥しきものニ成候よし記され候ハ此事ときこえ候。元ノ末と被申候ハ伝聞ノ誤とミえ候。右之魯斉亜本国ハ紅夷ノ隣近地ときこえ候。白石ノ申され候紅夷支那一遍ノ地つづき（と）申されし事、それてきこえ申候。さて右之中国塞外ノ西北方と北方蝦夷ノ地も相向ひ候事ニ候よし、其間ニ数百ノ島嶼相接続し、一〻名も在之申候。蝦夷ノ地近きハこれを松前へ羈縻し而在之申候。安永ノ末年までに右島嶼とも悉く魯斉亜へとり附き、城畳を構へ収守を置候而ハ曽而松前より手さし成り申さず候事由、残リ申候所ハ蝦夷地斗の由ニて候。彼ノ蠟虎ノ産シ候嶋嶼ハ、蝦夷より三百里斗隔候所之由、これもはや彼ノ属と相成候よし、此方へも交幣を通申度由申候も、彼ノ漂流ノ日本人数百人居候所、殊之外よく接待候而、返し不申候由承リ申候。扨て始終北辺ノ患ニ可相成事御聞被成候由、先達而田沼松平殿の諸人在役の者、蝦夷へ人を遣し候事在之、右の事共迄とありける。手翰の奥ニ歌ありゑそ千島ろしやをかけて行旅も

鄰の国と思ゑ（は）さりける　　正之

又阿蘭人日本七絶と称するよし

皇統不変、小国にして大国へ臣服せす、刀劔漆紙米也、何事も旅中申残候、早々

（註）矢島憲三郎氏蔵。高山彦九郎全集第三巻北向日記寛政二年八月二十八日条参照。蝦夷風土考と鷗邏邑云々の二章ははたして本状に付属するものなるや否や不明なれば、矢島行康氏高山錦嚢の巻物中に連続張り付けたるを見れば或は然らんか。よってここに併せ掲ぐ。

二　前野良沢、良庵宛　高山彦九郎書簡

段〻秋冷相募り候得は、益御安健と奉視候。下拙義も無難ニ九州遊行仕候。御安意奉希候。当年中ニ帰府心懸候得共、彼是所々滞留中ニ当年帰府は不存寄奉存候。三月始より六月始迄薩州ニ遊ヒ白向ゑ豊後。（を経カ?）、近頃肥後再遊、不知火抔見物仕、明日熊本城下罷有（立カ?）、豊後竹田之方へ趣候。堅固旅行致候趣知己方へ御出会之節ハ何レモ無残所、宜ク御伝達可被下候。下拙義も何卒当秋迄ニは帰府と心懸居候得共、彼是不任心底、延引ニ及候、四国一見之後は急キ帰府心懸罷在候。何事も申残候。頓首

高山彦九郎（花押）

（寛政四年）
八月十九日
前野良沢様
同　良庵様

尚々寒冷御浚御安健ニ可被成御座候、御母公様ニも御安意之様宜ク御伝へ可被下候。御両親は梅花之下ニ而歌よみ候事早や三四年ヲ経候事と奉存候得は、江戸表羔敷事ニ奉存候。旅中大飲之御戒め独行之節は謹ミ罷在候。御安意可被下候。入魂多き処ニ而は御免可被下候。

盃をとるたびごとに覚ほゆる君かおしへの言の葉よきを

（註）彰考館蔵。高山遺書に影写本を収む。
筑紫日記寛政四年八月十九日条参照

三　前野良庵より高山彦九郎宛書簡

（一）

尚〻佐藤翁も去年十月中可被尋申候而、一夜逗留被致候。病気も□□相替事も無御座候。心者不相替元気ニ而御座候。已上

新春之御慶千里同風申納候。弥御安健御旅行被成、珍重ニ奉存候。去年中下総国八日市場并奥州福嶋宿両度の御状相達、又〻奥州白河方之御状是又相達申候。下野より之御状は未タ相達不申候。毎度両親共へ御注意被下辱奉存候。佐貫石津生よりも其後書状到来、宜申上度旨御座候。飯持氏去秋去冬両度御出、奥州福嶋よりの御状迄掛御目申候。御国元皆々様随分御平安之由御座候。極月十七日京都方之御状は廿八日ニ相達、剣持氏へ之御状廿九日嶌屋迄遣置候事御座候。奥州黒沢秀公方未タ何之沙汰も無御座候。林子平一件、早速森嶋氏へ相通し候処、書状往来之間違ニて何之心頭ニ被掛事も無之候由、又〻書状も可差出との事ニ御座候。藤塚小島之まる屋三封早速相届候。霜月卅日之御京着ニ而は七日、還幸之御儀式は御拝見不被成候事と奉存候。乍然其後段〻之御儀例等御見聞被成候由（カ）候、扨〻御羨敷奉存候。御足痛此節御快方に御座候哉、如何御案事申候事御座候。当地地震之事被仰下、霜月廿七夜地震入候得共、格別大地震と申ニは無御座候。乍去六七年前七月中の地震とは強キか弱キカと申位ニ而御座候。吹上ニ而公事訴訟被為聞候事実ニ御座候。徳庵之御故事と申事に御座候。是も只一度之御事御座候。一、去霜月良沢義隠居願差出候処、同月十一日良沢隠居私□願の通被申付候。此段も乍序為御知申上候。良沢随分無異罷在候。隠居致格別気分も寛に相成候故歟、例年よりは寒気にも凌能覚候事御座候。扨々御遊行御羨敷毎度御噂而已申居候。御帰府後珍事共承候事と又七（藥又七）、寛介抔毎〻咄出候。桜之比迄之御逗留ニ御座候へは定而吉野へ御出と奉存候。此間も萬六見へ多（谷伴兄）（林多宗直）一郎咄申出候事御座候。御上京之節之御歌御紀被下拝見仕候。定而此節も日〻之御咏草、京都日記嘸〻大冊ニ相成候事と奉存候。何も又〻後便可申上候。両親共宜敷申上候様申付候。已上

（寛政三年）
正月十五日　　前野良庵
高山彦九郎様　　達（花押）

尚々去年中蓮沼氏方之御届申候、三上翁未タ御尋不被成候由、

是は大坂ニ僑居と申事被申候。呉々も此節京都御遊行可羨可羨、此節も

白菅のすげの真すげの笠もよし旅なつかしき野辺の春日を

近来の咏草懸御目申候。御一覧可被下候。萬〻後便と申残し候。

（註）錦嚢。京都日記寛政三年二月二十三日条参照。前野良庵、名は達、良沢の子。

（二）

再白、先達而中より拙書相認メ置候処、彼是取紛、遅延之中貴書到来、早速御返書相認候条、委曲は前書ニ相認候条、早々御返書迄御座候。両親共宜申上候申付之候。

如命、新春御慶申納候。弥御清勝被成御座、珍重奉存候。此地敏秋共随分康罷在候、御安意可被下候。九州行思召立之由、御叮嚀被仰下委細領命候。爾来御足痛之事無御座候ハヽ、御尤之御事と存候事御座候。只〻千里独行、頻ニ御羨敷奉存候斗ニ御座候。　以上

右、貴答迄早々如期御座候。猶期永春之時候。恐惶謹言。

（寛政三年）

二月九日　　達

高山彦九郎様

（註）矢島憲三郎氏蔵

四　前野良沢より高山彦九郎宛の書翰

去月二十八日之貴簡当月七日相達拝見仕候。如貴諭新春の吉慶御同意目出度申納候。先以余寒甚御座候得共、弥御壮健ニ被成御座奉恭喜候。次ニ私儀も去霜月中致仕、賤息受業首尾能相勤、挙家無異罷在候。乍憚御安慮被下度奉存候。賤息其己後早速表勤被申付、三番或は隔日ニ宿直仕、殊ニ御存知之通、私久〻引籠罷在候故、勤向沿革仕候事共にて当分甚多免（角脱カ）ニ罷在候。京都御着後は早速書通可申上筈之処、右取紛候中築方ニハ種〻混雑之事有之、傍御返書モ延引罷成候。築も役向は不相替相勤候。今度ハ定而貴答委細可申上与奉存候。劔持氏も去霜月下旬御出府得貴意候。何方ニも御別条無御座候由ニ御座候。私致仕已来別而世外の人、彼仙窟（仙当浅学にのミ）修養仕、大安楽之身と罷成候。此段御歓可被下候。当春は岩倉様ニ御逗留被成候由、委細被仰出候、趣承知仕候。扨去年中は毎〻御酒御慎節等（カ）の旨被仰下、乍慮外甚安堵仕候。御脚痛ハ御全快ニ御座候哉、此度ハ何共不被仰□候。如何、折角〻〻御自愛被成御遊行御自在之様ニ奉祈候。

伏原ニ位殿ニ而御物語之御序、私御沙汰被成下候由、何か御尋被下候義も御座候ハバ実ニ本懐の至奉存候。御存被成候通瑣〻たる事共ニ御座候得共何事ニ不寄、被仰付次第他の事を差措、老力之及候分相勉可申候。此趣御心得被下、宜ク御取成被下候様ニ奉頼候。且賤業御賞美被候段被仰下、難有仕合ニ奉存候。

去年中天文暦数等種〻飜訳仕候儀共御座候。乍然皆々内〻故、

難申上候。但紀公子ゟ築城之書翻訳被仰付、追〻出来差出候。
当春も子細御座候而、差急キ候而、カムシカット、カムサッカとも之地図并風土、人物之飜訳、正月十三日迄ニ卒業仕候。
一、伊保勇之進トカ申人、上古文字を伝候御物語先達承及候。私儀八種字考之踐述草稿仕置候。是ハ皆異邦之事ニ御座候。何卒右之古字五十字音ヲ記シ置度奉存候。実否之処不分明ニ御座候共、一種之伝に御座候得バ、相成候ハハ御面倒ながら御詮鑿被下度奉頼候。去秋、魯西亜即ムスコヒヤ文字伝へ候而九種ニ相成候。
一、(伴兄)谷氏度〻被参候。医事薬物等相談仕候。当春も見へ候。箕浦三男、蘭学学ヒ度由彼国より文通仕候。
一、山路才助殿も天文方、改暦方被仰付、度々及相談候。此余萬諸期永春之時仍得貴意候。

恐惶謹言

(寛政三年)
二月七日

前野良沢
憲

高山彦九郎様
拝復

Jomis

附白
再三申上候魯西亜所領属国の略図、時々考索仕候。常春中ニハ成就可仕と存候。但彼是他事ニ妨られ候而遅延仕候。并其由来モ翻訳仕候志ニ御座候。

一、先達は御旅途より九月十日比帰リ被成候様被仰越候得共、霜月末に至りても其儀無御座候。其上青森迄御越の義故、定て蝦夷地へへも御志哉と察し、御噂申居候中へ、白河宿ゟの御状相達し候節

白川に宿れる君をえそしらて千島を
越ておもひ渡れり

又、去夏発足の日より、天気の晴陰を記し置、是は御帰後遠境之気候を校考可仕ため ニ御座候。今度京師御着の日より後を写し、差上可申存候得共、御存し通ため不任心底候。

君か如はる日陰に日記しをれハ
思ひをよせて過るひそなき

と存よりまま申上候。風雅之地ニ御遊ひ被成候方へ、如比ひなふり申上候義可恥事ニ御坐候得共、旧春仙窟梅花十詠の御友たりし御事に御座候間、やま人の口すさミと御笑可被下候。其己来かかる歌の輔たる人も無之、唯遠西のいといとひなびたる書見る事のみにて御座候。人間こなもらされそ、序なから申上候。彼最上(徳内)なるもの一旦あやしきものになり候処、黒心(異カ)なきこと明白なり候上、再彼ロシヤの人の居候嶋のあたり迄も参候て、委く見分可致身分と相成候。此人ハ先年佐藤(源六)とも同道にて参り候由、今般にてハ三度ニ御座候。定て物事相分り可申と存候。私へも何か相談仕度由、大槻(玄沢)迄申候処、間違面談不致候。急ニ参り候事故、あとゟ心付候義申越候様ニ申置候故、正月中旬存寄申遣し候。旧臘二十六日発足仕候、当年中にも帰り候哉、如何。中途ニも彼是障取候義有之候由、何れ一所存あるものゝ様ニ相

見え候よし、大槻も申之候。とても小細工のミニて大造作ハ天ニある事と被存候。何も何も仙窟之誤省略仕候。不備

（寛政三年）
二月九日

再白、九州江御志御坐候由、御身躰御壮健ニ御座候ハバ一段之節義と奉存候。随分御保養専一ニ奉存候。当春は例ゟ余寒退兼候、小園梅も未開候。旧春御詠共の事時々御噂仕候。荊婦へ御加筆被仰下恭奉存候。宜敷御礼申上度旨申之候。親類共へも御致意被仰下、対面之節可申聞と忝奉存候。清水万吉隣家の小女共も時々御噂申、はやう御帰り被成候へかしと申候。今日ハ客来も無之候故、縷々如此候。猶別紙鄙詠入貴覧候。御笑擲可被下候。頓首

（註）錦嚢。京都日記寛政三年二月二十三日条参照。

× × ×

以上の書簡の掲載に当り、千々和実氏の解読、註釈をいただき、所蔵者矢島憲三郎氏の御快諾をいただきましたこと感謝します。尚この掲載には作家吉村昭氏の理解ある援助と助言をいただきましたことをここに記し、感謝の意を表します。

編集委員記

抄録

マラッカ海峡地方における最初の麻酔

The First Anaesthetic in The Straits Settlements (Singapore, Pennang and Malacca 1847)

Y. K. Lee

British Journal of Anaesthesia 44: 408-411, 1972

著者は Singapore の Thomson Road General Hospital の麻酔科医である。本論文はマラッカ海峡地方における麻酔の創草期について述べたものである。一八四六年ボストンにおける W. T. G. Morton のエーテル麻酔の実験のニュースは太西洋廻りでこの地方に伝えられた。すなわち先ずエヂプト→紅海→ギンベイ→セイロン→マラッカ海峡のコースで約四〇日かかったと思われる。

最初のエーテル麻酔はマラッカの外科医 A. J. Ratton が上腕骨折の手術に対して一八四七年四月二八日に行なったもので、彼は "Singapore Free Press" に〝エーテル麻酔下に海峡地方で行なった最初の困難な手術例〟と題として発表した。

次いで同年七月三日ペナンの外科医 Smith によってエーテル麻酔が肋軟骨腫の切除に際して使用され、第三例目は同年八月二日シンガポールの医師 Robert Little が行なったもので、このケースは "Singapore Free Press" に報告されている。当時の麻酔はエーテルを浸み込ませたスポンヂからエーテルを吸入せしめる方法であった。

資料 二

虎岩武の履歴書・論説・詩文

土屋重朗

一、虎岩武について

虎岩武は明治九年十一月より浜松病院に奉職し附属医学教場で医学教育のかたわら、太田用成、柴田邵平らとともにハルツホルン著 A Conspectus of the medical science と Memoranda medica を翻訳して、七科約説と題して明治十一年五月上編を出版、十二年四月下編および上編訂正版を出版発行した。この書は当時の医学生の医師試験に最適の参考書として非常に好評であった。七科約説の訳文の大部分は虎岩武の手になるものといわれる。

今回虎岩武の孫にあたる虎岩頼夫氏の御好意により、武自筆の履歴書と有州舎主人慢遊詩録という武自筆の詩文、論説綴を借用することができたので、その一部をここに紹介したい。

なお虎岩武については下伊奈医業史（信濃名医伝）の筑摩県立飯田病院の項につぎのようにのべている。

『虎岩　武

太田用成と共に「七科約説」を著した虎岩武は、別に「美欄樹薬説」の著書もあり、太田用成と共に郷谷へ一時代を画して新医業を開拓した功績者であるが、更に用成が飯田を去った後は第一人者として活躍した。医師としても嶄新で殊に外科手術は当時の人々を驚かしたと云はれる。詩文に長じ殊に郷土史を究め燕山と号して沢山の記録を残している。当時の「伊奈公報」には毎号殆ど執筆し、医業方面では「衛生叢書」「森林衛生叢言」「学校近視眼に就いて」等々の論文を発表、郷土史は「温故談」を連載して郷土史の紹介に努力した。主税町の邸宅には美事な老松があり、当時の郡長平野草堂をはじめ高松陸舟・小室屈山、中島遂波、太田静所、原田西疇・吉原古城、藉涯修、日種不説、麦雲喜農等々の諸氏が漢詩を賦して讃美しているのを見ても想像出来る。けれども惜しい事には明治二十六年八月六日の飯田大火で類焼の厄に逢い邸宅と共に焼失した。（邸宅は同年十二月新築）（中略）

虎岩家の祖は知久家の重臣、虎岩玄番允頼貞でその孫頼勝は知久長朝伊豆木小笠原家へ輿入の際、伊豆木へ附添った医者である。それより七代目が武である。

明治二十一年下伊奈医師組合が結成され組長となり爾来連綿として継続、大日本医会下伊奈地方理事長等を勤め明治前半年に於ける本郡医業の重鎮であり功労者であった。

明治二十七年八月十四日三十八才で病歿、長久寺に葬り、法名を慈雲院丹道精煉居士と云ふ。』

右の文中後段の傍線の部分は誤りで、虎岩頼夫氏によると医者は知久家人、七代は十代が正しい。

二、履歴書

履　歴　書

長野県信濃国下伊奈郡
伊豆木村平民
虎　岩　武
安政四年一月一日生当廿五年二ケ月
一、明治四年八月ヨリ六年一月迄旧筑摩県公立飯田病院并ニ私立洋学校ニ於テ英学、仏学、医術修業
一、明治五年一月ヨリ九年十月迄在東京英国人シドニーウイルリヤム氏、協励学舎、司馬盈之氏粕川有信氏、山崎直亮氏等ニ随従医術修業、同年同月帰省
一、明治九年十一月静岡県公立浜松病院出仕兼医学教場四等教員拝命
一、同十年九月同教場三等教員拝命
一、同十一年一月静岡県遠江国一円医事会議開設ニ当リ票撰ニ由テ向フ一年間同会副議監ヲ勤ム
一、同年二月静岡県支庁管内開業医講習所成ルニ当リ講習長ヲ勤ム
一、同年三月内務省医術内外科開業免許ヲ受ク
一、同年五月同浜松病院当直医兼医学教師医学訓導拝命同五月依願解職
一、同年九月ヨリ十年(ママ)九月迄在愛知県雇教師澳国人ドクトルアルベルトフォン・ローレッツ氏ニ随ヒ医術修業
一、同年同月愛知県公立医学校編輯係拝命
一、同年十一月ヨリ十二年六月迄同校生徒一般病理学教授担当命セラル
一、明治十二年八月同校医学訓導拝命同年十月依願解職
一、同年同月静岡県第五県立浜松病院医学教頭拝命且ツ遠江国在所講習長ヲ勤ム
一、同十三年三月同病院薬局長兼務拝命
一、同年同月静岡県地方衛生会委員拝命
一、同年六月浜松病院薬局長専務拝命
一、同年七月静岡県医学教授委員命セラル
一、同年十一月依願解職
一、同年十二月静岡県警察医拝命静岡警察医務局出勤

履歴書は罫紙二枚に毛筆で書かれているが、ところどころ抹消や加筆のあとがあるので明らかに草稿である。罫紙二枚目末行まで記載しているし、また当廿五年二ケ月と記載があるので、さらに三枚目があってあと二年分位の履歴が記載されていたと思われるが三枚目は欠けている。この履歴書は明治十五年敦賀病院就職のためのものであろうと思われる。

履歴書には伊豆木村平民とあるが、系譜によると父頼啓は堀家家臣であったから、当然士族であるべきだが維新時帰農して平民を呼称したという。動機は不明。

履歴書中のシドニーウイルリヤム、協励学舎、粕川有信、山崎直亮などについては調査をこころみたが明らかでない。

「同年同月（十一年九月）愛知県公立医学校編輯係拝命」とあるが、これは「医事新報」の編輯係であろう。名古屋大学医学部九十年史四一頁に左の記載がある。

『医事新報の発行　同年（註明治十一年）七月から機関誌

を編集し「医事新報」と題して毎月一号づつ発行することとした。田野俊貞、後藤新平・石井学三の三名が編纂員と定められ、ローレッツの講義や病床治験あるいは海外の医事新説を抄訳編集したもので、管内医家も広く講読するよう県衛生係から各町村に通達が出されている。『

田野・後藤・石井らの編纂員の仲間に十月から虎岩武も加わったものと思われる。ただし九十年史には虎岩武の名前はどこにも見出せない。虎岩は後藤新平とは親交があり、後述の詩文などにも後藤との交友がうかがわれる。ローレッツについては九十年史にくわしく記載されている。

なお履歴書に記載以降の虎岩武の略歴を他の資料より綜合すると次のようである。

明治十四年　静岡県立掛川病院勤務
同　十五年　福井県立敦賀病院長
同　十七年一月頃　静岡県公立引佐病院長
同　十七年九月頃　同病院辞職、上京

東京での仕事の内容は不明。滞京年月も不明だが、二・三年以内であろう。それから飯田に帰ったが、飯田でのことは前述の「下伊奈医業史」にのべているとおりである。

三、論説

慢遊詩録につづってある論説、演説原稿類は公立引佐病院長時代かその直後のものだけである。左に三篇だけ転載する。

1（明治十七年、遠江私立衛生会の主唱者として町村民に呼びかけたもの）

無病息災長寿延命ハ富貴繁昌富国強兵ノ元素也。此元素ヲ養成シテ而シテ民権勃興スルニ足リ国憲大成スルニ足ケリカ矣。吾地球上強国旗ノ旗章ヲ飜シ慢ニ天下ヲ睥睨スル所以ノ者ハ英米仏独悉ク此元素ヲ養成シ能ク其庶民ヲシテ健全蕃殖ニ健全生活ヲ誘引シタル、功其一半ヲ占ムルト云フテ可也。嗚呼世ノ治者被治者此点ニ向テ針路ヲ錯ラザレバ文明ノ策期シテ可待也。今乎本邦海外萬国ト以テ兄弟タリ。以テ唇歯タリ。此秋ニ際シ彼能ク健全長寿ヲ保チ我ニシテ嬰弱短命也トセバ争カ彼我対等ノ実権ヲ掌握スベケンヤ。是則チ官野ノ紳士主トシテ衛生会ヲ開キ我同胞ヲシテ健康ニ安セシメント欲スル所以ナリ。然レドモ人種ニ別アリ土地ニ寒暖アリ啻ニ書上ノ論理ヲ以テ之ヲ実施シ得ベカラズ。見ラレヨ倫敦市街ノ風俗ハ紐育都会ノ習慣ト均一ナラザルヲ。又熱帯地方ト寒帯地方トハ飲食物ノ忌好ヨリ衣服家屋ニ至ル迄蓋シ其様同一般ナラザルナリ。如此固有天禀ノ賜ヲ以テ強テ人為ニ交替セシメント欲スルモ其害却テ民生ヲ碍クルナキ能ハズ。是吾等遠江私立衛生会ヲ創設シ此地方ノ衛生的関係ヲ調査シ避害就利ノ緒ヲ開カントスル所以ナリ。抑モ無病息災長寿延命ノ術ヲ実行センニハ各自ニ公衆ニ単複衛生的対抗ノ勉ヲ為シテ以テ其成功ヲ看ルヲ得ベシ。蓋此事難キニ以テ敢テ難キニ非ザルベシ。人類固ト死物ニ非ラズ活物也矣。活物ナルガ故ニ能ク外来ノ侵襲ニ応ズベキ眼耳鼻口皮膚ノ具ハリ智識発達ノ器関ニ至ル迄悉ク備ラザルハナシ。避害就利進ムモ退クモ得テ自在ナリ。況ヤ人類ハ萬物ノ長ニシテ霊妙不思議ノ精神ヲ有スルニ於テヲヤ。茲ニ洪水溢レテ将ニ民家ヲ

覆ントス。遽然相呼シテ衆共ニ之ヲ安然(ママ)ノ地ニ避ク。乃チ性命ニ危険迫レバナリ。復祝融天ヲ燋シ猛火駸々タリ。人誰カ之ヲ逃レザルモノアランヤ。乃チ性命ニ危険ヲ及セバナリ。如斯三尺ノ童子風癲白痴漢ト雖モ恐ラク之ヲ避ケ以テ其性命ヲ衛ルヲ知ル、然ラバ則チ衛生ハ天ノ性ナリ。豈此天性ヲ養ハズシテ可ナラン哉。然レドモ眼ニ視ルノ色相ナク耳ニ聞クノ音響ナク深浅ノ感触ヲ興ヘズシテ大ニ我無病息災長寿延命ノ楽土ヲ壊滅シ此天性ヲ傷ケントスル無数ノ公敵アリ知ラザルアルベカラズ。此敵兵ハ居恆衆庶ノ身体ヲ包橈シ能ク其隙ニ乗ゼントスルノ性質アリ。故ニ飲食物等ニ相伴テハ其体内ニ浸入シ八十年乃至百年モ保ツベキ生命ヲシテ或ハ幼ニ或ハ中年ニ之ヲ夭折セシム。此ノ様ヲシテ地獄ノ道案内ト謂フモ誣言ニ非ラザル也。此案内者ハ邦ノ文明野蛮ニ論ナク貴賤強弱長幼ニ限ラズ。須臾モ相離ルベカラザル密接ノ関係アリ。恐レテ惶レザル可ケンヤ。然リ而シテ此敵兵等ハ如何ニ我衆庶ノ同胞ヲ賊害シ如何ニ其兵力ヲ増シ富国ノ資タル吾生命ニ向テ猖獗ヲ極ムルヤ之レヲ之知得シ又相避クルト否ハ吾等智識発育ノ程度ノ昇降ニ之拠ル。進ンデ理化学等ヲ実用セバ如此敵軍ハ追討スル決シテ難ニアラザルベシ。之ニ反シテ智育降テ零点ニ留ラバ無病息災長寿ノ任ハ単ニ之ヲ神仏ニ依頼シ躬親ラ却テ此敵兵等ヲ招待シ知ラズ其兵ノ術中ニ陥ルノ愚ナシトセズ。豈警戒セザルヲ得ンヤ、是夫ノ提雲ノ空言ニアラズ。往昔羅馬ハ衛生ノ美法ニ其名アリシモ中古此法ヲ蔑視シ却テ生命ノ短縮ヲ来シ命数大概二十年乃至十八年ノ平均ヲ為セリト。我邦維新以後治世ノ変革ニ沿ヒ乱リニ官私ノ森林ヲ禿伐シ熱病等ノ流行ヲ促セシ類例一ニシテ足ラズ。当時之ヲ神仏ノ憤怒ニ帰シ喬木ノ崇リトシタルヤ諸君ノ記憶セラルヽ所ナリ。我近傍豊田磐田山名ノ三郡間歇熱流行ノ形跡ヲ見ラレヨ。明治十二年十二月係官ノ調査ニ拠レバ僅ニ山名一郡五千六百二十八戸人口二万五千零三十三人ニシテ患者ノ数一万三千九百八十三人ノ多キニ居リ之ガ為幾多ノ財産ヲ耗シ沃野変ジテ荒蕪ト為リ其惨状言フベカラズ。当時余モ地方衛生会委員タリシヲ以テ自ラ往テ其地方ヲ実践セシコトアリ。干今顧テ慄然タラザルハナシ。而シテ此原因ハ主トシテ森林乱伐ニ出ルヤ先輩ノ確言スル所ナリ。既ニ山林間接ニ於テ大ニ性命保護ニ要アル者ト感セバ何ゾ如此処置ヲ為シヤ。畢竟之ヲ知ルノ智識ナキニ之レヨル。今ヤ文運相進ミ理化学者モ朝野ニ列シ衛生ノ語都鄙ニ充ツ。此秋ニ乗ジテ健全ノ事業ヲ拡張セント欲シ先覚者ノ汲々乎トシテ勉ムルヤ誠ニ絶世ノ美ト謂フベシ。今ヲ去ル千三百年ノ頃支邦ノ昔疫病大ニ行ハル。時ノ先覚者長沙郡ノ大守張城字中景傷寒論ヲ著シ以テ疫病予防ノ助ケト為セリト。洋ノ東西ヲ問ハズ時ノ古今ヲ論セス衛生ヲ貴ブハ其揆一也。嗚呼今ニシテ無病息災長命ヲ保テ開化ヲ鞭達セバ東洋ノ一英国タランモ或ハ夫レ□(不明)ニ在ン乎。

大日本私立衛生会遠江私立衛生会

首唱者　　虎岩　武

2（気賀町養老会における祝辞）

明治十七年四月六日茲ニ引佐郡気賀市街ノ紳士ノ創意ニ係ル気賀上町第二会養老ノ宴ヲ開カル。不肖虎岩武又茲ニ寄留スルヲ以此美挙ヲ賛助シ薄カ賀意ヲ副ヘント欲シ此席末ヲ汚シ此盛筵ヲ設

スル也。凡ソ人ニシテ健康ト強壮ト長寿トハ最モ希望スヘキ針路ニシテ又慶賀スベキ状態也矣。健康トハ人生レテ恙無ク婚姻期ニ達スルヲ謂ヒ強壮トハ充分ニ子孫ヲ繁殖スルニ適スルヲ云ヒ長寿トハ産児ノ数愈々多ク婚姻ト死亡トノ間ニ経過スル時期ノ愈々長キ者ヲ謂也トハ欧米諸国ノ衛生的典籍ニ晾々□□□(不明)夫瞭ナリ。抑モ本日此賀筵ニ集合セラレタル来賓諸君ハ此健康強壮長寿ノ三者ヲ実践セラレタル所ノ諸君ニシテ諸君ノ為メニ賀シ又吾邦ノ為メニ祝サズンバアルベカラザル也。余顧フ二人ニシテ健全強剛長命ノ三者ヲ得ズ或ハ夭折或ハ難患痼疾ニ罹リ或ハ貧弱ニ陥リ斯美麗ナル世愉快ナル邦国ニ生レ却而苦痛ヲ感ジ憂々欝々タル者ハ勢止ムベカラザル不幸ニ衝着シタルニ拠ルト雖モ亦自ラ招ク所ノ殃ニ外ナラズ。之ヲ先天ニ例フレバ眼前ノ少利ニ逆ヒ幼稚ニシテ子孫ノ結婚ヲ施行シ又遺伝病等ヲ顧慮スルコト莫ク乱リニ資産容猊ニ着眼シ遂ニハ健児ヲ挙ゲ得ザルニ至ル。仮令幾倖二一児ヲ生ズルモ或ハ痼疾ヲ帯ビ或ハ不具ト為リ或ハ白痴漢ト為リ□(不明)ノ欲望頓ニ死滅スルノ例ハ世間往々見ル所ナリ。如斯シテ彼ノ健全長寿ヲ実践シ得ベキ乎。後天ニハ品行不正ヲ以テ世ノ法律ニ問ハレ其極端ニハ断頭場裏ノ鬼ト消ユ。又□(不明)窓ノ下ニ呻吟シ又ハ淫酒ニ耽リ傾家破産兄弟父母ニ疎セラレ遂ニ路傍ニ相斃ルル者無シト保セザルナリ。嗚呼如斯ハ其人ノ為メニ難シ将タ国ノ為メニ歎ゼズシテ可ナランヤ。本日来賓タル所ノ仙姿産顔タル志翁志婦ノ諸君ハ遠ク此範囲ヲ出テ能ク其健全ヲ保チ能ク其強壮ヲ逐ゲ能ク此長寿ヲ有シ加之腎才俶女ヲ挙ゲ国家ヲ益スル蓋シ尠ナカラザル也。実ニ人襄ノ美事ト謂フベシ。今乎百花爛慢ノ候ニ際シ特志ノ紳士此養老ノ盛筵ヲ張ル。決シテ偶然ニ非ラザルナリ。不肖武不文ヲ顧ミズ所感ヲ記シ而祝ス。天長地久億万維年、

明治十七年四月六日

公立引佐病院長　　虎岩　武

3　祝静岡県隆美協会雑誌第壱号領布

在東京会員　虎岩　武

大艦ノ纜ヲ解キ渺々タル大洋ニ航シ莫路ノ際能求其方向未失其期図者何哉。輙チ海容羅針盤ノ存スルアリ。至シテ疾ク此ガ進路ヲ示セバナリ。或ハ暴風怒濤大雨甲板ヲ衝キ進退谷窮ノ象変ヲ予知シ艦体ヲシテ能避其危者何哉。輙チ晴雨計ヲ利用スルニ拠ル者也。嗚呼大艦ノ進退保安ハ一台ノ羅針盤ト一柱ノ晴雨計ニ之拠ル。其徳豈不賛美而可哉。茲ニ静岡県隆美協会計画既ニ成リ其雑誌一号領布ノ挙アリ。実ニ可謂熾也。蓋此業ヤ雖於有志諸君之協力而ルモ当選役員諸君其人ヲ得サレバ焉ゾ能到斯挙哉。今乎県下三州同胞諸士者愈□(不明)反省而能此羅針盤（本会）ノ示ス所ニ則リ以テ就利ニ誤ルナク又能ク雖有些細之兇害（衛生教育勧業的）在此晴雨計（雑誌）。而能可得防其害ヲ未発也矣。識者曰制治ヲ未乱保邦未危。嗚呼綏県下同胞者夫在斯乎。謹而祝焉。

明治十七年七月壱日

四、詩　文

慢遊詩録に筆書の詩文は全部で六十一、うち十篇を転記する。

送湯浅氏之東京　（此時在越前）

多年呼弟又呼兄　況復相親枯兼栄
紅事消時君且去　何辺詩酒続前盟

送奥田喬治氏赴東京（此時在浜松）

遠笛暮砧占断秋　何慨別宴会高楼
常娥影裏人如玉　又逐美雲向帝別

送八田健一氏之東京（在静岡）

青雲紳士馬蹄軽　早抱賢戈向帝京
笑我当年就底事　芙容峯外聴君名

静岡病院当直之夜聴雨有感

自汲細流名未成　人間誰免想郷情
旅魂徒悩青燈下　雨搞芭蕉窓有声

於敦賀遇亡父之十三年忌

五月当年否入門　紫藤纔伍緑乾坤
天涯羈客家千里　一謖香雲招瞑魂

登浜松城趾之公園観月

眸見風光更可憐　踈砧厂語役詩篇
炊烟深処々家黒　月吐清輝影有権

与名古（屋）病院長後藤氏相共歩成馬城趾之外有感

秋光又満古城東　霜露空如吊故雄
村落晩晴何事好　折来路上一枝紅

壬午切夏自南越至若州途上口占

紅消白死花魂去　野色蒼々挙緑波
請見多年風雨後　扶桑文物又如何

辛巳歳暮　（在掛川）

東駆西走未定居　父逝母離音信踈
羈客多年心自病　郷園風色又何如

壬午初春赴任福井県々立敦賀病院長作之以示某氏等

汽笛有声鳴海陸　余眠早覚越山人
厖章電脚今非他　摹写欧洲天地新

〔参考文献〕
下伊奈業史（信濃名医伝）昭和二八年　甲陽書房
名古屋大学医学部九十年史　昭和三六年　名大医学部
静岡県の医史と医家伝、（土屋重朗著）昭和四八年　戸田書店

日本医史学会例会記事

二月例会　二月二十四日（土）

於慶応義塾大学医学部北里記念図書館第一会議室

一、欧州医学・看護史の旅　長門谷洋治

二、在日宣教医 Theobald Adrian Palm についてのイギリスにおける調査報告　蒲原　宏

両氏は、第23回国際医史学会に参加した機会にヨーロッパで調査されたことをスライドで供覧した。特にパルムについてはその子孫を見つけ出すまでの過程、そのために再度渡欧して得た新発見の資料の紹介など興味のつきぬ話題が提供された。

三、種子島の痘瘡について　河内　和夫　河内　一郎

本講演は原著として本誌に掲載した。

三月例会　三月二十四日（土）

於順天堂大学医学部九号館二階二番教室

一、横浜医学の百年　石原　明

二、江戸時代の史蹟、「道立橋」、「道三堀」について　矢数　道明

冨士川游博士の曲直瀬玄朔東井先生伝（中外医事新報三二八号）によると、慶長十三年、玄朔は江戸に招かれ、徳川秀忠の病を治し、殊効があったので、江戸城内に第邸を賜り、以後隔年交代で江戸に住むことになった。江戸の邸は常盤橋の内にあって、溝渠を距てて二ケ所あった。一は玄朔の邸で、一はその子玄鑑の邸宅である。秀忠は命じて両邸の間に橋を架せしめ、これに「道三橋」と命、その溝渠を道三堀と名づ、その河岸を「道三河岸」と呼ばしめたという。秀忠の殊遇の厚きことかくの如くであった。

その道三橋、道三河岸、道三堀と呼ばれた史跡は現在のどの辺に当るのであろかう、東京町名沿革史によると、「この道三堀は明治三十六年市区改正により埋填された」とあるので私は先ず江戸時代寛永以後の地図、明治初期の地図、明治末期の地図と、現代の地図等十数枚を捜し求め、これを重ね合わせて大体の見当がついた。その結果江戸時代、幕府最高位の医官として十二代、その名を謳われた今大路道三の名に因んで秀忠将軍が命名した道三橋や道三堀、道三河岸を現在の町名や場所と比較してみると大体次のようになる。

(1) 道三橋は、日本交通公社と新大手町ビルその間あたりから分れてあった。

(2) 道三邸は交通公社と新大手町ビルの線路沿いのあたりにあったと思われる。

(4) 道三堀は、呉服橋の右側一石橋より城に向って途中曲り大手町二丁目と、丸の内一丁目にかけて、和田倉門のところまで延びていた。

(4) 道三河岸は、大手町二丁目から丸の内一丁目、堀の左岸を名ずけたもので、右岸は邸宅の石垣であったらしい。

〔附記〕尚当日は明治十三年一月廿三日附「浅田宗伯の服部政世宛書簡」と「仙桃集」について紹介解説した。また「日本医事新報」や「漢方の臨床」誌では地図入りで詳報する予定である。

四月例会　四月二十八日（土）

於慶応大学北里記念図書館第一会議室

一、奈良朝の医書について　　中泉　行正

本講演の内要は「銀海」（千寿製菓・学術部発行）64号に掲載。

二、関寛斉の長崎在学日記より　　小川　鼎三

本講演の内容は「順天堂医学」（順天堂大学発行）第十八巻四号に掲載。

五月例会　五月二十六日（土）

於順天堂大学医学部九号館二階二番教室

一、古方派の系譜　　大塚　恭男

本講演は原著として掲載予定。

二、江戸東京の医人録　　中野　操

六月例会　六月二十三日（土）

於慶応義塾大学医学部北里記念図書館第一会議室

一、近衛家旧蔵古薬籠中の古文書をめぐって　　矢数　道明

佐賀県出身の山口俊之氏は、祖母の時代に近衛家より拝領したという姫路革製の古薬籠を所蔵していたが、その内容の鑑定を紀伊国屋漢薬局に依頼し、紀伊国屋より私のところへその調査の委嘱があった。

在中の薬物は、当時宮中へ献上された優れた漢方薬（人参、官桂など）民間薬（白牛洞はじめ黒焼など）、製剤（売薬紫金候、一粒金丹など十二種）まじない薬、薬関係の器物等合せて四十品目に及び、袋の上には拝領年月日が明記されているので、江戸中期二五〇年前に、日本で用いられていた薬物の原物に接することが出来て、これは非常に貴重な資料であった。

特に享保十五年麻疹流行のとき、霊元法皇（七十七才）と中御門天皇（三十五才）が麻疹に罹られ、将軍吉宗の配慮により、白牛洞（白牛の糞）の黒焼と生二袋を宮中へ献上した際に、ときの老中松平伊豆守と松平左近将監が連名で京都所司代牧野河内守に宛てた送り状と、その白牛洞の使用法を認めた二通の古文書があり、その白牛洞二品がそのまま保存されているのは興味深いものである。

ときのお取次役伝奏職は、中山兼親と園基香の二大名家で、いづれも宮中と密接な関係にあり、老中と所司代も姻戚に当っている。また天皇の側近関白は、近衛家久であった。家久の母は霊元法皇の女憲子内親王であったから、これらの古文書や宮中献上品が、近衛家に下賜され伝わっていたことも首肯できることである。

二、古書の修理方法　　石原　明

日本医史学会関西支部大会

恒例の大会を蘭研関西支部、東海蘭研之会、東海医学史研究会の共催で、去る五月十三日（日）、岐阜県羽島郡町エーザイ製薬内藤記念くすり資料館で開催された。講演内容は左記の通りである。

一、竹内流眼科について　竹内　幹彦（一宮市）
二、河田熊碩と岐阜県の種痘について　青木　一郎（岐阜県）
三、奈良家の医書及産科器具　安井　広（愛知県）
四、近代歯科学の先駆者上村泉三について　杉本　茂春（大阪市）
五、東西交渉史のクスリ　宗田　一（阪大）
六、好蘭斎漫筆寸見　末中　哲夫（近畿大）
七、蒲爾花歇・万病治準の序文の訳について　阿知波五郎（京都市）
八、広瀬旭荘の西洋認識　杉本　勲（東京都）

右の講演の他、内藤記念くすり資料館の内部の見学が行なわれた。同館には全国から集められた製薬道具、医療器具、生薬、売薬看板などの他、医書も蒐集されて図書室が整備されている。同館は地理的には幹線からはずれているが、立派な大小会議室、宿泊施設があって、学会開催に好条件を備えていた。

インド医学講演会

去る四月三日、インドの哲学者パンディト・シヴァ・シャルマ博士を迎えて、日本学術会議大講堂でインド伝統医学のアーユルヴェーダについて講演演会が本学会と日本学術会議などの共催で開かれた。この内容は次号に全文掲載する予定であるが、ここではシャルマ博士の略歴を記す。

Pandit Shiv Sharme 氏の略歴

インド伝統医学であるアーユルヴェーダの権威故Vaidya Ratna Pandit Ram Prasad Sharma(Vaidya Ratna は医師に与えられる最高の称号）の長男として生まれた。父君は臨床家として、学者として、また政治家として業績の大きかった人であり、この父のもとで、きわめて早期から厳格な教育を受けた。アーユルヴェーダ、現代諸科学、英語、インド哲学などを修めた後、一九二七年には Dayanand Ayurvedic College の上級教授となり、高学年生にアーユルヴェーダを、低学年生に premedical course の現代科学を教えた。またスポーツ（ゴルフ、クリケット、ホッケー、テニス、ピンポン等）にも万能であり、雄弁で且つ著述にもたけている。そしてインドにおける宗教、社会、科学関係の多くの団体において指導的役割をはたした。また国際的にも活躍し、ロチェスター大学、ユネスコ、サスコなどに招かれたりした。その活動はインド政府の認めるところとなり Radhakrischnan 大統領は一九六五年彼に Padma Bhushan という科学者に与える最高の称

号を与えた。又国会議員にも選出された。故 Kavitraj Gananath Sen は彼を「アーユルヴェーダのネール」と呼んだ。彼は一九五九年コロンボ計画でセイロンに派遣され、セイロン政府にアーユルヴェーダ発展のための助言をした。

独立前のインド政府は彼に Vaidya Ratna（右記注参照）の称号を与えた。自由インド共和国大統領 Radhakrischnan は彼を名誉侍医とし、以後現在の Shri V. V. Giri 大統領に至るまで歴代これにならった。またインド政府の伝統医学体系計画委員会の名誉顧問となり、インド厚生省のアーユルヴェーダ科学諮問委員会会長、中央インド医学審議会会長などの要職についている。更にセイロンは彼に史上初めて最高のタイトル Ayurveda Chakravarti を与えた。あるセイロンの高名な作家は『セイロン日曜タイムス』誌に「ネールの政治における、ラダクリシュナンの哲学における、タータの産業におけるようにアーユルヴェーダにおけるシヴァ・シャルマは偉大である」と称えた。

今回はオーストラリヤ国 The Helen Uale Foundation の招きで一ケ月余にわたりオーストラリヤの多くの大学、政府機関などで講演を行ない、その帰途訪日されることとなったものである。

岡西為人先生永眠される

本学会の理事岡西為人先生は去る五月五日（土）午後五時に肺炎のため逝去された。先生の碩学たることはここで述るまでもないが、特に中国滞在中になされた仕事は世界的なものであり、その人柄と共に多くの人々が先生を慕う原因となった。ここに生前の先生に親しく接してこられた方々の追悼文を掲げ、冥福を祈る。

岡西為人博士と中国医薬書

赤堀　昭

「正しいテキストを使わなければ結論が出る筈がなく、無理に出してもひとりよがりのものになるだけである。」これが本年五月五日に逝去された岡西為人博士の信条であった。

大正末年に南満医学堂（後の満洲医科大学）に勤務されて以来、一貫して中国医、薬学の研究、特に医書、本草書に関する研究（博士によれば漢法医学研究の基礎としてのテキストの整理）を行なって来られた。これは大谷光瑞、久保田晴光、黒田源次といった人達の影響によるものと考えられる。博士の著作については近刊の中国医書本草考の末尾にまとめてあるが、論文数は単行本も含めて約二七〇篇、その中医書、本草書、和漢薬及び医学史に関するものは約一二〇である。満大で行なわれたこの分野の仕事は最初が医書蒐集と整理であって、その結果は中国医学書目（昭和六年）、統中国医学書目（昭和一四年）として発表されている。この仕事の際の書誌学的研究をもとにして黒田源次、日名精一両

氏と検討を重ねて作られたのが宋以前医籍考で、一輯から四輯迄が昭和一一年から一九年にかけて出版された。黒田、日名の両氏は途中でこの仕事から離れ、四輯以後は岡西博士が独力でこれに当られ、終戦後も現地に残って仕事を続けられ、二三年五月に全部を完成された。この書は宋以前医籍考として北京（昭和三三年）で刊行され、台北でも再刊された。この間の研究の一部は脈経考（日本医学、昭和一三年）、支那産婦人科書考略（東亜医学研究、昭和一四年）等として発表されている。又この知見をもとにして博士は戦後、主要なる中国医籍の解題（漢方、昭和二七、八年）、漢方医学全書について（漢方の臨牀、昭和四四年）等の論文を書いて居られる。宋以後の医書については金元医書の書誌（漢方の臨牀、昭和四四年）等を発表され、更に徹底した究明を行なう意図を持って居られたが、これは実現に到らなかった。これらの論文の主なものは中国医書本草考に収められている。

本草関係での最も大きな仕事は新修本草の復原である。この作業は満洲で完了していたが、帰国後浄書され、昭和三九年に台北で刊行された（重輯新修本草）。この間に得られた知見はその末尾に示されているが、新修本草の構成（生薬学雑誌、昭和三四年）等としても発表され、この作業の基礎となった各本草書所載の薬品の比較の結果は新修本草及び証類本草の薬品数（塩野義年報、昭和二九年）等に示されている。金元、明清時代の本草についての研究結果は京都大学人文科学研究所科学史研究班の宋元及び明清時代の科学技術史についての報告（昭和四二、五年）中に見られ、歴代の本草に対する見解は集注本草、大観本草、紹興本草の解題や中国本草の史的展望（漢方の臨牀、昭和四六年）等で明らかにされているが、より詳しくは近く日本と台湾で刊行されることになっている本草概説と本草概論中で扱われている。又日本の本草については明治前日本薬物学史に収められた中国本草の渡来とその影響（昭和三三年中）に論じられている。

和漢薬については胡満蕷、雷丸、鶴蝨、防己、蒿類等に関する文献的考察があるが、特に詳しく検討されたのは丹方であって、中国医学における丹方（中国中世科学技術史の研究に収載、昭和三八年）等数篇の論文がある。又久保田教授の在職記念事業として編輯された日本和漢薬文献（昭和一五年）は今でもこの分野の研究者にとって欠くべからざる書となっている。

博士の研究は古典についての豊富な知識と長年の大陸生活の経験をもとにして構成されたもので容易に他の追随を許さないものであり、宋以前医籍考を始めとする多くの著作は今後の漢方乃至医学史の研究を志す者の指針として永くその価値を失わないものである。満大の豊富な蔵書と離れたことは博士のそれ迄の研究の続行を不可能とし、宋以後の医書の未整理という大きな損失を学界に残したが、反面それ迄の詳細な研究の成果を別の角度から眺めて綜合するという機会を博士に与え、専門家だけでなくこの道に関心を持つ者が広く博士の業績に接し得るいとぐちとなるような多くの論文をもたらした。

学徳の人　岡西先生をしのぶ

三木　栄

岡西為人先生が今春亡くなられた（一八九八～一九七三）。寂しさが身にしみる。先生に私が交誼を得たのは昭和六年頃からである。先生を兄と敬いつつ絶えることなく親交が現在まで続いているのである。共に前半は学校生活、後半は先生は勤務、私は開業で過ごし、同じような学問の道を歩み、戦前戦後の転変極まりない世代中も互いに学問を捨てず、現在に至った。しかし先生は先に逝かれた。

先生の専門学問は、薬理学―生薬学―本草学で、殊に中国の医薬本草書の書誌学的研究においては、世界の最高峯であり、その深奥な学識に対して中国、日本はもとより、米欧の学界からも崇敬の念が寄せられているのである。

数次文通後、先生に私がお目にかかったのは、昭和六年の春と思う。奉天の満洲医科大学東亜医学研究所を訪い、万巻の古医書の書架に囲まれた研究室で、全中国医書の目録を編纂されている先生の温容に接した。この時に印象された先生の褐色の御顔にひそむ透徹なまなざし、静かな物腰し、ぽつりぽつりと出る適切な言葉は、私に焼き付き消え去らず、ご他界の前に京都の病院でお目にかかった時でも、四十年余を経ても、これは同じであった。当時、私は朝鮮に在って全く未開拓の朝鮮医学史と疾病史との完遂を、生涯の研究として精進しており、早々同研究所収蔵の朝鮮医薬書類を尋ね、数々教えを受けつかくて談進み、互いに江戸後期の考証医学者の多紀家一門、渋江抽斎、小島宝素、森父子等の追求あくなき考証医学の偉業を語り合った。その後、この方面の研究は満鮮轡を列べて成され、私は朝鮮医学の根本資料追究上にて最大の収獲となり、一方先生は、中国医薬本草原典の発掘、その解明大成の縁由となったのである。

先生の学問の根幹は、東亜医薬本草学の本源の究明、その系統についての正確性の具現化である。これに終始一貫、寸時も休むことなく精力を傾けられ、戦中戦後の苦難な時も研究を続けられた。かくして、戦前「中国医学書目」「続中国医学書目」「宋以前医籍考」等の編纂、戦後に「新修本草」その復原、「本草経集注」その訂補、「紹興校証類本草」その解説、などと大業績を刊行された。これら中国本草学の貴重な祖本群は、夙に亡佚していたのであるが、先生の努力によって復原されまた発掘され、全系統が明白にされたのである。その他の発表論文は枚挙にいとまなく、一代の論著は背の高さにも達した。しかもこれらには雑文は一編もなく、みな鏤骨彫心の作である。先生の学問は挙げて基礎的なものばかりで、後進学者の受ける学恩は実に弘大で、これに依拠しなければ、その研究は砂上の楼閣となると言っても過言ではないのである。私も随分頻繁に疑問について教えを受けた。これに対し多くの時間を割き必ず折返し端整な美しい筆蹟で詳しく明快に懇切に教えられたのであった。

先生は大谷光瑞門下の仏教徒であった。しかも孔子の説く仁の人であった。ご自分の及び限りの力を以て人々に尽くされた。こ

れらはみな真心から出て、人に求められるような事は、一切なされなかった。先生は人の為めに親切を尽くされ、人類知の為めに偉大な業績を遺されたのである。

先生は亡くなられる直前まで、学究心は少しも衰えなかった。入院中、お見舞申上げても、ご病気のことは寸言で終わり、あとは本(ホン)の話ばかりであった。ご自身で出刊を見ず遺書となった著述に、「中国医書本草考」がある。これは病気静養中、既発表の諸論稿に修正を加え編んで一書とされたものである。前掲の原典篇を経とせば、この篇は緯となるもので、論考の総決算でご自身の学問の結晶とも見なされる。近くA4版の豪華大典となって南大阪印刷センターから遺著として記念出版される。私の旧著「朝鮮医書誌」の増修版も時と所を同じくして姉妹篇として出版される。拙著が日の目を見得たのは、先生が東亜医学史にて重要資料と認め、同社に推薦して下さったからである。先生の遺著に拙著が並らべられて世に出るとは、何の奇縁であろう。脈々と流れる四十余年間の好誼の香りが、御他界後においてなおも余香を与え賜うとは、感無量である。御霊前に静かに焚香し、ただ冥福を祈る而已。

昭和四八年六月末日記

抄録

笑気、酸素麻酔の歴史—笑気酸素の発見の歴史—

A History of Nitrous Oxide and Oxygen Anaesthesia Partla. The Discovery of Nitrous Oxide and of Oxygen.

W. D. A. Smith.

British Journal of Anaesthesia 44: 297-304, 1972

1772年代に諸説はあるが一応笑気は一七七二年に Priestley によって発見されたと言われてきた。

しかし実際には一七六七年あるいはもしかすると一七七六年に同じく英国の Joseph Black によって発見されていたことが判明した。Black はこの事実を出版しなかったが、彼の講義録 "Lectures on the Elements of Chemistry" の中で言及されており、この年代は講義を聴いた Thomas Cochrane や George Cayley の筆記録によっても証左された。

Black は ammonium nitrate を加熱して笑気を製造したが、笑気に燃焼を助長する作用があることを知っていたかどうかは疑わしい。勿論麻酔作用は知らなかった。

会員通信

広島県医師会の江川義雄氏を介して、広島県医師会を中心に医聖吉益東洞顕彰碑建立委員会の発足したことの通知をいただいた。ここにその趣旨を掲げ、本学会々員の協力を求め、目的達成の一助としたい。

二百回忌記念
吉益東洞顕彰碑建立
趣意書

広島の生んだ偉大なる医人吉益東洞は、過去の観念的医療を改め、実証的医学の実践と、万病一毒の疾病観にたち、漸新的医療を一世に風靡させた。その学風は、現代の東洋医学に於ても大きな影響を与えている。

彼は元禄一五年畠山道庵の長子として、広島市山口町に於て呱々の声をあげた。十九才にして医師を志ざし、元文三年三十七才にして「先物実試」「万病一毒」の学理を究めて京都に上る。赤貧洗うが如き中に、ひたすら医学医術の研鑽に情熱を傾け、多数の門弟を育成すると共に、『薬徴』『類聚方』『医事或問』『方極』など多くの著書を刊行した。安永二年七十一才にして没し、菩提寺は京都東福寺塔頭荘厳院である。

彼の学問に対する情熱と医の倫理性は、「餓死するともこの道世に行なわれば吾生涯の本望なり」との言葉として残り、また「先物実試」の実証科学精神は、今なお啻に医人のみならず学問を志す者への警鐘とし、また道しるべとして我々を激励してやまない。

このたび二百回忌に当り、記念事業として彼の偉大なる精神と功績を永世に伝えるため、生誕の地広島市広島医師会館前庭に顕彰碑を建立するはこびとなった。趣旨ご賛同の上、応分のご芳志を寄せられるようお願い致します。

尚、ご出宝いただいた方には『芸備医志』を記念復刻し謹呈申し上げます。内容は芸備医人先哲伝であり、現在入手不能の稀観本であります。

一、募金目標額　五百万円
一、募金要領　一口　三千円（一口以上）
一、募金締切期日　昭和四十八年七月三十一日
一、申込先
733　広島市観音本町一丁目一―一
広島県医師会内
医聖　吉益東洞顕彰碑建立委員会
振替　広島二一一番

昭和四十八年六月吉日

医聖　吉益東洞顕彰碑建立委員会
委員長　広島県医師会長　大内五良

日本医史学会々則

第一条　本会は日本医史学会と称する。

第二条　本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条　本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかつ。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展観などを行なう。

四、日本の医史学界を代表して内外関係学術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条　本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条　会員は会費として年額二〇〇〇円を前納する。ただし外国に居住する会員は年額一〇ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条　本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は

会員より理事長が任命する。

六、役員の任期は二年とし重任を妨げない。（ただし会長を除く）

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条 評議員は若干名とし、普通会員の中より理事会の推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は役員に準ずる。

第八条 本会の事務所は順天堂大学医学部医史学研究室内（東京都文京区本郷二の一の一）に置く。

第九条 本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第十条 会則の変更は総会の承諾を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日 年四回（三月、六月、九月、十二月）末日とする。

投稿資格 原則として本会々員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

原稿枚数 表題、著者名、本文（表、図版等を除く）で五印刷ページ（四百字原稿用紙で大体十二枚）までは無料とし、それを越えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原著においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

校正 原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別刷 投稿者には論文掲載紙を五部無料贈呈する。別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先 東京都文京区本郷二丁目一の一、順天堂大学医学部医史学研究室内　日本医史学会

日本医史学会役員氏名（五十音順）

理事長　小川　鼎三
会　長　蔵島　四郎
常任理事　石原　明　大鳥蘭三郎
会計監事　宗田　一
理　事
赤松　金芳　阿知波五郎　石川　光昭
今田　見信　内山　孝一　大塚　敬節
大矢　全節　緒方　富雄　蒲原　宏
佐藤　美実　杉　靖三郎　鈴木　正夫
鈴木　勝　宗田　一　竹内　薫兵
津崎　孝道　戸苅近太郎　中野　操
三木　栄　矢数　道明　吉岡　博人
和田　正系
幹　事
大塚　恭男　酒井　シヅ　沢井貫太郎
杉田　暉道　谷津　三雄
久志本常孝　榊原悠紀田郎　酒井　シヅ
酒井　恒　佐藤　美実　清水藤太郎
杉　靖三郎　杉田　暉道　鈴木　正夫
鈴木　勝　鈴木　宜民　瀬戸　俊一
関根　正雄　宗田　一　高木圭二郎
高山　担三　竹内　薫兵　田中　助一
津崎　孝道　津田　進三　筒井　正弘
戸苅近太郎　中泉　行正　中川　米造
中沢　修　中西　啓　中山　沃
長門谷洋治　中野　操　服部　敏良
福島　義一　藤野恒三郎　本間　邦則
富士川英郎　古川　明　丸山　博
松木　明知　三浦　豊彦　三木　栄
三廼　俊一　谷津　三雄　山形　敞一
矢数　道明　山下　喜明　山田　光胤
安井　広　吉岡　博人　和田　正系
以上

日本医史学会評議員氏名（五十音順）

赤松　金芳　安芸　基雄　阿知波五郎
青木　一郎　石原　明　石田　憲吾
石川　光昭　今市　正義　今田　見信
岩治　勇一　内山　孝一　大鳥蘭三郎
大塚　敬節　大塚　恭男　王丸　勇
大矢　全節　緒方　富雄　小川　鼎三
岡西　為人　蔵島　四郎　片桐　一男
川島　恂二　蒲原　宏　金城　清松

編集後記

今年はコペルニクスの生誕五百年というので世界各地でこれに因んだ催しが行われた。本誌ではコペルニクスの生地ポーランドからの寄稿があった。地動説のコペルニクスはあまりにも有名である。ところが彼が医者であったことは知られていない。ここで医師としてのコペルニクスを知り、彼の認識を改めることで彼の生誕五百年を祝おう。

なお、本号から編集に若手陣の動員をかけて、毎月、定期的に編集会議を開くことにした。

昭和四十八年六月二十五日　印刷
昭和四十八年六月三十日　発行
日本医史学雑誌
第十九巻　二号
編集者代表　大鳥蘭三郎
発行者　日本医史学会
代表　小川鼎三
〒一一三　東京都文京区本郷二―一―一
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替　東京一五二五〇番
製作協力者　金原出版株式会社
医学文化保存事業部
〒一一三　東京都文京区湯島二―三―一四
印刷者　五協印刷有限会社
〒一七四　東京都板橋区南常盤台一―二―三

REFERENCE

1) Matsuki A : Seishu Hanaoka, A Japanese pioneer in anesthesia. Anesthesiology 32 : 446-450, 1970.

2) Hanaoka S : Nyugan-chiken-roku (Therapy of Breast Cancer), (Manuscript, data unknown), Library of Tenri University

3) Keizo Mori (ed) : Seishu Hanaoka, Private edition 1964.

4) Shuzo Kure : Seishu Hanaoka and his surgery, second edition. Tokyo, Shibunkaku Comp. 1971.

5) Matsuki A : Seishu Hanaoka and The Date of the First Breast Excision under General Anesthesia. Japanese J. Anesthesiology 21 : 300, 1972.

129) May 3, 1824 Mother of Tarozaemon

130) Aug. 21, 1824 Elder sister of Tsuneemon Ohno

131) Bissextile

Aug. 1, 1824 Mother of Ichiroenon Nishidawa (tumor 103 g)

132) Sept. 8, 1824 Daughter of Bonze of Kohzenji Temple (26 years in age, tumor 103 g)

133) Sept. 17, 1824 Daughter of Shinpachi (17 years in age, tumor 103 g)

134) Apr. 13, 1825 Wife of Seibei Nagamatsuya

135) Apr. 26, 1825 Wife of Yahei

136) Jul. 23, 1825 Wife of Denjiro

137) ibidem Wife of Kaemon Mori

138) Aug. 7, 1825 Daughter of Rihei (23 years in age)

139) Sept. 2, 1825 Widow of Kambei Marukiya

140) Jan. 24, 1827 Daughter of Bonze of Saikohji Temple

141) Mar. 16, 1827 Mother of Yahei Kurodaniya

142) Jun. 11, 1827 Wife of Uhei

143) Oct. 2, 1827 Tsuru Enmanjiya

144) Sept. 26, 1828 Kane Shimakawa (35 years in age, tumor 55 g)

145) Oct. 8, 1828 Wife of Yaemon (tumor 36 g)

146) Mar. 2, 1829 Wife of Yaohachi (49 years in age, tumor 16 g)

147) Sept. 2, 1829 Daughter of Shichibei (35 years in age, tumor 525 g)

148) Sept. 31, 1829 Younger sister of Futoshi Miki (tumor 10 g)

149) Mar. 2, 1830 Wife of Teiseki Matsubara (tumor 35 g)

150) Oct. 20, 1830 Zenemon Tambaya (re-reccurence) First excision in Aug. 1827. Second excision in Oct. 1829 by Isei Sugitachi, pupil of Hanaoka

151) Jan. 10, 1831 Wife of Kahei

152) Apr. 9, 1831 Wife of Kichisuke Tsumezaki (39 years in age)

153) Mar. 25, 1833 Wife of Bonze of Honkohji Temple

154) Apr. 3, 1833 Wife of Zempachi (39 years in age)

155) Apr. 6, 1835 Wife of Sadaemon

156) Jun. 16, 1835 Wife of Gengoro

(Donates were abriviated.)

93) Apr. 22, 1819 Wife of Tsujiemon
94) May 22, 1819 Wife of Gihei
95) Sept. 27, 1819 Wife of Gembei Ohmiya
96) Nov. 1, 1819 Wife of Shinshiro Horino
97) Nov. 24, 1819 Wife of Juzo
98) Jan. 21, 1820 Mother of Jiemon Naraya
99) Feb. 19, 1820 Wife of Tokujuro Okeya
100) Feb. 22, 1820 Wife of Sakujiro
101) Apr. 1, 1820 Widow of Sandayu Matsuda
102) Jun. 4, 1820 Wife of Isuke
103) Jun. 11, 1820 Wife of Chuemon
104) Jul. — 1820 Wife of Kengyo Shibahara
105) Aug. 2, 1820 Wife of Kyubei
106) Sept. 1, 1820 Wife of Shichikuro Hayakawa
107) Sept. — 1820 Mother of Jiemon Marayn (reccurence)
108) May 22, 1821 ibidem (re-reccurence)
109) Aug. 27, 1821 Wife of Goroemon
110) Sept. 14, 1821 Wife of Monjiro (tumor 375 g)
111) Sept. 23, 1821 Wife of Shojiro
112) Bissextile
Jan. 26, 1822 Wife of Shichikuro Hayakawa (reccurence)
113) Feb. 22, 1822 Wife of Kihei Kohchiya
114) Feb. 25, 1822 Mother of Gijuro Takahashi (tumor 150 g)
115) Mar. 2, 1822 Mother of Shoemon Aburaya
116) Mar. 19, 1822 Wife of Tasuke
117) Ape. 3, 1822 Wife of Kansuke (tumor 188 g)
118) May 21, 1822 Wife of Chiho Kikyoya
119) Jun. 1, 1822 Wife of Kichibei Yamaguchiya
120) Jul. 27, 1822 Wife of Tatsuemon Shimaya
121) Aug. 11, 1822 Wife of Tokubei
122) Jul. 18, 1823 Wife of Otomatsu
123) Jul. 19, 1823 Mother of Jinzo
124) Jul. 25, 1823 Mother of Tasuke
125) Oct. 10, 1823 Wife of Jibu Meira
126) Oct. 10, 1823 Wife of Sensuke Kasuriya
127) Oct. 21, 1823 Wife of Kakubei Ohsakaya
128) Feb. 1, 1824 Wife of Sensuke Kasuriya (reccurence)

56) Apr. 25, 1813 Mother of Sadajiro
57) Jul. 15, 1813 Wife of Jinzaburo
58) Jul. 28, 1813 Wife of Seibei Kusuriya
59) Aug. 10, 1813 Wife of Yatabei Asaka
60) Sept. 16, 1813 Wife of Rihei Hiroseya
61) Oct. 29, 1813 Wife of Shinbei
62) Feb. 24, 1814 Mother of Yohzo
63) Mar. 4, 1814 Wife of Masataro Sawada
64) May. 28, 1814 Wife of Seishichi Kurokiya
65) Jul. 8, 1814 Wife of Rihei
66) Aug. 28, 1814 Wife of Sahei Matsudaya
67) Sept. 8, 1814 Wife of Seizaemon Tachibanaya
68) Oct. 9, 1814 Daughter of Gensuke (19 years in age)
69) Mar. 25, 1815 Wife of Yasuke Kaji
70) Jun. 5, 1815 Wife of Chodayu
71) Oct. 30, 1815 Wife of Sagoemon
72) Feb. 13, 1816 Wife of Shinkuro
73) Apr. 2, 1816 Wife of Kohsuke Yabashi
74) Apr. 26, 1816 Wife of Sohshichi
75) Jun. 7, 1816 Wife of Yaemon Matsumoto
76) Jul. 18, 1816 Wife of Gisuke
77) Oct. 6, 1816 Wife of Kohshiro Hashimoto
78) Jun. 22, 1817 Wife of Hambei
79) Jun. 29, 1817 Wife of Bonze of Kohrinji Temple
80) Aug. 11, 1817 Wife of Yohei Daimonjiya
81) Aug. 11, 1817 Wife of Shinsuke Kitaguchi
82) Aug. 22, 1817 Wife of Hachibei
83) Aug. — 1817 Wife of Kichizaemon
84) Aug. — 1817 Wife of Yohei Daimonjiya
85) Mar. 11, 1818 Wife of Genzaimon
86) Apr. 21, 1818 Wfe of Naobei
87) Apr. 29, 1818 Wife of Kakubei Kanaya
88) May 15, 1818 Wife of Senjiro
89) Jul. 25, 1818 Wife of Kichijuro
90) Aug. 21, 1818 Wife of Daizen
91) Oct. 6, 1818 Wife of Magobei
92) Feb. 29, 1819 Wife of Tameemon

20)	Feb. 12,	1809	Wife of Jusuke
21)	Apr. 4,	1809	Wife of Tokuemon
22)	May. 22,	1809	Wife of Chubei Daitaya
23)	May 24,	1809	Wife of Genseki Katsumata
24)	Jun. 6,	1809	Wife of Jimbei Kaji
25)	Sept. 13,	1809	Mother of Jihei Mikawaya (Reccurence)
26)	Jan. 19,	1810	Wife of Jiemon Kuroyama
27)	Jun. 26,	1810	Wife of Bunzo
28)	Jul. 20,	1810	Wife of kiyohachi
29)	Aug. 28,	1810	Wife of Risaku
30)	Aug. 31,	1810	? of Tohgan Daita
31)	— —	—	Wife of Heishichi Hiranoya
32)	Nov. 13,	1810	Wife of Jihei Matsuya
33)	Bissextile Feb. 3	1811	Wife of Heishichi Hiranoya
34)	Feb. 25,	1811	Wife of Kakujiro
35)	Apr. 9,	1811	Mother of Shichidayu Inomata
36)	Apr. 18,	1811	Wife of Zenshichi
37)	May 19,	1811	Wife of Sashichi Yamazaki
38)	Aug. 22,	1811	Wife of Bonze of Kohfukuji Temple
39)	— —	—	Wife of Jimbei
40)	Sept. 18,	1811	Wife of Rinsuke
41)	Sept. 22,	1811	Mother of Zengoro
42)	Jan. 22,	1812	Mother of Juzaemon
43)	Feb. 22,	1812	Mother of Katsuemon
44)	Mar. 4,	1812	Wife of Tarobei Hirai
45)	Mar. 24,	1812	Wife of Shoshichi
46)	Apr. 14,	1812	Wife of Tahachi
47)	Apr. 20,	1812	Wife of Shobei
48)	May. 1,	1812	Wife of Kohenon Kanenaga
49)	Jun. 4,	1812	Wife of Kambei Sato
50)	Jun. 23,	1812	Wife of Jimbei Ohmiya
51)	Jul. 11,	1812	Wife of Mineji Takada
52)	Jul. 25,	1812	Wife of Juzaburo
53)	Sept. 15,	1812	Wife of Uemon
54)	Sept. 21,	1812	Wife of Kihei Kameya
55)	Apr. 22,	1813	Wife of Chuemon

Table 1. The Recurrent Cases of Breast Cancer

Case No.	Date of First Op.	Date of Second or Third Op.
1) 11……25	Feb. 15, 1808	Sept. 13, 1809
2) 14…18…20	Jun. 13, 1808	Nov. 30, 1808……Feb. 12, 1809
3) 31……33	Date unknown	Bis. Feb. 3, 1811
4) 80……88	Aug. 11, 1817	Date unknown
5) 98…107…108	Jan. 21, 1820	Sept. —, 1820 ……May, 22, 1821
6) 106…… 112	Sept. 1, 1820	Bis. Jan. 26, 1822
7) 116…… 124	Mar. 19, 1822	Jul. 25, 1823
9) 126…… 128	Oct. 10, 1823	Feb. 1, 1824

Bis.: Bissextile Month

whether the first three cases received surgical treament or not. Out of 153 cases which received internal or surgical treatment, eight recurrents were observed as shown in the Table 1. Two of the cases had relapses. The mean interval between the recurrence was 8.7 months.

A Name List of Breast Cancer

1) Jan. 29, 1804 Wife of Kahei
2) Feb. 22, 1804 Wife of Seiemon Ikeda
3) Jun. 1, 1804 Aunt of Jubei Kamiya
4) Oct. 16, 1804 Mother of Rihei Aiya
5) Jan. 6, 1805 Wife of Hikoemon
6) Jun. 12, 1806 Wife of Tarobei Ohtaya
7) Jul. 23, 1806 Mother of Zenji
8) Jan. 29, 1807 Wife of Jisuke Kaji (30 years in age)
9) Feb. 20, 1807 Wife of Jisuke Mukaino
10) Mar. 29, 1807 Wife of Hikohei
11) Feb. 15, 1808 Wife of Jihei Mikawaya
12) Mar. 7, 1808 Mother of Heishichi Mondo
13) May. 15, 1808 Mother of Sagoemon
14) Jun. 13, 1808 Wife of Jusuke
15) Jul. 22, 1808 Wife of Dembei
16) Aug. 13, 1808 Mother of Kohsaku Kyoya
17) Oct. 9, 1808 Wife of Jusuke
18) Nov. 30, 1808 Wife of Jusuke
19) Feb. 2, 1809 Wife of Bunhachi

an adequate depth of anesthesia for surgery so as to be able to perform the operation about noon, because surgical anesthesia was usually obtained about 4-6 hours after giving "Tsusensan".

3) Postoperative Care

To accelerate awakening from anesthesia, a saline solution was orally administered to the patient for the first time followed by Kanzo-shashinto and Ohren-gedokuka-sekkoto as described previously.

IV) Accurate Date of the First Surgery under General Anesthesia

It has long been believed that Hanaoka performed the excision of breast cancer on a woman named Kan Aiya of 60 years of age on October 13, 1805.

In his "A Name List of Breast Cancer", Hanaoka describes "October 16. 1804, Washu Gojo no Eki, Mother of Rihei Aiya". And October 13, year unknown, was the date of surgery in his "Nyugan-Chikenroku"[2]. The discrepancy of about a year would be due to hypothesis that she had consulted him in 1804, and she received the operation the next year[3)4)].

To explicate this problem the author[5)] investigated the death date of Kan Aiya which had remained unknown and found at last her name in a necromancy of the Kohmidoji-Temple, Gojo City, Nara Prefecture. It reads as follows;

Adress: Kitano Machi, Gojo Village

Name: O-Kan, Mother of Rihei Aiya

Posthumous name: Shungetsu Chiryo Shinjo

Date of Death: February 26, 1805

"O" of "O-Kan" is a prefix to a woman's name. It is most likely that Kan Aiya underwent the operation on October 13, 1804. This was the first trial for Hanaoka to employ general anesthesia with "Tsusensan". She died on February 26, 1805, about four months after the surgery.

V) A Name List of Breast Cancer

The list is given here. The number of patients with breast cancer that Hanaoka treated amounted to 156, however, it has not been clear

Seishu described differential diagnostic measures for breast cancer and acute mastitis but did not mention fibroadenoma mammae and mastopathia chronica cystica. It was reasonable to think that at that time he could not clearly discriminate breast cancer from these similar diseases. Therefore, several other diseases were supposedly mingled in 153 cases of breast cancer.

Ⅲ) Anesthetic Management of Patients

1) Pre-operative care

Hanaoka attached much importance to the evaluation of preoperative physical status of patients. He informed them carefully of the outline of the procedure helpful for reducing anxiety before operation. He never performed an operation on a patient who had complication of any other diseases, which were to be treated first of all. In the case of Kan Aiya with complications of beriberi, acute bronchitis and inveterate cough, she was orally given some drugs for forty days to overcome them.

Administration of "Tsusensan" was contraindicated in the patients with i) congenital feebleness, pale face, emaciation of extremities, slight elevation of body temperature and anorexia. ii) recent episodes of bleeding from any cause, refractory cough and sputum or, iii) abnormal swelling of abdomen, palpitation of heart. Hanaoka designated the above mentioned signs "Zen-san-shin" meaning three warning signs before anesthesia.

To improve the poor physical status before operation, he used the following drugs such as Ninjin-choei-to, Kaisho-san, Sandai-san and Shojin-san containing heart stimulants, analeptics and blood coagulants.

2) Care during anesthesia

Hanaoka estimated the onset of anesthesia by "Go-san-shin" meaning tachycardia, dryness of mouth and pharyngeal cavity, pupil dilatation and flushed face.

Extremities of the patients were tied tightly to the operating table to avoid sudden body-movement.

He gave "Tsusensan" to the patients in the morning to obtain

General Anesthesia and Surgery by Seishu Hanaoka

Akitomo Matsuki, M. D.

I) Introduction

In the previous report the author[1] gave a brief biography of Seishu Hanaoka, a Japanese pioneer in anesthesia, who performed excision of breast cancer in many cases, employing general anesthesia with satisfactory results in the beginning of the nineteenth century.

The author gives more detailed information as to his criteria of breast cancer, management of anesthesia, the correct date of the first surgical operation for breast cancer and the results of surgery, which gives a vivid impression of him before the reader.

II) Hanaoka's Criteria of Breast Cancer

1) A patient with mastitis complains of a mass in the breast with red surface and pain. She also feels a chill and fever.

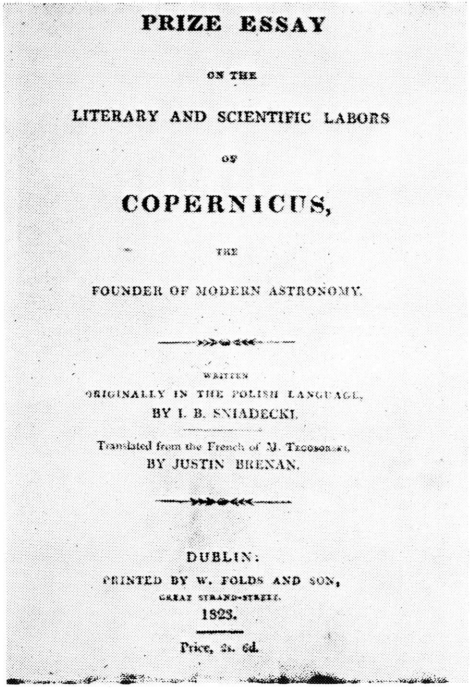
2) The tumor of acute mastitis is moist at the surface, soft in consistency and easily discharges pus when punctured. This may lead to a smooth and quick cure.

3) A patient with breast cancer complains of a firm, movable, painless tumor, on the surface of which discoloration appears, but it formulates a cancerous ulcer and is firmly fixed to the chest wall in the terminal stage. Enlarged axillar lymph nodes are often observed.

4) The cancerous tumor does not discharge pus even by puncture, but puncture or incision of the tumor is contraindicated, for it may accelerate ulceration of the tumor.

5) Physical status of the patient with cancer metastasis to axillar lymph glands is generally poor, and recurrence often occurs in these cases even postoperatively.

* Lecturer in Anesthesiology, Department of Anesthesiology, University of Hirosaki School of Medicine. Hirosaki, Aomoriken, Japan.



PRIZE ESSAY

ON THE

LITERARY AND SCIENTIFIC LABORS

OF

COPERNICUS,

THE

FOUNDER OF MODERN ASTRONOMY.

WRITTEN

ORIGINALLY IN THE POLISH LANGUAGE,

BY I. B. SNIADECKI.

Translated from the French of M. Tecosonas,

BY JUSTIN BRENAN.

DUBLIN:

PRINTED BY W. FOLDS AND SON,

GREAT STRAND-STREET.

1823.

Price, 2s. 6d.

Fig. 13 Copy of the English edition of the essay on Copernicus by Sniadecki

Fig. 14. Copernicus–the man, who stopped the sun and moved the earth

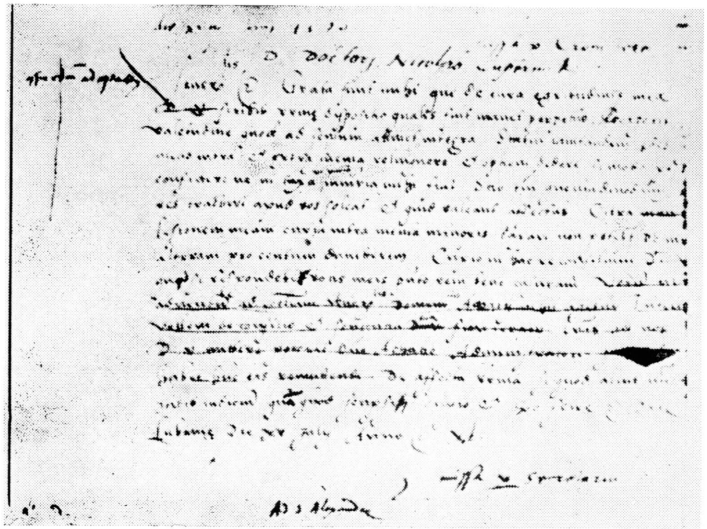


Fig. 11 Letter of Bishop Giese to Copernicus

Fig. 12 Copernicus–the light in the Medieval Science

Fig. 9 Cathedral at Frombork. Copernicus spent here 30 years

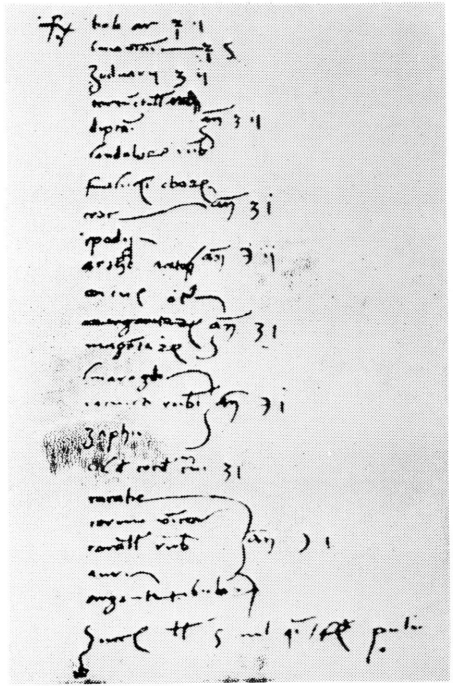


Fig. 10 Praescription of Copernicus

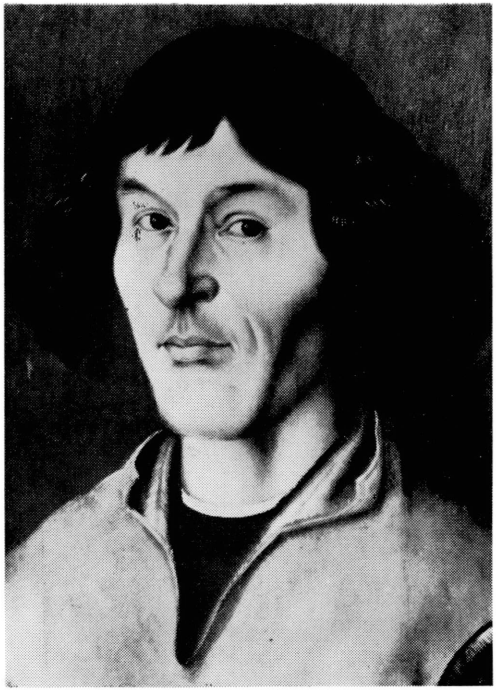


Fig. 7 Copernicus-supposed auto-portrait. Nat. Museum-Torun

Fig. 8 Copernicus-as a Doctor of Canon Law

Fig. 5 Copernicus as physician. Lilies of the valley-Symbol of medicine

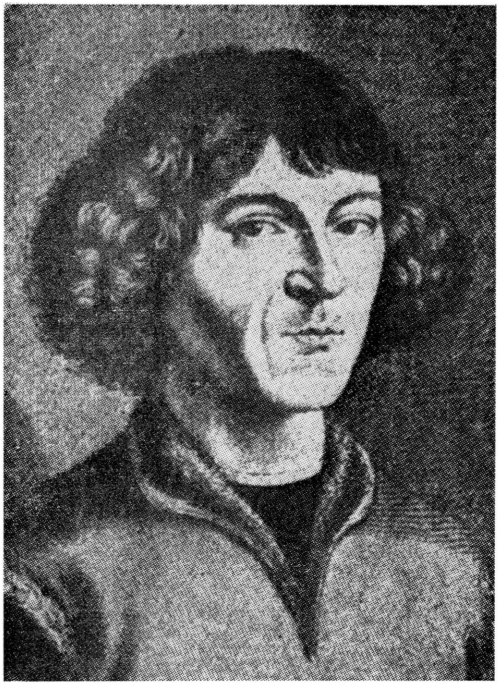


Fig. 6 Copernicus-sketch by J. Falck

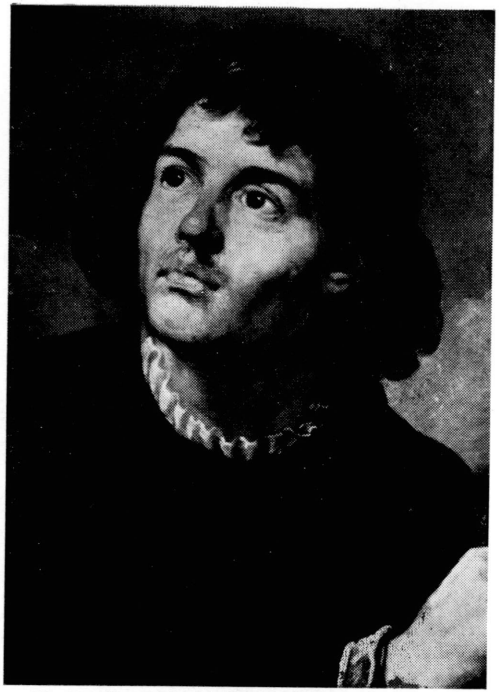


Fig. 3 Portrait of Copernicus, painted by Bacciarelli (Nat. Museum-Warsaw)

Fig. 4 Copernicus-painter unknown

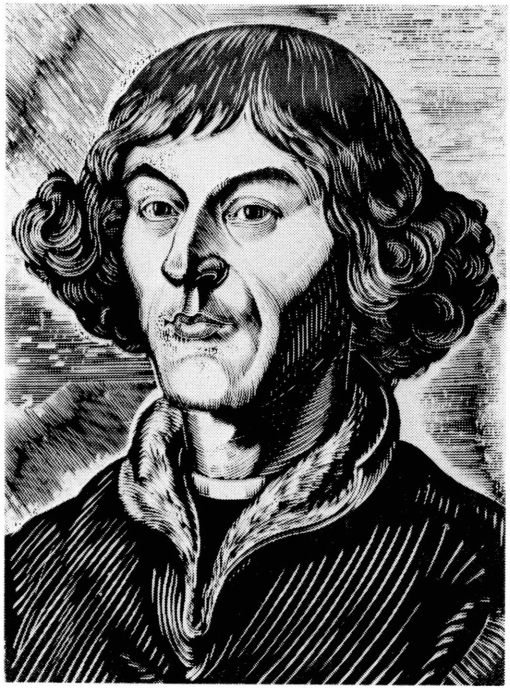


Fig. 1 N. Copernicus

Fig. 2 The emblem of Torun, where Copernicus wasborn

22. Rytel A. : Nicolaus Copernicus.... physician and humanitarian. A new approach. Polish Med. Hist. and Science Bull. 1956, I/1 : 3-11.
23. Skaroyński B. : Kopernik lekarzem. Problemy 1953, 9 : 665-668.
24. Skulimowski M. : Nicholas Copernicus Eminent Representative of 16th Century Polish Medicine. J. Amer. Med. Ass. 1964, 188 : 668-670.
25. Szpilczyński S. : Kopernikowska wizja postepu w medycynie. Kwartalnik Historii Nauki i Techniki. 1968, 13/3 : 577-593.
26. Szumowski Wl. : Historia medycyny. PZWL, Warszawa 1961.
27. Śniadecki J. : Dziela. Vol. II. Warszawa 1839 ; 105-106.
28. Śniadecki J. : O Koperniku, Warszawa 1953, str. 67.
29. Zembuzuski L. : Mikolaj Kopernik, jako lekarz. Wiadomości Lekarskie, 1953, 6 : 381-383.

References

1. Barycz N. : Mikolaj Kopernika w dziejach narodu i kultury polskiej. Przeglad Zachodni 1953, 9 : 513-570.
2. Birkenmajer L. A. : Stromata Copernicana. Kraków, 1929, 57 : 60-61.
3. Birkenmajer L. A. : Mikolaja Kopernik jako uczony, twórca i obywatel. Kraków, Ed. Pol. Akad. Um. 1923, str. 126.
4. Birkenmajer L. A. : Mikolaj Kopernik. Wszechświat. 1953, 1 : 1-11.
5. Brozek J. : Dziela wybrane. Tom 1-2, Warszawa 1956.
6. Bruce-Chwatt L. J. : Copernic, medicine inconnu. Presse Medicale 1959, 69, N. 39.
7. Bruchnalski W. : Kopernik, jako przedstawiciel epoki przelomu. Lwów 1923, 91-10.
8. Buck Robert W. Doctors afield : Nicolaus Copernic /1473-1543/, New Engl. Med. Jour. 1954, 22 : 954-955.
9. Castiglioni A. : Die Schule von Padua zur Zeit der Reneissance. "Ciba" - Zeitschrift 1950, XI/2 : 121 ; 4446-4455.
10. Flis S. : Mikolaj Kopernik, jako lekarz. Pol. Tyg. Lek. 1953, 29-30, 31 ; 1030-32 ; 1061-64 ; 1094-1096.
11. Fritz J. : Kopernik lekarzem. Polska Gaz. Lek. 1922, 50-51 ; 813-814, 836-837.
12. Gasiorowski L. : Zbiór wiadomości do historyi sztuki lekarskiej w Polsce od czasów najdawniejszcch az do najnowszych. Vol. I, Poznań 1839.
13. Hartleb K. : Wielka trójca lekarzy polskiego Odrodzenia Pol. Tyg. Lek. 1948, 3 : 481-484.
14. Kersten H. : Kopernik i jego czasy. PIW, Warszawa 1961, str. 550.
15. Konopka St. : Mikolaj Kopernik wśród lekarxy. Rozdz. w szkicach monograficznych "Mikolaj Kopernik „ Editor : J. Hurwic, PWN, Warszawa 1965, 189-209.
16. Konkolewski L. : O Mikolaju Koperniku-lekarzu. Gazeta Toruńska 1953, Nr 18/19 : 6.
17. Kośmiński St. : Mikolaj Kopernik. "Słównik Lekarzów Polskich". Warszawa 1888, 229-230.
18. Kowarzyk H. : Kopernik jako lekarz. Postepy Higieny i Medycyny Doświadczalnej 1954, 7 : 173-177.
19. Lachs J. : Polacy, uczniowie padwskiej szkoly lekarskiej. Arch. Hist. Fil. Med. 1924, I/2 ; 127-149, 3/4 : 275-290.
20. Okniński W. : Stopnie naukowe M. Kopernika w dziedzinie medycyny. Zycie i Myśl, 1966, 16 : 112-127.
21. Prowe L. : Coppernicus als Arzt. Leopoldina 1881, Halle, pp. 25.

This year we celebrate the fifth centenary of the birth of this great scholar and physician. It is possible that modern medicine has suffered a disadvantage as the result of Medicine not having been Copernicus' primary interest. As Kepler, who continued his work, expressed it: "Copernicus was ignorant of the resources of his own mind..." Had Copernicus concentrated on medical problems perhaps, in that field too, he would have been a pioneer of new methods. Nonetheless, he had an excellent reputation as a physician and was not behind his contemporaries.

Copernicus' greatness lies, however, currently seen primarily in his theory of the earth and planets revolving around the sun. He reduced his theory to a simple and comprehensive system based on the conviction that nature is ruled by simplicity and reason. The dethronment of the earth as the centre of the universe was one of the most daring assertions of the Renaissance and it is for that we pay homage to the memory of this great astronomer, physician and scientist. He demonstrated that the criteria of the truth of natural and medical theories should not differ from those applicable in other fields of science.

Today we celebrate the memory of Nicolaus Copernicus, whose universal mind covered philosophy, medicine, chronology, astronomy, history, aesthetics and other fields of science, the "man of breakthrough" in the history of mankind /7/.

The life and works of Copernicus extended the visible world and raising with all Poland his hands to the sky, he found the sun and showed it to the world.

spiritual father of the far-reaching achievements of astronomy in the XVII XVIII and XIX centuries. Johann Kepler /1571-1631/ discovered the laws of motions of planets, Galileo / 1564-1642 / was the discoverer of the nature of gravity, free falling of bodies and the perpendicular and recitilinear motions, Newton /1642-1727/ stated, that the main laws of mechanics must be based on the heliocentric system and Halley /1654/ proved the existence of comets. Bradley /1728/ discovered the aberration of light. Hevelius described the liberation of the terrestrial axis and finally Hendoron and Bessel calculated the parallax of stars. Copernicus had adversaries and opponents, among them Francis Bacon, Milton and Hegel. Throughout the history of science, it has been repeatedly demonstrated that not all can endure a very bright light, especially if the eye of the viewer has been accustomed for a long time to darkness... .

Copernicus died on May 24, 1543, at Frombork. Tideman Giese, Bishop of Chelmno, wrote to Jerzy Joachim Retyk: "he grew weaker suddenly and blood came gushing from his mouth, then, all at once, his right arm and side became paralysed. His death was quick, as he had predicted himself". By a strange coincidence on the very same day there arrived in Frombork the printed copy of *De revolutionibus*, sent to the author by Retyk. Copernicus' fading gaze rested for a while on the book that was to ensure his immortality. Several centuries later a Polish scholar Jedrzej Śniadecki wrote: "Copernicus was dying when his work on the revolutionibus of heavenly bodies appeared in print; it was the rise of immortality and the fading away of man...." /27/.

In 1802 Jan Śniadecki, the distinguished scientist, mathematician and astronomer, the elder brother of Jedrzej Śniadecki, who was one of the most famous Polish physicians, philosophers and chemists, wrote about Copernicus that "he came out of the bosom of the Polish nation ...tore down the veil of errors and illusions, led the human mind to the ways of truth, explained the true structure of the universe and laid first foundations and principles of those great laws which have brought astronomy at the head of the most precise physical sciences and brought glory and honour to the human mind..." /27/.

indications that his natural impulse for research applied to some extent to medicine as well. According to the information left by Father Jan Brozek of Kurzelew /5/ who had access to Copernicus' letters and notes, now lost, the astronomer worked out comparisons and analogies between medicine and Archimedes' mechanics, and sought mathematical formulae in medical science. Brozek's intimation is the only sign of Copernicus' attempt to link biological phenomena with mathematical problems and with those of natural science. It was eighty-five years after Copernicus' death that Harvey's work, *De motu cordis*, appeared. There for the first time a physician looked upon man's body as upon a physiological mechanism in motion; this marked the beginning of a new era in the experimental research in medicine /18/.

The Copernican concept that mathematics plays a foundamental role in medicine has been fully recognized today: coefficients, in their practical application to a large part of the world's population, define the most favourable conditions of human existence. Saved from oblivion by Brozek, the idea of the great physician and scientist may be easily referred to as the Copernican vision of progress in medicine /25/.

In addition to his medical practice and to the development of new concepts in medicine, Copernicus worked on perfecting his *De revolutionibus orbium celestium libri sex*. Constantly dissatisfied with the results, he kept postponing its publication. It was not until the personal intervention of a young professor of astronomy at Wittenberg, Jerzy Joachim Retyk, that Copernicus' doubts were finally removed. From the author's own priceless manuscript a copy was made for the printers. Retyk commissioned Jan Petrejus' printing house in Nuremberg and Copernicus' entire work on the heliocentric system of the universe was finally published.

The founder of the modern astronomy belonged to these exceptional men of genius who had the courage of pointing out the errors of traditional, time-honoured concepts accepted by all their contemporaries, He made a discovery which was contrary to the common reason and experience but nevertheless was true. The power of his thought, tremendous erudition, and great imagination, left behind not only his contemporaries but also the generations to come. Copernicus was the

Euclid, is a prescription written in Copernicus' own hand and composed of as many as twenty-one ingredients of herbal, animal and mineral origin. Among the last are included precious stones and metals like gold, silver, emerald, sapphire, and coral. The cost of such medicaments must have been enormous, but their effect unknown. However, next to those complex prescriptions, typical of medieval medicine, we find simple ones based on experience and folklore wisdom. For coughs Copernicus recommended cloves with honey; for diarrhea, cloves with warm red wine /29/.

The last medical text-book bought by Copernicus was the work of Aegina: *Libri septem, quibus dextra melendi ration ac via tam in diaetetico quam pharmaceutico et chirurgico genere compendio continetur* /Basle 1538/ /15/. Copernicus has not left any works from the field of medicine, which is rather unexpected considering that his mind was particularly prone to philosophical reasoning. However, certain manuscripts in possession of the library in Frombork are thought to have been written by him. Towards the end of the XVI century several medical manuscripts were entered in the catalogues of the library, among them a treatise under the title: *Regimen sanitatie,* containing hygienic instructions arranged in accordance with the months. This treatise was believed to have been written by Copernicus, but after a thorough investigation it was found that this supposition was not true /15/.

As well as a fruitful and versatile medical practice. Copernicus showed particular interest in hygiene and epidemiology /10, 11, 13, 15/. It is known that Bishop Fabian Luzjański asked him to work out sanitary regulations designed to combat the epidemic of an infectious disease which spread in coastal districts in 1519. Copernicus due to his thorough knowledge of mathematics, physics, mechanics, and hydraulics gave the people of Varmia and Pomerania wholesome drinking water by building special waterworks. A simple Latin inscription on the water installation in Frombork praises Copernicus as the man whose "wisdom gave the people what nature begrudged them..."

It appears from the accumulated historical data that Copernicus was a popular, experienced and learned physician. Also, there are

youth but an enemy towards the close of his life. Another patient of his was Tideman Giese, Bishop of Chelmno, Copernicus' school friend, who suffered from malaria. Copernicus' medical activity went far beyond Frombork and its vicinity. He made frequent trips to the Duchy of Prussia, to Gdańsk and Olsztyn. Prince Albert of Prussia called him to the bedside of a sick friend and kept him for a month as a guest in his palace at Königsberg. Copernicus did not concentrate only on people of high standing; many of his patients were peasants on whom he lavished genuine attention, often supplying them with his own medical preparations.

Copernicus, constantly eager to enrich his medical knowledge, bought medical books for his own use and for the Varmian Library. Many of his books were lost but a number of them survived, mostly those taken away from Varmia in 1626 during the Swedish invasion of Poland. They are housed in the university Library in Uppsala, and in the Charter House Library in Strängäs /Sweden/. Most of the work used by Copernicus consisted of the then known text-books, e. g. *Breviarum practicae medicinae* by Bartolomeus da Montagnana /Venice 1499/ or *Practica in arte chirurgica* by Joannis de Vigo /1516/. We find also ancient classics in medicine like Hippocrates' *De preparatione hominis*, Galen's *De affectorum locorum notitia*, and commentaries to Avicenna's *Canon of Medicine* and also the Greek dictionary of John Baptist Chrestonius edited in 1499, which Copernicus used during his studies in Padua. For the most part, the books are practical in character and therefore typical of a medieval medical library /2, 3, 15/.

There is one additional reason why books left by Nicolaus Copernicus are of such value to us. Their owner was wont to read, pen in hand, marking parts of interest to him aud jotting his remarks on the margins or on unprinted pages. Those marginalia tell us a great deal about the kind of medical preparations administered by him. Some were derived from folk-medicine, some based on the work of Dioscorides /2 nd century/ which for a dozen or more centuries was used as a textbook on therapy by practicing physicians. The influence of classical authors is seen clearly in all cases when blood-letting is indicated.

In one of the books in Uppsala Library, a mathematical work by

held by Copernicus. However, the medicolegal regulations in the XV and XVI centuries in Poland did not permit a person without sufficient qualifications to practise medicine so extensively and universally as Copernicus did. Furthermore, the position of "*medicus capitularis*" held by Copernicus at the independent Varmian Chapter also required high professional standards as were generally held by doctors of medicine in Poland with such qualifications /20/. It is also significant that, in one of the oldest portraits painted by Tobias Stimmer, Copernicus holds in his hand not the symbol of astrology, but a lily of the valley, the sign of the medical profession.

Lucas Waczenrode, Copernicus' uncle, summoned him to his residence at Lidzbark. There Copernicus worked as a physician and built up a considerable medical practice without deriving from it any material benefits. Devoting his free time to astronomy, he gave much thought to a new order of the universe. Copernicus stayed at Lidzbark until 1512, when Bishop Waczenrode died of some undefined metabolic disorder. The same year Copernicus moved to Frombork where he spent the rest of his life, i. e. until 1543. There, in the seclusion and peace of his observatory tower, he worked on mathematical calculations which were the basis of the epoch-making astronomical discovery. At the same time he did not neglect his medical duties and was always ready to serve those who needed his help /10, 15, 22, 24/.

On the subject of medicine he corresponded among others with Jan Benedykt Solfa, the outstanding private physician to the Polish King Zygmunt the Old, and with Jan Tesler of Wroclaw and Jerzy Joachim Retyk. Historical documents offer a great deal of information about Copernicus' medical activity. He treated, and in most cases with good results, a member of prominent personalities. One of his patients was Bishop Fabian Luzjański, a sufferer from a serious chronic disease. Another was his own brother, Andreas, who, on his return from Italy, was striken with leprosy. He was also frequently called upon to give medical advice to Bishop Maurycy Ferber of Lidzbark, who suffered from intestinal disorders and gout; and to Aleksander Scultenius, historian and geographer, supporter of Luther; to Jan Dantyszek, classical scholar, successor of Ferber, a friend of Copernicus in his

arguments of Szumowski /26/, Prowe / 21 /, Kersten / 14 / and others who maintained that lack of medical qualifications did not prevent, from the formal standpoint, for the medical students of the XV and XVI centuries in undertaking medical practice. This argument, however, is refuted by many legal acts issued at that time in Poland, particularly the statuses of the Medical Faculty in Cracow and by laws of many cities in the Kingdom of Poland, which made the practice of medicine upon the appropriate medical qualifications of the practitioner.

Kośmiński /17/, and others failed to discover documentary evidence, that the famous astronomer actually had received the degree of doctor of medicine. No trace of this degree having been conferred upon him can be found in the archives of the University of Padua, since the documents of the Collegium Medicorum from 1503 to 1507 were lost under unknown circumstances /20/.

The single brief reference to the ceremony of conferment of the M. D. degree in Padua can be found in an extensive work of the Greek historian M.Papadopoli from Candia : *Historia Gymnasii Patavini* /Venice 1728/ /12/, where he wrote on page 195 as follows : " Nicholas Copernicus studied for 4 years philosophy and medicine in Padua as evidenced by the Polish album where he was enrolled as a disciple of M. Passara and M. Vernia of Chieti and he received the doctor's degree in both these disciplines as it is written in the archives of the Collegium Medicorum from the year 1499 ".

For a long time many historians studying the life of Copernicus accepted this statement of Papadopoli at face value. But in the XIX century Polkowski and Wolyński questioned the reliability of the work of Papadopoli, raising doubts on the work of this historian /20/.

Another source of information on the medical degree of Copernicus is the epitaph, erected in 1581 by Marcin Kromor of Biecz, who was at that time the Bishop of Varmia. This epitaph was in the cathedral in Frombork, and the scientist from Toruń was called on it " artium and medicine doctor ". One of the letters of Prince Albrecht of Prussia also mentions Nicolaus Copernicus as a doctor of medicine.

We must admit that the information, collected from many historical sources, does not shed enough light on the medical degree and positions

many scholarly books. The anatomist Marco Antonio della Torre /1473-1506/, a friend of Leonardo da Vinci, and Gabriele Zerbi /1468-1505/, author of dissertations on the anatomy of the human body and that of a child, were foremost. Theoretical medicine was taught by Girolamo de Urbino, Philippo Pomodora and Girolamo Pindemonte; practical medicine, by Giovanni Aquila and Alessandro Benedetti who, in addition to being a respected surgeon, was also the founder of the anatomical theatre where autopsies were regularly performed. Benedetti regarded clinical and anatomicopathological observation as the basis of medical progress. Copernicus also attended the lectures of Girolamo Fracastore /1478-1533/, a renowned physician, physicist, astronomer and and poet, the author of a book on infectious diseases and of a poem on syphilis. Among the probable teachers of Copernicus we should be mentioned the physician Petro Trapolini who was also a mathematician of note, and Bartolomeo da Montagnana the Younger, an outstanding hygienist and anatomist. Nicolaus Copernicus was undoubtedly an attentive student; he also completed his practical medical training at Padua, although historical sources do not say under which physician; in addition he studied Greek, a language essential for reading medical texts in the original. His studies in Padua were interrupted for a time by his endeavours to obtain the doctorate in decretals to which his previous studies in Bologna had entitled him, and which he finally received on 31st May 1503, in Ferrara, thereby being promoted to what was the equivalent of a doctor of Canon Law.

In 1505 Nicolaus Copernicus finished his studies in Padua, probably with the title of a "Licentiate" entitling him to practise medicine.

Many essentially important details from the biography of Nicholas Copernicus have not yet been explained sufficiently /10, 15, 23/. One of them is the problem of the university degree in medicine obtained by Copernicus which is important for the study of his activities as a physician. The historical sources which are available now are indirect and often contradictory. Szumowski /27/ maintained that Nicholas Copernicus had no university degree in Medicine but this statement is an oversimplification of historical research and gives rise to many erroneous conclusions. These conclusions are substantiated by the

thought, the members of the Chapter granted the request, instructing Nicolaus Copernicus to read medicine. The young scholar left immediately for Italy and as soon as he began attending lectures in Padua, in October 1501, he found himself surrounded by Polish students.

It is difficult to know now what made Copernicus choose Padua for his medical studies. It is certain, however, that the fame of Padua as a centre of eminent scholars was spread by Italians visiting Poland who referred to it as '*La dotta*' /learned/. Padua University had an additional reason for its good reputation: it enjoyed special privileges to ensure freedom of thoughts. The professors and the Rector of the university were elected by students. Several outstanding Polish physicians graduated from the medical faculty there: Jan of Ludzisko, Marcin of Zórawica, friend of Jan Dlugosz, the well known astronomer, doctor of medicine and humanist Jan Wels, and, foremost, Maciej of Miechów, one of the most enlightened intellects at the Jagiellonian University. Jan Ursinus, whom Copernicus used to meet while studying in Cracow, left Padua in 1487. Jan Ludzisko, professor of the Medical Faculty, Cracow University in his address at the departure of King Kazimierz Jagiellon for his coronation, spoke in defense of human rights: *quod omnes homines natura genuit equales*.../9, 15, 19/.

One of the important factors influencing the choice of Padua for medical studies was the university's apparent tendency to depart from the routine of scholasticism and dogmatism and to the principles of freedom and independence of thought, to the search for truth by means of close observation of natural and human phenomena /8, 9, 15, 23/.

In Padua, medical studies lasted three years and embraced four main subjects, which formed separate departments. Professors of theoretical medicine lectured on Avicenna's, *Canon of Medicine*, and Hippocrates' *Aphorisms;* third year students read Galen's Microtegmus. The third and fourth subjects dealt with practical studies, i. e. lectures on body temperature and special diseases. After two years, students could get a bachelor degree; after three years, a licentiate in Medicine. Moreover one year of practice under the direction of a senior physician was obligatory.

Contemporary professors of medicine at Padua were authors of

de hypothesibus motuum coelestium a se constitutis commentariolas" /c. 1515/ and later in the book, "*De revolutionibus orbium celestium libri sex*". Written over a period of more than ten years, this book was revised many times to include results of new observations of the sky made by Copernicus during that time /1, 2, 4/.

Some biographers have maintained incorrectly that Copernicus attended the medical faculty at the Cracow Academy. In reality he attended the '*facultas artium*', which gave him a preliminary philosophical training for further studies. This widened his horizons of knowledge and helped him gain practical experience of the way one branch of science complements another /6, 10, 15, 18, 23/.

The exact length of Copernicus' stay in Cracow in not known, but according to his biographer, L. Birkenmajer /2, 3, 4/, he stayed there till the spring or summer of 1495. Nicolaus and his elder brother, Andreas, spent the autumn of the same year with Lucas Waczenrode, Bishop of Varmia, who twelve months later, sent Nicolaus to Bologna to read law before taking up a high office in the church /1, 11/. In Bologna and Rome, apart from continuing his legal studies, Copernicus devoted particular attention to astronomy and frequently observed the sun and other planets. He also attended the lectures of such illustrious professors as the Latinist Filippo Beroaldo, the Hellenist Antonio Urceo, the versatile humanist Giovanni Garzoni, the philosopher Alessandro Achillini who described the caecal valve, which is now known incorrectly as Bauhin's valve, and others. However it was, the astronomer Domenico Maria Novara /1454–1504/ who made the greatest impression on Copernicus by redirecting his mind from critical negation towards positive observation and scientific research in order to build a new and fully valid system on the ruins of Ptolemy's theory. His studies at Bologna led Copernicus to think that the principle concerning the immobility of earth was not as self-evident as was generally supposed /4, 9, 15, 23, 28/.

After his four years' stay in Italy Copernicus returned to Varmia in the spring of 1501 and by the 27th July 1501, the Varmian episcopal council in Frombork were considered the applications of the brothers Andreas and Nicolaus for financial aid to study abroad. After much

credited with the power of influencing different organs. The connection between the position of the planets and constellations of stars, and the condition and functioning of tissues and organs, was the subject of abstruse research and serious scientific argument. Even such great scientists as Roger Bacon, the pioneer of inductive and experimental research on nature, and Servetus, the discoverer of pulmonary circulation, were ardent believers in astrology.

In 1491 Nicolaus Copernicus stepped into the world of universal knowledge symptomatic for that epoch. Soon his studies were to acquire a far-reaching significance in the fields of natural history and medicine. The trend, propagated in antiquity by Democritus, of interpreting natural phenomena in materialistic terms, died out in the Middle Ages. Young Copernicus, studying at the Jagiellonian University, was not aware at the time that his future achievements would represent a landmark in science, a turning-point in astrology and a proof of the extent to which true science needs /what was then called/ freedom of spirit, '*animus liber*'. During his studies in Cracow Copernicus became interested in astronomy and he made a bold and momentuous pronouncement concerning the order of the universe and the movement of celestial bodies. Astronomical principles, or more strictly speaking-theories of the structure of universe, were derived from Greek philosophy. One of those theories was based on the works of Aristotle and his commentators; on the other was put forward by Ptolemy and his followers. The principal thesis of both theories was the assumption that the Earth is immobile and lies in the centre of the universe. Both these systems were thus geocentric. Homocentric spheres carrying stars and planets were believed to be spinning round the Earth. This system of homocentric spheres was supplemented with the system of "elecentrics and epicyclics" by Ptolemy /2, 3, 4/.

During his studies in Cracow Copernicus began to see inconsistencies in the system of Ptolemy and the need for its radical alteration of this system. He decided to design a model of a new heliocentric system during his subsequent studies in Padua. This model marking the ultimate revolution in astronomy, required long observations extended over many years. These were promulgated in the treatise, "*Nicolai Copernici*

Wloclawek's cathedral school. His teacher was Nicolaus Wodka of Kwidzyń-on-Vistula, a well-known physician, humanist and astronomer. Most probably Wodka infused his pupil with an interest in science, particularly medicine.

In 1491 Copernicus' name appeared as "Nicolaus Nicolai de Thuronia" on the list of students of the Jagiellonian University. The first period of studies of Copernicus at the Cracow University /1491-1495/ occurred at the time when this school was at the height of its fame and prosperity. Access to the University was then open to all irrespective of social class. Lectures were held in Latin. The University contained four faculties; Theology, Law, Medicine and Philosophy. The faculties, however were not equal, the first three constituted the University proper and to enter one of the three principal faculties, one was obliged to attend first the preliminary course called "*Facultas Artium*". Copernicus attended this faculty and he found numerous examples of how man can master wide fields of wisdom and science, how science can complement science and how humanism can be cultivated in agreement with the exact sciences... /2, 7, 15/.

Copernicus read philosophy which in the Middle Ages opened the way to Theology, Medicine and Law. His further studies included astronomy, astrology and mathematics, under the tutelage of such outstanding astronomers as Jan of Glogów and Wojciech of Brudzewo, and the mathematicians Bernard of Biskupie and Wojciech Krypa of Szamotuly. Copernicus also came into contact with Stanislaw Bylina, with the geographer Wawrzyniec Korwin and the humanist, naturalist and physician Jan Ursinus. It is probable that Copernicus listened to lectures on the Aristotelian treatise *On the Heavens* and on Ptolemy's four books explaining the theory and movements of heavenly bodies. He also took a great interest in astrological predictions concerning life and death. This led him eventually to medical studies, because in these days astronomy, astrology and medicine were closely interlinked. It was generally believed that heavenly bodies influence the human constitution, and that their movements and positions affected the state of man's health. Macrocosm -the universe was supposed to be reflected in the microcosm -man's organism. The individual Zodiac signs were

NICOLAUS COPERNICUS AS PHYSICIAN*

1473–1543

On the fifth centenary of his birth

Witold Rudowski, M. D. Warsaw, Poland

The life of Nicolaus Copernicus is the story of a man who sought order in the universe and harmony in the movement of celestial bodies, and brought about a radical change in Medieval science by discovering objective truth about the world. Due to his heliocentric theory, Copernicus is known principally as an outstanding astronomer. Until recently, only a few scholars of his life and work knew that he was also a physician of great personal ability, deeply devoted to his patients, and scrupulous in carrying out his duties.

In the field of medicine " he was worshiped like another Aesculapius because he knew various medicinal substances which he tested, prepared himself, and administered to the poor who adored him like a deity..." Thus the historian Szymon Starowolski, in his biography of famous Poles, *Scriptorum Polonorum Hecatonas*, portrayed the man whose fifth contenary we now celebrate as one who created a new cosmology, an excellent physician, statesman, pastmaster in fine arts and even economist /3, 13, 15, 18, 23/.

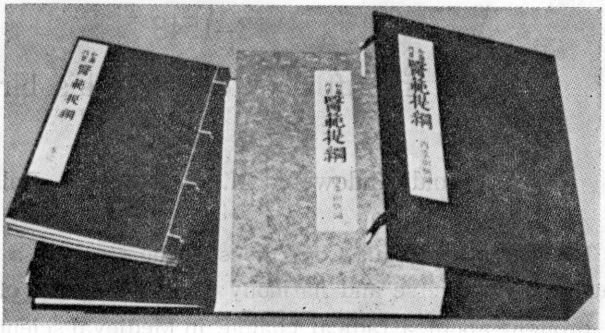
Nicolaus Copernicus was born on 19th February 1473, in Toruń, to a family which had moved from Lower Silesia to Cracow about 1350 and eventually settled in Toruń. The boy's father, who also called Nicolaus, was a merchant and traded on a large scale with Gdańsk. Nicolaus Copernicus senior died about the year 1483. His widow Barbara was left with four children, two daughters and two sons. It is possible that immediately following her husband's death, Barbara Copernicus sold all her property and moved from Toruń to Wloclawek, to her brother Lucas Waczenrode, who took over the care of her family. Nicolaus Copernicus, then twelve years old, began his education in

* The Institute of Haematology, Department of Surgery, Warsaw, Poland

和蘭内景 医範提綱
和蘭内景 医範提綱 内象銅版図

全三巻
全一冊

限定版 三〇〇部
頒価 三八、〇〇〇円



●解説

順天堂大学教授 小川鼎三

宇田川玄真（一七六九～一八三四）の著「和蘭内景医範提綱」は文化二年（一八〇五）の出版で、十九世紀の前半、西洋医学に志をもつ日本人が、おそらく誰でもがまず繙いた一書であったとおもう。解剖学を主とするが、生理学、病理学をも合せ説いていて、西洋医学の精髄を明快、簡略に紹介した傑作である。三年後の文化五年にその付図として「内象銅版図」が刊行された。これは亜欧堂田善の作である。日本で最初の銅版解剖図として名高い。おそらくこの付図は当時でも高価であったと推測する。

玄真は西洋の解剖書数種から訳しとって遠西医範三十巻をつくったが、厖大なので、その綱要をまとめて医範提綱と名づけ、この提綱をテキストにして門人に西洋医学の大体を講義した。門人の諏訪俊士徳がそれを筆記し整理して、医範提綱三冊本ができ上ったのである。玄真が用いた西洋解剖書の著者としてブランカルツ、パルヘイン、ヘルヘインインスロウの名が挙げられている。医範提綱は日本の医学に大きい影響をあたえたが、その一つの現われとして、「膵」や「腺」の字が初めて玄真の創始した国字として登場している。

売捌所／株式会社金原商店
製作所／財団法人日本医学文化保存会

血行障害に

●自社開発の新しい血行改善剤

メグリン®錠

（一般名：ヘプロニケート）

●血管拡張作用
●脂質代謝改善作用
●プラスミン活性化作用

〈包装〉錠（100mg）（コード番号：Y-MEXO
：100・1000・3000錠
〈薬価基準〉錠（100mg）1錠当り￥15.00

●使用上の注意 等については現品説明書をご参照ください。
●文献等ご要望の向きは吉富製薬学術部（大阪市東淀川区[illegible]）へ

製造＝吉富製薬株式会社
販売＝武田薬品工業株式会社

304-B2

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japan Society of Medical History

Vol. 19. No. 2 June 1973

CONTENTS

Articles

A Book of standard formulas "Tekitekisai-yakushitsukochuho" written by Koan Ogata ····· Yasuo OTSUKA ··· (119)

Seisetsu-Naika-senyo (2) ····· Toshio OTAKI ··· (165)

On the Epidemic of Smallpox in Tanegashima ····· Kazuo KAWAUCHI ··· (174)

The Correct Date of the First General Anesthesia by S. Hanaoka ····· Akitomo MATSUKI ··· (193)

Shakyosei and their Disease ····· Taku SHINMURA ··· (198)

Nicolaus Copernicus as Physician —on the fifth Centenary of his Birth— ····· Witold RUDOWSKI ··· (267)

General Anesthesia and Surgery by Seishu Hanaoka ····· Akitomo MATSUKI ··· (245)

Materials ····· (213)

Notes from Monthly Meeting ····· (226)

Miscellaneous ····· (228)

The Japan Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2-1-1, Bunkyo-Ku, Tokyo